COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!
戦闘員、派遣します！
暁なつめ
NATSUME AKATSUKI
ILLUSTRATION
カカオ・ランタン
KAKAO LANTHANUM
戦闘員、派遣します！
角川スニーカー文庫

戦闘員、派遣します！
COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!
「でかした！　よし、私は人を呼んでくる！
へへ……。へへへへ……、
なあアリス、六号、この手柄は山分けだよな？　頼むぞ!?」
スノウ
SNOW
スラムのみなしごの身から
近衛騎士団の隊長にまで
登り詰めた努力家。
ゆえに出世欲が強く、
手柄の取り分にうるさい。
SNOW'S VIEW
私が手柄の機会を与えたのだ。
山分けにしてやっただけ、ありがたく思え！
この巻のメインヒロイン

「キサラギ社製美少女型高性能アンドロイド、キサラギ＝アリスちゃんだ。
お前と同じ平社員だからな、タメ口を利いてもいいぞ」
キサラギ＝アリス
KISARAGI ALICE
キサラギ社の技術の粋を尽くした
高性能アンドロイド。
過度に暴力を振るわれると内蔵されている
動力炉が暴走し自爆する。
「私はロゼ。そう、戦闘用人造キメラのロゼ……。
あなた達に、この私を使いこなせる……？」
ロゼ
ROSE
カー○ィみたく
コピー能力を持つキメラ。
創造者であるおじいちゃんからの
遺言を大切にするあまり口調が……
正直かなり痛い。
「隊長は妻帯者？ 彼女なんかはいるのかしら？ ちなみに私は独身よ。
こんなにいい女なのに、なぜか不思議と彼氏もいないわ」
グリム
GRIMM
大司教だけどビッチ。
ALICE'S VIEW
自爆は悪党のロマンだろうが、なにが悪い。
ROSE'S VIEW
でも、おじいちゃんが、おじいちゃんが……。
GRIMM'S VIEW
私だけ紹介ひどくない!?
偉大なるゼナリス様、このページの制作者に災いを！
魚の骨が喉に刺さったときの苦しみを味わうがいい！
自己紹介

戦闘員六号的 正しい軍事行動①
「隊長、そのセリフはやめませんか？
軍事作戦のはずなのに物凄い悪事に加担している気になってきます……」
ヒャッハァ！ 逆らうヤツは皆殺しだぁ！
命が惜しけりゃ荷物を置いて失せやがれ！
ROKUGOU'S VIEW
んな事言われても、戦闘員マニュアルにある、
敵への正式な降伏勧告だぞ？

よし、次は
手を後ろについて、
脚を開いて
腰を落として
みようか。
こら、その手をどけろ！
手は後ろに！
「「「うわぁ……」」」
ハイネ
HEINE
魔王軍四天王幹部
炎のハイネの異名をもつ実力者。
おっぱいが大きい。
褐色亜人マニアが
狂喜乱舞しそうな体躯である。
HEINE'S VIEW
六号……！　この外道め！
貴様だけは絶対に許さない!!
戦闘員六号的 正しい軍事行動②

悪の組織は
二つも
いらねえ、
てめえはここで消えやがれ！
戦闘員六号的 正しい軍事行動③

CONTENTS

COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!

口絵・本文イラスト／カカオ・ランタン

口絵・本文デザイン／岩井美沙（バナナグローブスタジオ）

戦闘員、派遣します!

暁 なつめ

角川スニーカー文庫

CONTENTS

プロローグ

「……もう一度、あなたの出身国を聞いてもよろしいですか？」
「日本です。ニッポンでもニホンでもジャパンでも、お好きな呼び方でどうぞ」
「……すみません、日本という国を、わたくし存じ上げていなかったもので……」
「無理もないです。極東の小さな島国ですから」
「ええと……。それで、この履歴書にある、あなたの以前勤めていらした『秘密結社キサラギ』という会社は、一体どんなところだったのかを伺って

も……」
「秘密結社なので秘密です」
「そ、そうですか……。え、ええと、では、この履歴書の特技の欄にある、……全方位型回転バッソー……？　というのはなんでしょうか？」
「必殺技です」
「……必殺技？」
「はい、俺の必殺技です。この技で、数多のヒーロー達を地に沈めてきました」
「……ヒーローっていうのはなんなのでしょうか？」
「敏です」

「そ、そうですか……。すみません、先ほどから質問(しつもん)攻(ぜ)めで……。ええと、つまりあなたは戦える人、という認識(にんしき)でよろしいんですね？」

「ええ、それで問題ないです」

「――戦闘(せんとう)員やってましたから」

一章

工作員、派遣します

1

『キサラギ』という名の企業（きぎょう）がある。

それは、今や地球上の誰（だれ）もが名を知る大企業。

俺は今、そのキサラギ本社の会議室で。

「——と、いうわけだ六号。分かったか？」

「六号、分かったか？」

「ちっとも分かりません」

　俺の即答を受けた幹部達が、なんて物分かりの悪いヤツだと言わんばかりにため息を吐く。

「……では、もう一度説明しよう。戦闘員六号。貴様には、我ら秘密結社キサラギの尖兵としてスパイ活動を行ってもらう。貴様の任務は、現地生物の生態調査、原住民がいればその軍事力のスパイ活動。そして、侵略に値するだけの価値のある、資源や土地があるかを調べるのだ」

「はぁ……」

　ここまでは分かる。

　そう、ここまでならいつもの任務だ。

「そして、その派遣先は地球外惑星となる。分かったか？」

「分かったか？」
「やっぱり分かりません」
　再びの俺の即答を受けた二人の大幹部は困惑の表情を浮かべていた。
　腰まで伸ばした長く艶やかな黒髪に、寒気すら覚える程の美しさを持つ氷結のアスタロト。
　ウェーブのかかった燃えるような紅い髪を持ち、豊満な体躯を惜しげもなく晒す業火のベリアル。
　二人の女幹部は、水着同然のきわどい衣装をまとい、常日頃から嬉々としてそう名乗っていた。
　先程から俺に説明を続けていた氷結のアスタロトが、もう一度ため息を吐く。
「……六号、一体何が分からないの？　私は難しい事は言っていないわ

よ？　スパイとして潜入してきなさいと命令しているのだけど」
　その隣では、業火のベリアルがうんうんと頷いていた。
「任務については分かります。分かんないのは、地球外のくだりですよ。二人とも、変なコスプレしたり痛々しい自称まではまあ、俺もなんとか付き合ってきましたが……。いい大人が地球外惑星がどうとか言い出した日には、流石の俺も引きますよ？」
「き、貴様、幹部服をコスプレとか言うな！」
「痛々しい!?　六号、お前あたし達の事をそんな風に思ってたのか!?」
　色めき立つ二人の幹部。
「いや、二人がおかしな事言い出すのはいつもの事なんですが、今日は特にぶっ飛んでますよ？　異世界転生モノのアニメでも見て影響されたんですか？」
「き、貴様言わせておけば！　いいか、よく聞け戦闘員六号！　今現在、我

ら秘密結社キサラギは世界征服を目前にしている。これは分かるな？」
「まあ、分かります」
額に青筋立てながらも、アスタロトが忍耐強く説明してくる。
世界征服。
そう、あの世界征服だ。
俺が所属するこの会社は、自ら悪の組織を名乗り、地球を支配するためにあらゆる悪事に手を染めてきた。
かくいう俺も、入社と同時に改造手術なるものを施され、戦闘員としてこき使われている。
世界征服を目標に掲げ、もはや秘密でもなんでもなくなった超大企業、悪の組織、秘密結社キサラギ。

もはやこの巨大組織に対して軍事で圧倒できる国はなく、経済によるささやかな反抗がなされているのみだったが、それも時間の問題だと思われていた。

「では世界征服が完了したならば、お前達戦闘員はどうなると思う？」

俺はアスタロトの質問の意味が分からず首を傾げる。

「……？　世界征服を終えたなら、後は俺達が支配者になって残る余生は酒池肉林の放蕩三昧でしょう？」

「たわけ。大規模なリストラだ」

「「えっ」」

突き放すようなアスタロトの答えに俺とベリアルの声がハモる。

「リストラ……。って、ええ？　えっと、クビって事ですか？」

「そうだ」
　会議室がシンと静まり返った。
「……おおおおい！　おま、お前ふざけんなよ今更!!　さんざ人をこき使って危ない目に遭わせといて、用が済んだらポイか冷血女！　人に改造手術まで施して、体を傷物にした責任取れよ！　具体的には、良い主夫になるから同棲させろください!!」
「なあ、あたしも!?　幹部の中で戦闘担当のあたしもリストラなのか!?」
　俺とベリアルがアスタロトに掴みかかるが、氷結という異名の通り涼しげな顔で……。
「まあ落ち着け二人とも……。こっ、こらっ六号、ちゃんと順に話をするから服を掴むのは……、ズレるズレる！　ちょっとやめて！　幹部服は露出が多いんだから、危ない危ない!!」

……ハァハァと荒い息を吐きながら、怯えた顔で涙目になったアスタロトは自らの身を抱き締めるようにしながら距離を取る。
「まったく、二人とも話を聞け！　まずベリアル。お前は最高幹部の一人だ、リストラはない。世界征服が完了しても最低限の軍事力は必要だ。――そして、戦闘員六号」
　ほっと安心した吐息を漏らしているベリアルとは違い、下っ端戦闘員の俺はドキリとした。
　そんな内心を見透かすかのように、アスタロトの目が俺をしっかりと捉えてくる。
「ベリアルとは違いお前はただの戦闘員だ。とはいえ、キサラギが発足した当初からいるメンバーでもある。我々幹部連とも親密だし、もはや最高幹部の一人と言ってもいいぐらいだ」

「なら、もうちょっと給料上げてくれませんか？　俺、高校の時からここにいますが、未だにバイトの頃の給料のままなんすけど……」
「しかし！　お前一人を優遇し、他の戦闘員をないがしろにすれば我が組織は破綻する！」
　給料の話ごまかしやがった。
「……でもどうすんです？　ここは公平にくじびきでリストラしますとか言ったら、流石の俺も改造されたこの体でどつきますよ？」
「っ、た、たわけ、だからこそ、先程の話になるのだ！」
　俺の微かな本気を感じ取ったのか、腰が引けた体勢で距離を取りながらアスタロトが言ってくる。
「だからな、六号。地球を支配したなら、新しい支配地を探せばいいって事だよ。リストラの話は今初めて聞いたけど、以前から皆で色々話はしてたんだ。戦争がなくなったら、みんな仕事が減るねって。占領後の統治に力を入

れるから、あまりお金の無駄遣い(むだづか)はできないんだってさ」

アスタロトの隣では、ベリアルがそんな事を言ってきた。

「だから地球外惑星云々(うんぬん)言ってたんですか？　というか、そもそもそんな技術があるのなら、巨乳の美女しかいない世界にでも、俺がとっくに行ってますよ。でもまずは、火星や金星にでも行く技術を開発してからでしょうに」

バカな子を見る目で告げる俺に、二人は何か言いたそうな表情を浮かべるも。

「……その話の続きは、リリスの部屋で行うとする。六号、付いて来い」

そう言って、いつになく真面目(まじめ)な顔で背を向けたアスタロトの後を、俺は首を傾げながらも付いて行った——

——三人しかいない最高幹部の最後の一人、黒のリリスの研究室。

そこには、一体何に使うのかも分からない意味不明な物が多数転がっており、中でも一際目に付いた物が……。

「六号。これが何か分かるか？」

そう言ってアスタロトが手のひらを向けたその先には、何やら大がかりな機械が取り付けられた、人が数人は入れそうな大きさのガラスポッド。

「なんすかコレ？　映画に出てくる転送とかするマシーンみたい」

と、その時。

この研究室の持ち主が部屋の奥から声を上げた。

「その通りだよ六号！　君はアホだが勘はいいね！」

俺をアホ呼ばわりしたのは、黒髪をおかっぱに切り揃えた白衣姿の美少女、黒のリリス。

俺の体に改造手術を施した、頭にマッドが付く研究者だ。

「その通りって……。えっ、転送ってマジですか？　このガラクタみたいのが？」

「ガラクタとは失礼な。コレは人類にとっての命題とされている、全ての問題を解決するかもしれない、僕が生み出した最高傑作の一つだよ！」

普段は陰キャラなクセにいつになくテンションの高いリリスを見て、アスタロトが眉をひそめた。

「なんだリリス、お前はまた白衣なんか着て。幹部服を着んか幹部服を」
「やだよ恥(は)ずかしい。それに白衣着てると科学者っぽいでしょ？　この際だから言わせてもらうけど、二人とも安いアダルトビデオに出てくるコスプレ嬢(じょう)みたいだよ」
「あ、それ、俺も思ってました」
「「な、なんだとう!!」」
今更ショックを受けたのか、アスタロトとベリアルが動かなくなる。

というか、今はそっちの二人はどうでもいい。
「……つーか転送機ですか、またエライもん作りましたね。リリス様は世界一の科学者だって組織内でよく聞きますが、無駄な研究に金だけかけてるごく潰しだと思ってました」
「……あ、相変わらず君は、上司に向かって言ってくれるね」
　軽くショックを受けている様子の僕っ子をよそに、俺はマジマジとポッドを観察。
「で、これと俺への任務がどう繋がるんですか？」
　そう言って首を傾げる俺に向け、リリスがよくぞ聞いてくれたとばかりに目を輝かせた。
「君は宇宙人はいると思うかい？」
「そりゃいるんじゃないですか？　分かんないですけど」

なんせウチの秘密結社には怪人なんてのがいるし、世の中にはヒーローなんて謎の連中だって存在するのだ。
なら、広い宇宙に今さら何がいたっておかしくない。
「現在この宇宙には、確認できているだけでも地球と酷似した惑星が多数発見されている。水があり、緑があり……。恒星からほどよく近く、大きさも地球と同サイズの、そんな惑星がね。……そこで、日頃頑張っている君へのご褒美だ」
ご褒美？
と、リリスは不思議そうな表情をしている俺をジッと見ると。
「外の世界に興味はないかい？　この広大な宇宙には、数えきれないほどの恒星が浮かんでいる。更にはその一つ一つの恒星の周囲を数多の惑星が周回しているわけだ。つまり宇宙には、天文学的数字という言葉の通り、数えるのもバカらしくなるほどの無数の世界が存在しているのだよー

そのユニバースにはその無数の世界が存在しているのだよ」
段々興奮してきたのか、リリスは顔を上気させ、バッと両手を広げ熱弁する。
「そこはまさしく未知の世界。未開な原始人しかいない星かもしれない。地球より遥かに文明が発展した星かもしれない。それこそ君の大好きな、剣と魔法の世界があるかもしれない。そんな世界に行きたくないかい？」
「俺が何をやっても無条件で好かれる星や、美的感覚が違い、俺が超イケメンに見える星、俺以外の男が一人も存在しない星だってあるかもしれないわけですね。つまり転送機でその星々に送ってくれると。じゃあ早く行きましょう、俺はいつでもいいですよ」
まくしたてる俺に軽く引きながら、リリスは俺に背を向けると研究室の奥に手招きした。
「そ、そうか。承諾してくれて何よりだよ。それに、覇権するのは俺一人じゃ

こそ。そうだ、承認してくれて何よりだ。それと、派遣するのは君一人しか
ない。……アリス、おいで」
　その呼び掛けに応じやってきたのは、白のワンピースを着た金髪碧眼の女の子。
　年の頃は小学六年生ぐらいだろうか？
　そいつはちょっとヨロヨロしながら、小さな体には不釣り合いな大きなリュックを背負っていた。
「なんすかこのガキ？　俺、子供は嫌いなんですけど」
「ガキって自分の事言ってんのか？　下っ端戦闘員が調子に乗んなよ」
「…………。」
「おっ？　今のはお前が言ったのか？　なんだコラクソガキが、俺は子供相手でも容赦しねーぞ？　こちとら悪の組織の戦闘員だ。世界一の大企業、キサラギを舐めんじゃねーぞ」

「自分に暴力を振るえば、内蔵されてる動力炉が暴走してこの辺一帯は消えてなくなる。それでもいいならやってみろ。それと自分の正式名称はクソガキじゃなく、キサラギ社製美少女型アンドロイドだ」

……アンドロイドってマジか。

いや、どことなく無機質な声色といい表情といい、言われてみればそんな気もするが。

「早速仲が良さそうで安心したよ。では改めて紹介しようか。この子はアリス。君のサポーターとして作られた、高性能のアンドロイド。僕のもう一つの最高傑作さ」

「自分には、お前ら戦闘員の安い命とは違って莫大な開発費がかけられてんだから大事にしろよ。お前はアホだと聞いてるからな。現地での頭を使う仕事は任せとけ」

「……すいません、俺、この口の悪い上に危険なガラクタ要らないんですけど」

言いながら、俺はポッドの前に立つと自分の武装を確認した。

右の腰には使い慣れたハンドガン。

予備の銃弾はベルトにたっぷりと下げてある。

逆側の腰には、昔ボーナスで買ったお気に入りのバトルナイフ。

未知の世界への装備品としてはハッキリ言って心許ないのだが……。

「その様子だと、行く覚悟は決まったみたいね」

コスプレ嬢呼ばわりのショックから立ち直ったアスタロトが、普段は冷たい

その表情に、柔らかな笑みを浮かべて言った。
……それは、詐欺まがいのポスターに釣られてバイトの面接で出会った時、秘密結社なんていかがわしい組織で働く気になってしまった、俺の好きな笑顔。
なんだかんだいいながら、俺が悪事にまで手を染め、世界を相手に戦争する事すらいとわなかった、その笑顔。
「行きますよ。行きますとも！　要はあれっすよね？　俺は全戦闘員の中からよりすぐって選ばれた、キサラギ代表みたいなもんですもんね！」
意気込む俺に、もちろんアスタロトは力強く……。
「え？　……あ、ああそうだ！　そうだとも！　全戦闘員の中から、こんな重要な任務はお前しかいないなと！」
「おい、どうやって決めた。ベリアル様、先発隊の選出はどうやったんです？」

力強く頷かなかったアスタロトではなく、まだ部屋の隅っこで蹲まってぶつぶつ言っている、嘘の吐けそうにないベリアルに話を振る。

「えろくない……幹部服はえろくない……。……へ？　選出？　確かアスタロトがサイコロ振って」

「貴様には期待しているぞ戦闘員六号！　ほ、ほら、時間もないんだしとっとと入りなさい！」

言いかけたベリアルを遮り、俺をグイグイとポッドに押し込むアスタロト。

……無事帰ってきたら絶対幹部待遇の給料にしてもらおう。

「ちなみに必要な武装やその他の物資については、この小型の転送機でメモを送ってその都度申請したまえ。これでメモを送ればその時点で、君やアリスに埋め込まれているチップを介し、座標が分かる」

リリスはそう言って腕時計みたいな物を俺とアリスに手渡し、安心させ

るようにニコリと笑った。
　装備がショボくて心配だったとこだが助かった。
　どんな場所に送られるのかは知らないが、キサラギ社の装備が使い放題であるのなら何が相手でも怖くない。
　ガラスポッドに入った俺に続き、口の悪いポンコツも勝手に中に入ってきた。
「おい、アリスとか言ったな。お前攻撃食らうと動力炉が暴走するだの言ってたけど大丈夫なんだろうな。くれぐれも自爆はすんなよ？」
「自爆は悪のロマンだぞ。まあ大丈夫だ。自分はお前のサポーターとして作られたらしいからな。サポート相手を殺してしまっては論外だから、時と場所を考えるさ」
　自爆自体すんなって言ってるんだけど、コイツ本当に大丈夫なのか。

「戦闘員六号」
アスタロトが、異名の元になった冷たい無表情で俺の名を呼ぶ。
が、すぐにその表情を不安気に崩すと。
「……その、なんだ。貴様とは、お前がまだ学生だった頃からの付き合いだ。
先ほども言ったが、私は貴様の事を、この組織の最高幹部の一人だと思っている。それは、嘘じゃない」
出発前に突然何を言い出すんだこの女は。
この組織にバイトとして入ったのは、俺が高校一年生だった頃だ。
それから俺達は、わずかな期間で世界の大半を支配してしまった。
軍隊とやりあったかと思えば、ヒーローを自称する全身タイツの変態集

団と死闘を繰り広げた事もある。
その変態集団が操る、そんな技術があればもっと他の事ができるだろうにと言わしめた、合体変形人型ロボットと戦った事すらある。
それらはとても危険で理不尽で、何度も辞めてやると叫んだもんだが、
まあ……。
「楽しかったですよ、みんなと一緒にやってきたこの組織。何が起きるか分からないし、無事帰って来れるとも約束はできませんけど、今回の派遣先にもちょっと期待してますし。まあ、できるだけ帰ってくるように善処します。んで、帰ってきたら幹部並みの給料に上げてください」
「バカめ。そこは、ちゃんと無事に帰ってきますと約束しろ。我々三人は、いつでもお前の帰りを待っているからな。帰ってきたら、貴様を四人目の最高幹部にして四天王を名乗るのも悪くない」

俺の懐古に、アスタロトは不敵な笑みを浮かべながらそんな事を言ってきた。
……つーか俺、もう二十歳前なんだがこの歳でなんたら四天王とか名乗るのは恥ずかしいな……。
「うーん、やっぱあたしが行きたいなぁ……。いいなー六号、知らない世界を冒険できてさ。サイコロに、あたしの目が出るように重り仕掛けとけばよかったなあ」
「……サイコロに重り？　なんだ、ベリアル様も選ばれる中にいたんすか？」
　俺の質問にベリアルが、何言ってんだとばかりに笑う。
「もちろん入ってるに決まってるだろ？　サイコロの1、2がアスタロトで3、4があたし。5がリリスで6がお前だ。アスタロトが、最初はもっとも信用の置けるメンツの中からじゃないとって言うから、この中から選ぶ事になったんだけどさ。サイコロ振って公平に決めるとか自分で言ったくせに、6が出た

時ごねてさー。やっぱ危険だから私が行くとか言」
「よし！　では、準備はいいか戦闘員六号!!　これより貴様らに、正式に任務を与える！」
　何かとても大切な事を教えてくれようとしたベリアルを、アスタロトが顔を耳まで火照らせて、裏返った声で遮った。
　なんだよ、ほんとに幹部扱いされてるじゃないか。
　ついでに、大事にされてるじゃないか。
　……ちょっと、鼻の奥がジンと熱くなる。
　顔を赤くしながらもなんとか無表情を装うアスタロトに、
「……アスタロト様、行く前にギュッてしていいですか？」
「任務を与えるっ！　貴様への指令は二つ。まず一つは、現地で安全だと思

われる基地を作った後、そこで転送機を組み立て、現地と地球の往復を可能にし、無事に帰還する事だ。これについては主にアリスがその任務を担当する」

　俺の言葉をガン無視するアスタロトをニヤニヤと見ていたベリアルが、

「おい六号、行く前に抱き締める程度じゃなくチューぐらいやっとけ。こんな時だしアスタロトも怒んないさ」

「そんな事をしたら凍結させるわよ！　ああもう、説明が進まないでしょう！　……二つ目は、現地の戦力、資源や土壌の調査よ。この任務は戦闘員の仕事の他にも、現在地球が抱える、人口増加による食糧問題、戦争による土壌汚染、海抜の上昇による居住可能エリアの縮小など。あなたの派遣先が人類の移住可能な星であれば、それらの問題を一気に解決する事ができる可能性があるわ」

しょう。

……え？

「あれ、ひょっとしてこれって、組織どころか地球の命運を懸(か)けたかなり大きな任務なんじゃ？」

「そりゃそうよ、だから失敗は許されないわ。そもそも失敗したら、あなたが帰れなくなるのだから注意なさい？　先ほどリリスが言ったように、欲しい装備があったらメモを書いて転送なさい。といっても今のところは、このガラスポッドに収まる大きさの物しか送れないわよ？」

……なるほど。

　つまり組織が全面バックアップ態勢でサポートしてくれ、装備も使い放題と、そういう事か。

「そして、週に一度は経過報告を送る事。……あなたが元気でやっている様子を、きちんと伝えなさい」

　そう言って、アスタロトが小さく笑う。

そんなアスタロトを、俺は全力で抱き締めようとしたがポッドの中に蹴り込まれた。

「──さて、と。準備はいいかい？」

ポッドに入った俺とアリスを前にして、リリスが最後の確認を行っている。

その隣ではアスタロトが腕を組みながら俯いており、ベリアルはといえば、心配そうな顔でぺたりとガラスに張り付いて、まるで俺の顔をしっかりと目に焼き付けようとするかのように、ジッとこちらを見つめていた。

「もっと気楽に送り出してくださいよ。なんか緊張してくるじゃないですか」

俺の言葉にアスタロトが、

「……そう、そうね。あなたが覚悟を決めているのに私達が心配していたら

不安を与えるわね。……無事を祈ってるわ、戦闘員六号」
　まるで今生の別れを告げるかのように、真剣な顔で言ってきた。
「大げさな。正直、長期出張になるとは思ってませんよ？　いきなりいい感じの拠点になりそうな建物を占領できれば、ささっと転送機を組み立てて、速攻で行き来できるようになるわけですし」
「だって、心配なものは心配だ。転送自体がうまくいくかだって分かんないじゃんか？」
　気楽そうに言う俺にベリアルが、寂しそうな顔でそんな事を。
「安心してくださいよ、リリス様が失敗なんてするわけがないじゃないですか。世界一の科学者なんでしょう？」
「「…………」」

俺の言葉にアスタロトとベリアルが、無言で顔を見合わせた。
その隣では、リリスが黙々（もくもく）と、俺達を送り出す準備を進めている。
「リリス様に聞きたいんですが、転送の成功率ってどれぐらいなんですか？　転送実験の回数は？　あと、確認されてる他の惑星（わくせい）に転送するって言っても、星の地表に正確に、バッチリ送れるものなんすか？」
「転送実験の成功率は今のところ１００％だ。実験回数は黙秘（もくひ）する。バッチリ送れるのかという質問にも黙秘する」
「すいません、やっぱこの任務やめときますね」
そう言ってポッドから出ようとする俺の腕を、アリスが掴（つか）んで放さない。
「おいポンコツ邪魔（じゃま）すんな。ちょっと一旦（いったん）ここから出させろ」
「今さら何を怖気（おじけ）づいてんの？　マメにバックアップ取っておくのは常識だ

そ下っ端」
……こいつやっぱりポンコツじゃねーか！
「このバカ、人間様の俺はお前みたいにセーブやロードはできないんだよ！　あと、向こうで不慮（ふりょ）の事故に遭（あ）いたくなかったら下っ端呼ばわりすんな！」
「ふぉいやへろ、ほおをひっはるな、人工皮膚（ひふ）がのひるひゃないは。じゃあ下っ端はやめてやるからお前も自分の事はアリスさんと呼べよ」
「うん。どうせグダグダやってても進展しないし、もう送り出してしまおうか」
俺がアリスの頬（ほお）を引っ張っている中、リリスが物騒（ぶっそう）な発言をしていた。
と、その時、俺とアリスが収まっているポッド内に突如煙（とつじょけむり）が噴出（ふんしゅつ）した。
「ぶわっ⁉　リリス様、なんか煙が！　得体の知れない煙がめっちゃ噴（ふ）き出してるんですが！」

「それは君達が保有している菌を、できるだけ向こうに持ち込まないよう殺菌しているんだよ。それと、現地で未知の病に侵されたらこちらには帰ってこられなくなるから気を付けたまえ」

その物騒な言葉を聞いて、俺はいよいよポッドを叩き割ろうとするが、アリスがちょこまかと妨害してくる。

「……戦闘員六号！　貴様の改造された肉体と我々の開発した戦闘服なら、どんな環境においても適応できるだろう。無事、帰還することを祈っている！」

「お前なら、ちゃんと帰ってくるって信じてるからな！　お土産は頼んだぞ！」

「いやちょっと待て、待って待って！　おい、もうちょっと実験とか色々するべきじゃないか？　なあ、おい！」

アスタロトとベリアルの言葉に対し、必死に叫ぶ俺に向け、
「よく聞くんだ六号。今のところ一度も失敗していないのだから成功率は１００％。でも、何度も実験して事故が起こったら？　そう、成功率が１００％じゃなくなるんだよ。つまり、何度も実験してしまうと成功率が下がり、君が安全に向こうに行ける確率も下がってしまうというわけさ」
……リリスの言葉に一瞬考え。
「そんなわけねーだろ、その確率の計算はおかしい！　お前絶対天才科学者じゃないだろ！　バカと天才は紙一重って言うが、お前は紙一重でバカの方だ！」
「し、失礼な！　相変わらず、頭に血が上ると口の利き方を忘れるヤツめ。世界中が欲しがる僕の頭脳にそんな事を言うのは、この世で君ぐらいのものだよ。では、行って来たまえ戦闘員六号！　良い報告を待っているよ！」

リリスはそう言って、転送機を起動させ——!

「ちくしょう、帰ったら覚えてろよ僕っ子がー!!」

2

転送されたその瞬間から、勢いよく吹き付ける冷たい風が顔に当たる。

恐る恐る目を開けると、そこは——

「バカっ!　あの女はやっぱりバカだ!　大バカだ!　うわああああああ死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない!」

「泣き喚いてないで少し落ち着け。自分が目算したところ地上への距離は約三万メートル。このまま激突するまであまり時間は残ってないぞ」

俺が転送されたのは、地上が霞んで見えるほどの上空だった。

「この状況で落ち着けるかよ！　アリス、お前高性能なんだろ⁉　実は飛行形態を取れたりするんだろ？　そうなんだよな⁉」

「自分に内蔵されているのは自爆機能ぐらいのもんだ」

「ポンコツがあああああ！」

落下に伴う風の音が耳元でゴウゴウと吹きすさぶ中、俺と同じく高速落下中のアリスが、背負っていたリュックをこちらに差し出す。

「ほら、そいつを背負え。賢い自分とリリス様はこんな事ぐらい想定済みだ。地上近くに転送座標を設定すると、僅かな計算の誤差でも地面に塗り込められるからな！

められるたらな」
受け取ったリュックをよく見れば、それはキサラギ製のパラシュート。
クソ重い戦闘服を身に着けていても大丈夫な、降下作戦用の特別製だった。
言われるがままにそれを背負うとアリスがこちらにしがみつく。
「予算がねえんだ、締めるところは締めないとな。パラシュートを開くタイミングはお前に任せるが失敗すんなよ。自分が地上に激突したら、辺り一面が消し飛ぶからな」
「お前の分はないのかよ!?」
コイツを連れ歩く事自体が罰ゲームじゃねーか!
パラシュートを背負った事で心に余裕ができた俺は、改めて地上を見下ろした。

「おいアリス、見ろよ。街っぽい物があるぞ」

「というか未開拓地が多いな。知的生命体がいるにしても人口は少なそうだ」

　俺達の着地予想地点から離れた場所には、城塞都市っぽい物が見える。ど真ん中に大きな城を置いたその都市の周りには、農地ごと囲むようにして巨大な城壁がそびえ立っていた。

　そんな城塞都市の外は赤茶けた荒野が広がっており、それが世界を覆いつくすかのごとく先が見えない、深い森へと繋がっている。

　結構な時間を降下する間に周囲の地形を確認した俺は、無事に着地を終え息を吐いた。

「……よし。アリス、早速あのバカ上司にこっちの座標を送ってくれ。もう安全な拠点もクソもあるか。転送機とやらの部品送ってもらってここで組み立

て、とりあえず一回帰るぞ。そんで殺されかけた分、あの僕っ子が泣くまで乳揉んでやる」

「こんなとこじゃ組み立てられないぞ。超精密機械だからな。埃一つないクリーンルームじゃないとダメだ。それに、装置を使って移送空間を安定させるまでに一月近くかかる。帰りたかったらまずはアジトを手に入れるんだな」

…………えっ。

「……またかよ、またハメられた！　あいつらもう許さねえ！　幹部連中に改造手術を受けてみないかって言われた時も、強化された肉体でバリバリ仕事をこなせば出世だって思いのまま、大金稼いでモテモテだって抜かしたんだぞ！　今の給料いくらだと思ってんだ！」

「お前の事情は知らないが、そう悲観する事はないぞ。広い惑星の中で、ピンポイントで知的生命体の集落らしきものを発見できたんだ。これは非常に

幸先がいい。まずは、降下中に見付けたアソコに向かうとしよう」
アリスはそう言うと、城塞都市らしき場所に向け、スタスタと歩き出した。
俺達が降下したのはだだっ広い荒野のど真ん中。
ここで泣いて駄々を捏ねていても事態はちっとも進展しない。
しかし、あそこに行くまでどれだけ時間が掛かるのやら……。
「おい、さっきはバタバタしてたから省いたが、改めて自己紹介だ。俺は今までどんな戦場でも生き残ってきた、キサラギ最古参のエリート戦闘員。そう、戦闘員六号さんだ」
俺はアリスの後を追いかけながら改めて名前を名乗る。
「自分はキサラギ社製美少女型高性能アンドロイド、キサラギ＝アリスちゃ

んだ。立場的にはお前と同じ平社員だからな。タメ口を利いてもいいぞ」
「俺の方が先輩なんだから、タメ口を利いてもいいぞってのはこっちのセリフだがまあいい。それよりお前、何ができんの？　俺は戦う事しかできないけど。あっ、戦うといえば武器だよ！　リリス様が言ってたじゃん、物資が必要な際にはコレを使えって。転送機が無理なら、せめて移動用のバギーを送ってもらおうぜ」
そう言って隣に並んだ俺に、アリスはピタリと足を止め。
「その事について説明してやる。おい六号、お前悪行ポイントはどれだけある？」
——悪行ポイント。
キサラギが悪の組織として成り立っている理由の一つがこいつだ。

個人個人に埋め込まれたチップにより、その者が行った悪行がポイントとして加算される。
そこまで無理して悪事を行わなくてもいいじゃないかと思うのだが、ウチの幹部達にとって悪の組織であるという事は何よりも大切な事らしい。
このポイントを悪事を行って貯めていき、それを装備品や報奨金などに交換できる制度がある。
悪事を重ねて模範的な悪の組織の一員になり、貯め込んだポイントを使って上質な装備を手に入れれば、戦いの際にはより活躍できるようになる。
そうなれば当然評価も上がり、どんどん上の階級にいけるわけだ。
しょっぱい悪事にしか手を染められない俺は、組織の連中からよく白い眼を向けられたものだ。

最高幹部達いわく、キサラギ社員たるもの、ただの獣や小悪党ではなく、悪のカリスマであれという事らしい。
ちなみに、俺には彼女達が何を言っているのかさっぱり分からない。
「今のポイントは三百ってとこかな」
「……あの城塞都市を二人で侵略するには心許ないな。仕方ない、ポイントは節約して徒歩で向かい、あそこにスパイとして潜入するぞ」
この状況でいきなり侵略とは物騒な事を。
「……いや、ちょっと待て。物資送ってもらうのに悪行ポイント使えって言ってんの？　どんだけブラックなんだよウチの会社は。これだけの巨大プロジェクトだぞ、もっと金かけるのが当たり前だろ！」
「他にも候補になっている惑星は、それこそ星の数ほどあるからな。お前は惑星探索員第一号だが、他の星だっていずれは調査するんだ。その一つ一つにいちいち大金かけてはいられんよ。第一、まだ地球の征服だって完全には

終わっていないんだからな」
……なんか、RPGゲームやなんかで、最小限のお小遣い（こづか）だけ渡（わた）されて、魔（ま）王倒（おうたお）しに行けって言われる勇者の気分だ。

「かといって、戦うしか能のない俺が断れもしないしなあ。くそ、リストラを盾（たて）にするとかふざけやがって、さすが悪の組織だ！」
「リストラが嫌（いや）なら頑張（がんば）るこった。ここに人が住めるとなれば、開拓作業に未知の生物との戦闘（せんとう）など、お前らの仕事には困らないぞ。少なくともここの大気成分は、お前が呼吸し活動するには充（じゅう）分（ぶん）な環境だ。それだけでも条件は大分良いはずだ」
　アリスはそう言って、俺の首筋をぺたぺたと触（さわ）りながら……、
「だったらなおさら悪行ポイントなんてケチな事言わずに最新の装備を転

送しろよ！　そうしたら、どんな相手だろうがこの六号さんが痛い！　おいコラ、今俺に何打った！」
「お前が未知の病に侵されないように、免疫(めんえき)力を上げるナノマシンを打ったんだよ。まあ、これから向かう城塞都市にいる知的生命体がチョロいといいな。できるだけ地球に似通った星を選んだから、お前と同じホモサピエンスが文明を築いている可能性が高い。高層ビル群も見当たらなかったし、未開な連中ならこの任務は楽勝だな」
　アンドロイドなだけはあり、アリスは表情を変える事もなく、そんなおっかない事をシレっと言った。

それから、だだっ広い荒野をどれだけ歩いたのだろうか。
そろそろ城塞都市が肉眼でもハッキリ見えてくる、そんな距離にまでやってきた俺達は——
「嘘吐きー！　お前言ったじゃん、地球に似通った星だって！　こんなん地球にいねーよバカァ！」
「今はそんな事より銃を抜け！　数が多い、撃ち漏らすなよ！」
全身が黒一色の、エイリアンみたいにグロテスクな形をした四足獣に囲まれていた。
俺は腰の拳銃を引き抜きながら、背中に隠れるアリスに叫ぶ。
「おい、お前も手伝えよ！　なんでロボットが人間様を盾にしてんだ！」
こちらを囲み威嚇してくる四足獣を一匹ずつ仕留める俺に、
「自分は高性能なアンドロイドと言っただろ。高性能なのでよりリアルを追

求し、普通の少女並みの戦闘力仕様になっております」
「この使えないポンコツめ、お前高性能とか絶対嘘だろ！　今後は俺に敬語を使えよ！」
　アリスに叫んでいた俺に、一匹の四足獣が飛びかかる。
　そのまま噛（か）みついてくるのかと思ったら、何もないと思われていた背中が突然（とつぜん）ガパッと口を開き……！
「く、食われるゥ！」
　眼前に迫（せま）っていた巨大なアギトをかろうじて受け止めた。
「アリス！　アリース！　こいつ、こんな細身で信じられねえ、俺の力と互角（ごかく）ぐらいの顎（あご）の力だ！　おい、何か打開策を！　手が、手がプルプルしてる!!」
　俺は肉体改造や戦闘服で強化されているのに、この世界の生き物はどう

[illegible]なってんだよ！

「自分ポンコツなんで打開策は思い付きません、使えないヤツですいません六号さん」

「助けてくださいお願いします！　さっきの言葉は取り消しますからー！」

言っている間にも、二匹目、三匹目の四足獣が飛び掛かる。

目の前のヤツの顎が閉じないように両手で止めながら、それらを蹴飛ばし追い払う。

「じゃあ、お前の悪行ポイントで自分にショットガンをプレゼントしてくれ。それでなんとかしてやるよ」

「くれてやるから早くしてぇ！」

アリスが手早くメモを送ると、周囲の四足獣が一斉に飛び掛かる気配を

見せる。
と、その時だった。
「●●●、●●●●●！」
何か意味のある言葉っぽい声が、遠く城塞都市の方から聞こえてきた。
見れば、こちらに駆(か)けて来る騎馬(きば)集団の姿が確認(かくにん)できる。
いや、正確には馬ではなく、頭から角の生えた馬っぽい生き物。
俗(ぞく)に、ユニコーンとか呼ばれる空想上の生き物に跨(また)がった、鎧(よろい)を着た集団が何かを叫びながら向かって来ていた。
「きたぞ、六号。助けてやるからこれからは自分に敬語を使えよ！」
その言葉に視線だけをそちらに向ければ、ショットガンを手にしたアリスの姿。
背中から飛び出したアリスは、銃口を俺の目の前の四足獣に向けると同

時、ぶっ放した。
轟音と共に四足獣がふっ飛ばされ、地面に転がると弱々しい悲鳴を上げる。
自由になった俺は足元に転がっていた拳銃を拾い、手近なヤツに狙いを定める。
ショットガンの大きな銃声に驚き、竦んでいる四足獣を俺達が仕留めるのに、それほど時間は掛からなかった――

「――●●●、●●●●●●●●●●●だ!?」

戦闘を終えた俺達に、ユニコーンに乗った集団の先頭にいた、リーダーと思われる女が何事かを呼び掛けてきた。
鎧姿なので体型までは分からないが、顔立ちだけを見れば、非常に俺好みの気の強そうな美人だ。

みの気の強そうな美女だ

薄（うす）い水色の髪（かみ）を後ろに流したその女は、馬から下りると俺に剣（けん）を突（つ）き付けて。

「●●ろ！　●●●なにを●●●●！　●●●●●●やって来た！」

何を言っているのかは分からないが、なんか尋問（じんもん）されてるっぽいのは理解できた。

「おいアリス、どうすりゃいい？　なんかえらい剣幕なんだが」

「まあ待て、もうちょい相手の話を聞こう。考えるのはそれからだ」

いや、話を聞こうって言われても、相手の言葉が分からないわけで。

「それは●●どこの●の●●だ？　●●●ない●を●●●●な……」

……ん？

「それに、●●らしい物も持っていない。答えろ！　貴様らは一体何者だ！」

…………。

「なあアリス、俺、この星にきて不思議な力に目覚めたかもしれん。なぜかぁいつ等の言葉が分かるんだよ。ただでさえ強いこの俺が、ここにきて覚醒（かくせい）とかどうなっちまうんだ」

「何を言ってるのか分からんが、改造手術でお前の頭に埋め込まれたチップを通して、自分が意訳した言語データを逐一（ちくいち）送って覚えさせてるからだよ」

……。

「えっ、ちょっと待って。手術で埋め込まれたチップでそんな事できんの？それ聞いてないんだけど。超怖（ちょうこわ）いんだけど」

「今はそんな事はどうでもいい。それより、ここは自分に任せとけ」

──アリスは俺の言葉をガン無視すると。

「騎士さま、説明ならわたしがします。どうか怒りをおおさめください」

俺がギョッとするのも構わずに、純粋そうな少女を装って、流暢なこちらの言葉で説明をはじめた。

──俺は国ではそれなりの地位の人間で、部隊を率いたり、人々を守るために戦ったりと、過酷な日々を送っていた。

だがある日の戦闘で、不慮の事故により心と頭を壊してしまい、今は保護者代わりのアリスに付き添われ、心と頭を癒すため、自分探しの旅に出た。

そんな中、城塞都市の周りに広がる森林地帯を抜けた際、獣に襲われ、荷物の類は全て紛失してしまった。

なので、俺は口の利き方や礼儀も知らず、この辺りの常識も知らず。
時々おかしな事を口走るが、なにぶん頭の病気なため、広い心で優しく見守ってやって欲しい。

そんな無茶苦茶なアリスの話を静かに聞いたその女は……。

「盗賊か何かの手柄首かと思えば旅人か……。キツく当たってすまなかったが、これも仕事なのでな。街の者が、この辺りに空から何かが落ちていくのを見たと報告があったのだ。それで、私達が様子を見にやってきたのだが……」

俺に憐れみの視線を送る女をよそに、俺は無言でアリスを引っ張り。

「……お前、何言ってくれてんの？　なんで俺が頭の弱い子扱いされてんの？　何いきなりとんでもない設定付け加えられてんの？　お前なんな

の？　俺になにか恨みでもあるの？　ほんとにぶっ壊されたいの？」
「リリス様からお前の事を色々聞いて判断した。いいか六号、アホなお前じゃ絶対そのうちボロが出る。だがこの設定なら知らない方がおかしい一般常識でもバシバシ聞ける。お前が奇行に走っても、怪しまれるのではなく可哀想な人と同情されるだけで済む」
　アリスは無表情でそこまで一気にまくしたてると、
「そして自分は……。黒髪黒目のお前と兄妹ってのは無理があるから、美少女である自分が通りすがりのロリコンに襲われそうになった際、助けてもらったって事にしとこうか。そのロリコンとの死闘で、ただでさえ元々欠陥があったお前の脳に深刻なエラーが発生した事にしよう。そして、自分を助けるためにこんな可哀想な頭になってしまった事に罪悪感を覚え、一緒に旅に出る決意をした健気な美少女、と。……これでどうだ？」
「どうだじゃねーよ、どんだけ凄腕のロリコンなんだよ！　お前さっきから、

話の合間にちょこちょこと貶すのはやめろ！　しかも、俺は頭のおかしいヤツでお前は健気な美少女かよ！」

とはいえ、腹立たしいがそれ以上の設定なんて俺には思い付かない。

それに、確かにこいつの言う事にも一理ある。

俺の脳がどうたらってとこに一理あるのではなく、記憶があやふやな設定にしておけば、何かと都合がいいだろうってところだ。

と、ヒソヒソやっていた俺達を訝しみながらも、

「……まあ、事情は分かった。魔の大森林を抜けて来たというのは、普通ならとても信じられない話だが、コレを見せられてはな。我が国はお前達を歓迎しよう。……もっとも、我が国の現状を聞いて、それでもなお滞在したいと思うのならな」

鎧女はそう言って、四足獣の死骸を顎でさし、何だか不安になる笑みを浮かべた。

4

都市へと向かう道すがら。

俺達は先ほどの鎧女から説明を受けていた。

「それはある日の事だ。我がグレイス王国の隣にある魔族の国が、突如宣戦布告をしてきたのだ」

他の人達は、空から落ちて来た何かの調査のため、そちらに向けて駆けて行った。

その何かとは、もちろん俺達の事だろう。

パラシュートは荷物になるので降下地点に置いてきてしまったが、アレを見付けて俺達と結びつける事はないと思いたい。

「いきなりの急展開だけど、宣戦布告の目的は？　資源か？　それとも食料？」

俺の言葉に鎧女はフルフルと首を振(ふ)り。

「連中の狙いは土地だ。お前達は他国から来たと言っていたが、この辺りは人類が生存できる土地が限られている。連中の国は【砂の王】と呼ばれる巨(きょ)大魔獣(だいまじゅう)のせいで、年々砂漠化(さばくか)が進んでいる。かといって、魔の大森林を開拓(かいたく)できるはずもない。そこで、我が国に目を付けたのだろう」

砂の王だの魔獣だの魔の大森林だの、なんだか物騒(ぶっそう)なワードが飛び交(か)ってるが、この星を侵略(しんりゃく)するのは果たしてリスクに見合うのだろうか。

少なくとも、この連中の手には余ってそうだが。

少なくとも、ここの連中の手には余ってそうだが……

「連中は、この国の土地を奪い、我々を奴隷として支配し、魔の大森林を開拓させるのが狙いなのだろう。だが、我が国には古くからの伝承があった」

「伝承……」

なんだろう、ワクワクが止まらない。

「そう、伝承だ。人類が魔王の脅威に脅かされる時。選ばれし者の手に紋章が現れ力を得る。その者は果てなき困難の末、やがては魔王を打ち倒すだろう……と」

「俺は、選ばれし勇者だったのか……」

俺は戦闘服の籠手を外すと、手の甲を見せつけた。

「それ、どう見ても虫刺されだろ」

アリスが小さくツッコむも、俺は期待に満ちた眼差しで馬上の鎧女を。

を……

「……い、いや、そんな目で見られても、既（すで）にこの国の王子の手に紋章が現れたので……」

　ええ……。

　しょんぼりしながらトボトボ歩く俺を見て、鎧女が話題を変えようと声を掛（か）ける。

「そ、そういえば自己紹介（しょうかい）がまだだったな！　私はスノウ。この国の近衛（このえ）騎士団の隊長を務める者だ。お前達はなんというのだ？」

「戦闘員六号だ」

「美少女型高性能アンドロイド、キサラギ＝アリスともうします」

　……。

「お前、自分で美少女型とか高性能とか言っちゃうのってどーなんだ？」

「お前も戦闘員六号ってなんだ、本名はどうした本名は」

俺達の自己紹介を受けたスノウが、不思議そうな顔で小首を傾げ。

「セントウインロクゴウ……？　それに、キサラギ＝アリス……？　……というか、アンドロイドとは一体……」

この世界の住人には俺の名は呼び辛いのか、スノウは俺達の名前を繰り返している。

「俺の事は六号って呼んでくれればいいさ」

「わたしの事はアリスと呼んでくれれば、それでいいです」

「そうか、分かった。ところで、この国の現状は理解してくれたか？　で、それでもこの国に滞在するというのであれば、お前達を歓迎しよう。……それに、路銀が無いなら仕事だって紹介できる。これも何かの縁だ、話だけでも聞いてみないか？」

スノウはそう言うと、自分では微笑んでいるつもりなのかは知らないが、

そのどこか腹の底が透けて見えるような、胡散臭い笑みを浮かべている。

なんだか腹の底が透けて見えるような胡散臭い笑みを浮かべてきた

と、俺に向け、アリスが突然日本語で話し掛ける。

『おい六号、これはチャンスだ。仕事の紹介をお願いしとけ。この星の連中の戦闘力を測るには素晴らしい職場環境だ。城にでも住めるのなら内部の破壊工作もしやすいしな』

『お前アンドロイドなだけあって容赦ねえなあ。でもまあ、調査が済むまで生活基盤はあった方がいいか。この流れで入国できれば身分証も要らなそうだしな』

　そんな俺達のやり取りにスノウが訝しげな表情で首を傾げる。

「ごめんなさい。この人はアホなので、わたし達の国の言葉で分かりやすく説明してあげたんです。でも戦う事に関しては任せてください」

「おい、お前隙あらば俺を貶すのやめてくんない？　……まあいい、アリスの言う通り、雇われ戦闘員でもなんでも仕事があるなら引き請けるよ。これ

言い、近い所だと戦闘員[illegible]
からよろしくお願いします」
それを聞いたスノウは、
「ああ、こちらこそよろしく頼む。お前には期待している！　ふふ……。ふへへへ……」
そう言って、やっぱり胡散臭い笑みを浮かべた。
「──ティリス姫専属騎士、近衛騎士団隊長、スノウだ！　旅人を見付けたので保護してきた。門を開けろ！」
スノウが声を張り上げると、兵士達が門を開き敬礼する。
「任務お疲れ様です！　しかし、まさか旅人とは、一体どこからどうやって……。ともかくお疲れでしょう、早く城の中でお休みください！」
城塞都市の門をくぐると、そこには予想を裏切る光景があった。

馬上のスノウの後ろに乗せてもらいながら、大事そうに抱えたショットガンを機嫌良さそうに布で磨いていたアリスも、ソレの観察のために動きを止める。

街中にはそこかしこに趣のあるレンガ造りの建物が並んでいた。

電柱がない事から、まだ電気は通ってなさそうだ。

行き交う人々はといえば、髪色や肌の色など、多種多様な人種が混在している。

そう、そこまでならば、鎧を着用し、移動手段に馬を使っているレベルの文明圏という事で理解ができる。

だが……。

「なあスノウ。あれって一体なんなんだ？　俺の目には戦車に見えるんだ

が」

そう、門をくぐったすぐそこに、赤錆（あかさび）だらけでスクラップ状態と化した、戦車とおぼしき残骸（ざんがい）が置かれていた。

「なんだ、このアーティファクトが何か知っているのか？　これは遥（はる）か昔、この国を巨大な魔獣の脅威から守ってくれた古代兵器だ。まだこの城壁（じょうへき）が無かった時代、最後までこの場所で巨大魔獣を食い止めたという。なんとかこの技術を残そうと保存の魔法を掛けてはみたものの、見ての通り、かなりの部分が朽（く）ちてしまったがな」

これが古代兵器だというのなら、過去には地球と同レベルの文明が存在した事になる。

魔王の伝承だのファンタジーチックな事を言っていたクセに、急にSFみたいな話になったが、これは要調査対象　っていうか待て！

いた訳になったな。これは要調査対象……っていや待て！

「魔法？　なあ、今保存の魔法って言った？」

「な、なんだどうした、急に鼻息を荒くして。ちなみに私は使えないぞ？　……そ、そんなあからさまにガッカリするな、魔法の才を持つ者の数は限られているんだ、仕方がないだろう！」

この星には魔法があるのか……。

そりゃまあ魔王がどうのと言っていたんだから魔法の一つがあってもおかしくはない。

おかしくはないが……。

俺は手のひらを空に向け、気合いと共に叫びを上げた。

「エクスプコージョン！」

…………。

「……時々おかしな事を口走ると言っていたが、こういう症状の事をいうのか」

「そういう事です。たまにこうした奇行に走りますが、できればそっとしといてあげてください」

真剣な顔で固まったまま動かない俺を見て、スノウとアリスがヒソヒソと囁いていた。

「──スノウ、お帰りなさい。任務ご苦労様でした。……それで、この方達

は？」
　城へと案内された俺達は、最上階にある大きな部屋で、一人の少女に引き合わされていた。
　金髪碧眼のその少女は、大人しそうな印象を与えてくる。
「ハッ。この二人は任務遂行中に出会った者達です。本人いわく、魔の大森林を抜けてやって来た外国人だとか。真偽は分かりませんが、私が出会った場所には大量のデッドリーヘッグの死骸が転がっていましたので、少なくとも腕は確かかと思います」
　スノウの報告を聞いた少女がまあ……と小さく呟き驚きの表情を見せた。
「二人とも、頭を下げろ。こちらにおられる方がお前達の雇い主になる。この国の王女であらせられる、クリストセレス＝ティリス＝グレイス様だ」

「長え名前(なに)」
「ぶ、無礼者！」
　率直(そっちょく)な俺の意見にスノウがツッコみ、目の前の少女がクスリと小さく笑う。
「随分(ずいぶん)と素直(すなお)な方ですね。なるほど、確かにこの国の住人ではないようです。私の事を知っている人であれば、そのような反応はしませんからね」
　少女は楽し気に笑うと、何やら意味深な事を言ってくる。
「グレイス様って呼んだ方がいいのでございますか？　それとも、クリストセレス様って呼べばいいのでございますか？」
「ティリスでお願いいたします。あと、慣れない敬語は結構ですよ、様も必要ありませんから、どうか自然体でお願いします」
「ティ、ティリス様、さすがにそれは……」

スノウが何か言いたそうにしているが、ティリスはどこ吹く風だ。
ウチの組織の最高幹部はちょこちょこ俺の口の利き方を注意してくるが、このお姫様は懐が深い人のようだ。
と、スノウが何やら耳打ちし、ティリスがそれに頷いた。
「……戦闘員六号様、そして、アリス様ですね？　六号様は、なんでも国で部隊を率いていたとか？」
「率いていましたね。数多の戦闘員を引き連れて、世界中を相手取り激戦を繰り広げたもんですよ」
その言葉にスノウが胡散臭い者を見る中、ティリスはクスクスと笑っている。
い、一応は本当の事なんだからな。
「この国では現在、魔族との戦いのおかげで自軍兵が不足しています。」六号

この国では現在、魔族との戦いのおかげで指揮官が不足しています。六号様がそんなにお強いのでしたら、どうかこの国のために力を貸していただけませんか？」

そう言って祈るように両手を組むと、上目遣いでこちらを見上げてきた。

「お姫様に頼まれちゃしょーがねーな！　べ、別に、あんたが美少女だから力を貸すわけじゃないんだからねっ⁉」

「おい六号、気持ち悪い小芝居すんな、話がややこしくなってくる」

俺の返事を聞いたティリスは、ホッとした笑みを浮かべた――

「――まったく、いくら外国人だとはいえ口の利き方を知らないのか！　ティリス様はお優しい方だから多少の無礼も許してくださるが、他の貴族達にあんな口の利き方をすれば、首を落とされても文句は言えんぞ！　私の評価まで下がったらどうしてくれる！」

雇い主との面会を終えた俺達は、続く場所へと連れてかれていた。
ティリスの許可を得たとはいえ、一応形式的な面接を受けて欲しいとの事。
お役所仕事に融通が利かないのは星が変わっても同じらしい。
「あまり怒らないであげてください、スノウ様。六号は確かに礼儀も知らないアホですが、戦う事に関してはプロですので、これからバンバン活躍してくれます。そうすれば、わたし達をスカウトしてきたスノウ様の手柄にもなるのでしょう？」
「うっ……」
俺達の前を行きながら文句を言っていたスノウが、アリスの指摘に言葉を詰まらせた。
「あっ、なんだよそういう事かよ！　そりゃそうだよな、今は戦時中だもん

な。強いヤツが少しでも欲しいし、あのなんちゃらいう獣を狩れる俺達は使えると思ったんだろ！　仕事を紹介してやるとか恩に着せるような事言っときながら、実は喉から手が出るほど俺の力とセクシーな体が欲しかったんだな！」
「そこまで切迫して欲してはいないぞ！　あと体はいらんわ！　もう率直に言うが、私は手柄と金と名剣が何よりも好きなんだ！」
　いさぎよくも最低な発言をするスノウ。
「なあ六号、お前からはなんだか私と同類の匂いがする。本来ならば外国人なんて雇ってもらえないんだぞ？　私はそれなりの地位にいる。お前達を新参者だと迫害する輩がいれば、近衛騎士団隊長の権限で捻り潰してやろう。ほら、私達は利害が一致するだろう？　これからも多少の便宜は図ってやるから、頼むぞ！」

同類呼ばわりされた俺が腹黒女に引いていると、アリスが突然声を上げた。

「……ん？　スノウ様、アレはなんですか？」

城の中を案内され、中庭を通り過ぎたのだが、先ほどの戦車と同じく、この場所に似つかわしくない物がある。

城の中庭らしき場所に置かれていたのは三メートル四方の箱形の機械。

それをしげしげと眺めていたアリスが、

「というか、先ほどの戦車と違ってこちらはなかなか状態が良いですね。動力源はソーラー式ですね。一体コレは何に使うのですか？」

思わず足を止めた俺達に、スノウがふうとため息を吐き。

「コレも我が国のアーティファクトの一つだ。それは雨を降らせる事ができるという伝説級の遺物でな。毎年雨が必要な時季になると、この国の王族が

祈りの言葉を捧げ、雨を乞う習わしなんだ。見ての通り今は動く事はなく、厳重な保管の魔法が掛けられてはいるものの、やがては朽ちていく事だろう……」

　そう言って、動かない機械にこの国の未来を重ねたのか、スノウがどことなく寂し気な表情を見せるが……。

「これぐらいならわたしが直せるかもしれません。中を開けてみてもいいですか？」

「ほ、本当か？　もしダメだった場合でも全責任は私が取る！　直せると言うのならやってくれ！」

　顔を輝かせながら言うスノウに、アリスはどこからか工具を出すと、早速修理に取り掛かる。

「お前何でそんなもん持ってんの？」

「自分の体のメンテナンスぐらいは自分でやるからさ。お前だって健康管理ぐらいはやってるだろ」

　俺の耳打ちにアリスはあっさり返してくるが、自分で自分を修理できるとか、こいつなかなか便利なヤツだな。

　と、修理の様子を隣で見ていたスノウがソワソワしながら、

「どうだ、直りそうか？」

「ええ、なんとかなりそうです。配線が劣化してるだけですね。これを取り替えて再起動すれば大丈夫です」

　それを聞いたスノウはパアッと顔を輝かせ、

「でかした！　よし、私は人を呼んでくる！　へへ……。へへへ……、なあアリス、六号、この手柄は山分けだよな？　頼むぞ⁉」

そう言って、変な笑いを上げながらどこへともなく駆け出して行った。
「……手柄を山分けって、アイツ何もしてねーじゃん」
「それを言うならお前もな。……よし、これでいけるはずだ」
アリスが起動スイッチらしき物を押すと、機械的な音声が流れてくる。
《これより再起動を開始します。それに伴いパスワードを再設定してください》
パスワード？
スノウが言っていた王族が捧げる祈りの言葉とやらはこれの事なんだろう。
《再起動が完了しました。パスワードを設定してください》
と、再びそんなアナウンスが流れてきた。

「おちんちん祭り」

《パスワードの設定が完了しました》

「お前なんて事してくれるんだ」

　工具を手にしていたアリスが思わずといった感じで動きを止める。

　アンドロイドのクセに唖然としているアリスに向けて、俺はチッチと指を振り。

「いいかアリス、よく聞けよ？　スノウはなんて言っていた？　そう、毎年雨が必要な時季になると、王族が祈りを捧げると言ったんだ。王族ってのはつまりティリスの事だ。あんな美少女が公衆の面前でこれを唱えるんだぞ？　その度にティリスの恥ずかしがる顔が見れて、悪行ポイントもガッツリ稼げるわけよ」

「お前こそちゃんと聞いとけよ。王族ってからにはティリス以外でもいいんだぞ。ティリスはお姫様だ。つまりちゃんと王様ってもんがいる。これから毎年、

いい歳したおっさんが、国民の前で小学生が考えたようなアホなパスワードを叫ぶんだぞ」

……。

「どうしよう、なんか大変な事をやらかした気がしてきた」

「やっちまったもんはしょうがねえ。おい六号、プラスチック爆弾を送ってもらえ。この機械は証拠隠滅にふっ飛ばしてしまおう。そしてスノウにはこう告げるんだ。修理しようとしたけどダメでした。直ったと思ったらなんか勝手に爆発したってな」

コイツ、高性能を自称するだけはある。

「素晴らしい、それでいこう！」

と、俺が叫ぶと同時、背後から声が掛けられた。

「一体何が素晴らしいのですか？」

聞き覚えのあるその声に振り向くと。

そこには、笑みを湛えながらも手にしたセンスを握り締めるティリスと、脂汗を垂らしながらブルブルと震えるスノウがおり。

頭に埋め込まれたチップから、俺にだけ聞こえる聞き慣れたアナウンスが響き渡った。

《悪行ポイントが加算されます》

6

「いい加減抵抗するな！　陛下の前だぞ、大人しくしろ！」

「なんだよー、ダメだった場合でも全責任は私が取るって言ったじゃんかよー！　この扱いは酷いだろ、だったら最初から直させるなよー！」

ここは謁見の間とでもいうのだろうか。

スノウや他の兵士に捕縛された俺達は、この国の王様の前に引きずり出されていた。

「だ、黙れ！　私は、修理をしろと言ったんだ！　誰があんな事をやれと言った！」

スノウは顔に焦りを滲ませながら、俺を黙らせようと小突いてくる。

上半身を縛られたまま絨毯の上に跪かせられた俺達を、目の前の温厚そうな男は興味深そうに眺め、口を開いた。

「……この者達は？」
「ハッ。この者は、スノウ殿がその腕を見込んで指揮官として連れて来たらしいのですが、中庭にあるアーティファクトを直せると言い出し、実際にそれを修理してみせたそうです」
隣にいた秘書官みたいな女の人の説明に、その男は驚きの声を上げた。
多分この人がこの国の王様なのだろう。
なぜなら……。
「おいアリス、俺こんなにも王様らしい王様初めて見た。見ろアレ、サンタも裸足で逃げ出す王様ヒゲだぞ。触らしてくれって言ったら怒られるかな」
「こら六号、相手はこの国の最高権力者だ。もっと小さい声で感想言え」
そんな俺達をよそに、目の前の秘書官はなおも説明を続けている。
「ですが、修理の際に、その……。祈りの言葉を、卑猥な単語に変えてしまったそうでして……」

「卑猥な単語？　なんだそれは？」
秘書官の人はスタイルのいいクール系の美人だ。
なんだろうこの星は、出会う女性みんなのレベルがえらく高いな。
そういえば、スノウと一緒（いっしょ）にいた近衛騎士（きし）団の子とかも……。
「そ、その……、……祭り……と……」
「そ、そうか。すまんな、そのような事を言わせてしまって」
あっ、今さらながら大変な事に気が付いた！
あの騎士団の娘（むすめ）さん達は、みんなユニコーンみたいなのに乗っていた。
「なぜそんなバカな事をしたのか理解に苦しむが、その方（ほう）、この秘書官の申す事に相違（そうい）ないか？」
ユニコーンは、伝説では処女にしか懐（なつ）かないとかなんかそんな話を聞いた気がする。

という事はつまり……！
「おい貴様！　陛下の質問に答えろ！」
突如目の前に、スノウの顔がズイと迫った。
「うおっ、近ぇ！　な、なんだよ、人が大事な考え事してる隙に、何キスしようとしてるんだ！」
「お前は、お前は何を言っているこの神聖な謁見の間で！」

王様が一つ咳払いをして、質問とやらを繰り返す。
「その方、アーティファクトを使う際の祈りの言葉を、卑猥な単語に変えたというのはまことか？」
俺は今の状況を思い出し。
「まことだけど、この女が責任は私が取るからと言ってました」

「き、貴様！　違います陛下、私は修理を命じただけでして……！」
　俺が責任を擦り付けるも、王様は困ったような表情で、
「アーティファクトを修理してくれた事に関しては感謝する。それに免じてその方の罪は不問とし、褒美も出そう。それを持って、どこへなりとでも……」
「お父様、お待ちください」
　と、突然王様の言葉が遮られた。
　謁見の間に現れたのは、表面上は穏やかな笑みを湛えたティリスだった。
「その方は、私が個人的に雇い入れたいと思います。デッドリーヘッグの群れを全滅させる強さと、アーティファクトを修理できる知識を持つ方々です。この程度の事で放逐してしまうのは惜しいと思います」

「む、そ、そうか。ティリスがそういうのであれば、そうなのだろうな」
　それに鷹揚(おうよう)に頷(うなず)く王様を見て、アリスがヒソヒソと日本語で囁(ささや)いてくる。
『六号、この国の実質的な政治はあの姫さんがやってるみたいだ。王様のおっさんからはダメ親父(おやじ)臭(しゅう)がするぞ』
『なるほど、媚(こ)びる相手はティリスか。上司に媚びへつらうのは得意分野だ、任せとけ』
『お前……』
　と、ティリスの言葉を聞いたスノウが、俺を指さし。
「ティリス様、こんな男は放逐すべきです！　大切なアーティファクトにあのような事をするなど、こやつは我が国を陥(おとし)いれるのが目的の、他国のスパイかもしれません！　どうかご再考を！」
「おっ？　自分が連れて来ておいてスパイ呼ばわりとは面白(おもしろ)いな。ていう事は、お前はスパイを引き入れた売国奴(ばいこくど)ってわけだな！」

スノウの眉がキリキリと吊り上がり……！

「貴様、言うに事かいてこの私が売国奴だと!?　ティリス様への忠誠心において右に出る者はいないと評判の、この私が!?」

「ガチ切れじゃないっスか！　知ってるか？　人間、本当の事を言われるのが一番頭にくるんだぜ！」

　俺の挑発にスノウが目を血走らせて剣を抜く。

「貴様など……！　我が愛剣、灼熱剣フレイムザッパーの錆にしてやる！」

「言い負かされたからって縛られた状態の相手を斬るとか、お前それでもほんとに騎士かよ！　俺は雇われる事になったんですう！　それを勝手に斬っちゃっていいのか？　そんなもんよりお前には、まだやらなきゃならない事があるだろうがよ！」

俺の言葉に、顔を赤くして今にも斬りかかろうとしていたスノウが動きを止めた。
「……やらなきゃならない事……？」
不思議そうなスノウに向けて、隣のアリスが口を開いた。
「お前さん、六号や自分に確かこう言ったろ。全責任は私が取るって。自分達は不問にされたが、お前の責任問題に関しての話はまだ終わってないぞ」
その、アリスの言葉を聞きながら。
ガタガタと震え出したスノウが救いを求めるようにティリスを見ると。
この国の影の支配者は、優し気な笑みを浮かべた――

――背伸びしながら面接室のドアから出てきた俺に、アリスが日本語で話しかけてきた。

『おい面接はどうだった？　まあ面接といっても採用前面接なんだから色々と身辺調査された程度なんだろうが』
『おう、キサラギの事とか、俺の必殺技の事とか、なんかヒーローの事まで聞かれたぜ』
　王様との謁見の後、履歴書を書かされ、一応形だけの面接を終えた俺は、待っていたアリスに事の次第を報告した。
『しかし、俺がこの国の騎士か……。まぁ悪くは無いな。勇者が無理ならここは騎士様で手を打っておいてやろう』
『おい、分かってるんだろうな。お前はあくまでキサラギの戦闘員なんだからな？　任務を忘れるんじゃないぞ？』
　と、その時。
「たまに使うその言語は、お前達の国の言葉なのか？」

日本語で話していた俺とアリスの後ろから、突然声がかけられた。
「なんだ、またお前か」
道中でやたらと突っかかってきていた女騎士スノウが、今は鎧を脱いで立っていた。
それが騎士本来の制服なのか、やたら青い配色が目立つ服装だ。
鎧のせいで分からなかったが着痩せするタイプらしい。
スカートから覗く白い足がスラリと長く、見た目だけならトップモデルのようだ。
「なんだとはなんだ、私としても貴様なんかに会いたくはない!」
なんでこの女は敵対的なんだろうか。
いやまあ俺にもほんのちょっぴりは原因があるのだが。

「で、何か用か？　俺達はこれから、宿舎とやらに行くんだけど」
嫌そうな感情を隠しもしない俺の塩対応に、スノウがこめかみをピクピクさせ。
「その宿舎への案内を任されたのだ。それと、お前達の今後の世話もな」
「……はぁ？」
思わず聞き返す俺に、スノウが背筋を伸ばし敬礼する。
「今日付けで貴様の隊への配属となった。私は今後、貴様の率いる部隊の副隊長となる」
……スノウが俺の隊所属になったらしい。
というか、なぜこんな展開になってしまったのか。
「なに？　俺、来ていきなり隊長なの？」
俺の質問に、スノウが敬礼したまま呆れたような視線を送ってきた。

「……お、お前はちゃんとティリス様の話を聞いていたのか？　この国は、魔族との戦いで多くのベテラン指揮官や騎士を失った。女の兵士や、若い指揮官や騎士が多いのはそのためだ。現状として、部隊を率いる者が圧倒的に足りていない。お前は元いた国で部隊を率いた経験があるのだろう？　なので、今日から貴様には、小隊ではあるものの遊撃部隊を率いてもらう事になったのだ」

　なかなか分かってるじゃないかこの国の連中は。

　まさか、赴任して早々俺を隊長待遇にしてくれるとは。

「だが私は、お前の事を上司だと思ってはいない。戦闘において、実質的には私が指揮を執る。貴様は邪魔にならないよう引っ込んでいればいい」

　この女いきなり何言ってんだ。

「お前、元騎士団隊長だったからって調子に乗んなよ？　俺だってなあ、昔は指揮官としてそれなりの活躍をしてきたんだ。魔族とやらに負け続きの

お前らより上手くやってやんよ！」
「……アーティファクトを修復してくれた事だけは礼を言う。だが私は今回の件で、貴様をまったく信用してはいない。もしこの国で何かを企んでいるのなら、早々に諦めるのだな！」
スノウはそう言い放つと、身を翻して勝手にどんどん歩いていった。
馴れ合うつもりは無いから勝手について来いということか。
俺とアリスは、そんなスノウの背中に向けて。
「責任を取らされて降格されたからって、八つ当たりとか恥ずかしくないんですか、やだー！」
「やだー！」
「わ、私は降格などされてはいない！　そう、怪しげな貴様らの監視役なのだ。そして素人同然のお前では心許ないと、この私が配属されたのだ！　そ

か。そして素人同然のお前では心許ないと、この私が配属されたのか　そ
こら辺を勘違（かんちが）いするなよ！」
　バッと振（ふ）り返り、どこか焦（あせ）ったようなスノウの言葉に、俺とアリスは顔を見合わせると。
「……きっと監視役だとか思っているのは、自分だけだよなあ……？」
「当たり前だろ？　国宝であるアーティファクトとやらがあんな事になったんだぞ。普通（ふつう）なら切腹ものの失態だ。きっとああやって自分に言い聞かせてるんだよ」
「き、貴様らあああああ！」

「ここがお前の部屋になる。生活に必要な物は中に一通りは揃（そろ）っている。そ

して、アリスはどうするかな……」
　あれからひと悶着あった後、俺達は城の宿舎に案内され部屋をあてがわれたのだが、スノウが言葉を濁していた。
「アリスはどうするかって、どういう事だ？　コイツになんかあんの？」
「……一応この宿舎は、部外者は立ち入り禁止なのだが……」
　困ったように言ってくるスノウに、アリスが突然いきり立つ。
「はあ？　何言ってんだお前、この優秀な自分だけ除け者か？　六号の率いる部隊に所属するに決まってんだろ！　そんなんだから降格されるんだよマヌケ！」
　いや、表情は普段と変わらないが、多分コイツなりに怒っているんだろうと思う、口の悪さ的に。
「な、ア、アリス、お前、子供のくせになんて口の利き方を……？」

見てくれは子供みたいなアリスの突然の罵声に、スノウが目を白黒させて後ずさる。

「口の利き方なんぞさっきから上司の六号に舐めた口利いてるお前に言われたくねーぞ、分かったらとっとと自分の部屋も用意しろ、この守銭奴のでき損ないが！」

「な……、なんて口の悪い子供だ！　し、しかし、小隊というのは五人一組で構成されている。そして、それぞれには役目があるのだ。基本的に、前衛には騎士が三名、後衛には魔法使いと治療術士が基本だ。六号と私がこの場合前衛扱いになるから、残るは前衛一人と魔法使い、治療術士が必要なのだ。……アリスは何かできるのか？」

疑わしい目を向けるスノウに、アリスがズイと顔を近づけながら食って掛かる。

「なにかできる？　高性能な自分は何でもできるっつーの。自分の得意分野は頭脳作業全般だが、未開人のお前らには理解できない超テクノロジー、ナノマシンを活かして衛生兵やってやるよ！　だから、そのメンバー構成でいくと治療術士とやらがいらない子だな！」

勝手に治療術士とやらをいらない子認定し、アンドロイドのくせに怒りながら部屋を出て行くアリスを見送り、

「い、いいのかな勝手に……」

スノウが本来の年相応な困り顔で、蚊の鳴くような声で呟いた。

――スノウがアリスの部屋の手配を行った後、続いて宿舎の庭へと案内される。

そこでは、どの部隊にも所属していない連中が戦闘訓練をしているらしい。

「訓練止め！　これより一個小隊の編制を行うため、それに伴い隊員を二名募集する！　我こそはと思う者は集まるがいい！」

スノウの言葉に、思い思いに剣を振っていた者が動きを止めて集まってきた。

「来たばかりのお前達はここにいる兵士のクセを知らんだろう。小隊の隊員は私が決める。これは履歴書だ。一応目を通しておけ」

すでに誰を入れるかは決めているのか、スノウは俺達に紙束を押し付けると全員が集まるのを待っていた。

「おい六号、ちょっとこれ見てみろ」

パラララと紙をめくっていたアリスがふと手を止めて、履歴書を見せてく

る。
「『武神、アレキサンドライト・グレイブニール』。いいじゃないか、名前的にも強そうだ」
「違う、そっちじゃない。ソイツの年齢を見ろ、80過ぎの爺さんじゃないか。そうじゃなくこの二人だよ」
　この名前で爺さんって時点で強キャラ臭しかしないのだが、アリスが見せてきたのは次のページに載っている二人。
「『戦闘用人造キメラ、ロゼ』、『ゼナリスの大司教、グリム』……？　このキワモノ臭しかしない二人がどうした？　……あっ！　『味方殺しのドジっ子魔法使い、ミレイ』！　俺、この子がいい！　ドジっ子ちゃんがいい！」
「ドジっ子魔法使いってどう考えても地雷じゃねえか。それより見ろ、その二人の討伐数ってところを。他の連中に比べてぶっちぎりだ」
　アリスに言われて見てみれば、確かにこの二人だけ数字が飛び抜けてい

アーシに言われて見てみれば、確かにこの二人だけ数字が飛び抜けていた。
　しかし……。
「それ言ったら、アレキサンドライトさんは二人の何十倍もの討伐数だし、やっぱこっちの方が……」
「爺さんは忘れろ、作戦行動中に激しい運動させてポックリ逝（い）かれたらどうすんだ。それに、この二人の肩書（かたが）きの方が面白（おもしろ）そうだぞ。ゼナリスの大司教とやらはよく分からんが、戦闘用人造キメラだなんてウチにピッタリの人材じゃないか？」
……言われてみれば、確かに怪人（かいじん）っぽい肩書きだ。
「よし、皆（みんな）集まったな。では、小隊に編入する者を発表する！　まず一人目は……」
と、言い掛けたところで、アンリが遮（さえぎ）る。

と言い捨てたスノウをアリスが遮り

「待てスノウ、編入するのはこの二人だ」

そう言って二枚の履歴書を手渡した。

「うっ……。いや、この二人は……！　せめてどちらかを、アレキサンドライト様に……」

「お前らは揃いも揃ってなんでジジイが好きなんだ、いいからこいつらを紹介しろ」

アリスに叱られたスノウは子供相手に強く出れないのか、ブチブチ言いながらも二人の隊員を呼び寄せた。

俺達の前にやってきたのは一人の少女。

「……まあ、どういう隊員なのかは書類に書いてあるからそれを読め。ほらロゼ、自己紹介しろ」

スノウに促(うなが)されたその少女は。

「私はロゼ。そう、戦闘(せんとう)用人造キメラのロゼ……。あなた達に、この私を使いこなせる……？」

アリス以上の無表情を湛(たた)えたまま片方の眼(め)を手で隠し、物憂(ものう)げにこちらを見つめてきた。

年の頃(ころ)はアリスよりもちょっと上の、十四、五歳ぐらいかと思われる。

と、そんなロゼの穿(は)いているスカートの裾(すそ)から、トカゲのような尻尾(しっぽ)が覗(のぞ)く。

よく見れば短めの銀髪(ぎんぱつ)からは、鬼(おに)のような小さな角が一本だけ生えており、左右で目の色が違っていた。

なるほど、人造キメラか……。

俺はロゼのポーズをそっくりそのまま真似しながら、
「俺の名は戦闘員六号。そう、改造手術を施され、本来の名と共に過去を捨てた戦闘機械。よろしく頼むぞ、戦闘用人造キメラ……！」
「自分はキサラギ＝アリスさんだ。お前らみたいな恥ずかしい発言をする痛い子ちゃんは、ウチの結社にたくさんいたから安心しろ。ちゃんと使いこなしてやるよ」
俺達の自己紹介に、ロゼはピタリと動きを止め、両手で顔を覆い震え出した。
「おいアリス、せっかく俺がカッコつけたのにお前もちゃんと合わせてやれよ。……ほら見ろ、痛い子ちゃんなんて言うから顔真っ赤にして震えてるだろ」
「お前らのバカな遊びに付き合ってられるか。……おい、恥ずかしいならそんな事してないでこっち来い」

[illegible]」

「は、はい……。あたしは人造キメラのロゼです。どうかよろしくお願いします……」

耳まで顔を赤くしながら、ロゼがトボトボとやってくる。

「とまあ、こういった変わったところがあるが、開発者の教育方針によるものらしいからそっとしておいてやってくれ」

「あたしを作ってくれたお爺ちゃんが、こういう時はこうしろって……！　うっ、うっ……。本当は、こんなバカな事したくないのに、お爺ちゃんの遺言だから……！」

スノウのフォローに泣き出したロゼを横目に、俺は渡された履歴書に目を通す。

そこには、ロゼのこれまでの戦果、及び特殊能力の数々が　。

「……えっ、なにこれ。お前、食ったもんの能力を取り込めるの？」
「えっ？　は、はい、あたしはキメラだからか、食べ物の影響を受けやすくて……。一口二口じゃダメですけど、同じ魔獣のお肉を食べ続けると特性を取り込めるんです。最近はもっぱら、力の強い一角獣鬼や、炎を吐き出す爆炎トカゲのお肉ばかり食べてました。おかげで、ちっこい角や尻尾が生えちゃって……」
　その言葉に俺とアリスは、顔を見合わせ。
『……おいアリス、怪人見習いだ』
『ああ、コイツは逃がすわけにはいかないな』
「な、なんですか？　二人とも何言ってるのか分かんないんですけど嫌な予感が！　……って、あれ？　何か変わった食べ物持ってませんか？　その、凄く良い匂いが……」

突然の日本語に怯えを見せていたロゼが、鼻をスンスンさせながら尋ねてくる。

この星にやってきてから何も食べていなかった俺は、ここに来る最中に、携帯食をかじっていたのだが……。

俺はスティック状の携帯食を見せびらかし、

「ひょっとしてコレか？　みんな大好きバランス栄養携帯食、カロリーゼットだ。欲しいのなら分けてやるけど、その代わり俺の言う事はなんでも聞くんだぞ」

「な、何でもですか!?　ああ……、でも抗いがたい良い匂いが……！」

「おい六号、食い物で腹ペコ少女を釣る今の絵面は通報ものだぞ。でも、コイツの扱い方は理解した」

俺が携帯食を左右に振ると、それに釣られて物欲しそうなロゼの視線が

動かされる。
　と、俺達が携帯食でロゼを餌付けしていると、周囲をキョロキョロと見回していたスノウが誰かを見付け呼び掛けた。
「おいグリム、寝ていないでこっちへ来い！」
スノウに呼ばれて俺達の前にやってきたのは、車いすに座った女だった。
グリムと呼ばれたその女性は、年の頃は十八、九ぐらいだろうか？
そんな車いす女のパッと見た印象は重病人だ。
眠たげな茶色の瞳に青ざめた土気色の顔色、そして綺麗な茶髪のストレート。
　車いすに裸足のまま腰掛けた体の弱そうな姿を見て、本当に大丈夫なのかと心配になる。

「俺が今日から隊長になる、戦闘員六号だ」
「参謀と衛生兵を務めるアリスさんだ」
　自己紹介する俺達に、グリムは目を輝かせ。
「初めまして、私はグリムよ。隊長には色々質問があるけれど、まずは一番大事なところを聞こうかしら。隊長は妻帯者？　彼女なんかはいるのかしら？　ちなみに私は独身よ。こんなにいい女なのに、なぜか不思議と彼氏もいないわ」
「独身ですよ。そしてこんなにも好青年な俺なのに、なぜか不思議と彼女はいない」
「二人ともいきなり何の話をしている、部隊での色恋沙汰は御法度だ！　戦闘に関する事を聞け！」
　スノウが激昂し叱りつけるが、俺の答えを聞いたグリムはなんだかひどくソワソワしている。

……さて、戦闘に関する事を聞けと言われたが、まずは何から尋ねるべきか。

ゼナリスってなんなんだとか、車いす生活なんだから無理して戦場に行かなくていいんじゃないかとか、考えたらキリがないのだが、一番気になるのは……。

「グリムは魔法使いなのか？　俺、魔法ってのに詳（くわ）しくなくてな。一体どんな事ができるんだ？」

そう、魔法である。

グリムの履歴書には特技の欄（らん）に呪詛（じゅそ）なんて物騒（ぶっそう）な項目（こうもく）があったのだ。

「私は正確には魔法使いじゃないんだけどね……。偉大（いだい）なるゼナリス様のお力を借り受けて、奇跡（きせき）の代行者を行っているわ」

奇跡の代行者ってなんなんだろう。

「なんだ、そのゼナリス様ってのは」
「不死と災いを司る、偉大なる御方よ。私はゼナリス様に仕える信徒なの」
　不死と災いを司る……。
「……じゃ、邪神？」
「し、失礼な！　ゼナリス様を邪神呼ばわりだなんて罰が当たるぞ！」
　本来なら力を見せて欲しいとこだが、呪詛ってのが気にかかる。
　まあ、どうせ近いうちに戦場で見れるだろう。
……と、グリムは何を思ったのか、車いすの上で体育座りの体勢を取った。
　そして挑発的な笑みを浮かべると、長めのスカートが引っ張られ、裾が少しずつ持ち上げられ……。
「ふふふ……、ねえ坊や、お姉さんのスカートの中が気になるでしょう？
ゼナリス様を邪神呼ばわりした事を悔い改めなさい。そうすればあなたに

洗礼を授けてあげるわ。そしてきゃああああああああ！」

《悪行ポイントが加算されます》

勿体ぶるグリムのスカートを、俺はスパーンとめくりあげた。

病弱で清楚なイメージだったのに、晒された黒の紐パンで抱いていた印象が一変する。

とんでもねえ、こいつはとんだドスケベ女だ。

「本当に見せるつもりまではなかったのに！　ねえ、ちゃんと責任取ってよね！　専業主婦として養ってもらうわよ！　逃がさないわ！　ええ、絶対に逃がさない！」

ドスケベだけじゃなく、こいつはとんでもない地雷女だ。

トランクスとかそれじゃねえ。こいつはとんでもねえ地雷女だ

「まあ落ち着け怪人（かいじん）紐パンパン。六号を前に挑発なんてするお前も悪い」

「紐パンパンって何⁉　その呼び名は止（や）めて！　この下着を着けてると彼氏ができやすいってピヨコ倶楽部（くらぶ）に載（の）ってたのよ！」

　ピヨコ倶楽部ってなんだよ、婚活（こんかつ）雑誌か何かだろうか。

「パンツ見たぐらいでいちいち嫁（よめ）に貰（もら）ってたら、俺は今頃（いまごろ）石油王並みのハーレム築いてるとこだ。後で俺のパンツも見せてやるから、それでおあいこな黒パンパン」

「野郎（やろう）の小汚（こぎたな）い下着と乙女（おとめ）のパンツを一緒（いっしょ）にするな！　あとその呼び名も止めて！」

　と、そんな俺達のやり取りに、スノウが深くため息を吐いた。

「はあ――。よりにもよって、とびきり厄介（やっかい）なこの二人を選ぶとは――。まあ

いい、戦闘に関してだけなら、こいつらは秀でているしな」

その言葉にふと気づく。

履歴書に書かれていたのは、老人やドジっ子魔法使い、そして今一緒にいる色物二人だけではない。

その他にも、なんらかの問題がありそうな面子ばかりだった。

つまり、この集団は……。

「厄介者ばかりの中から、更に問題児を集めたこの小隊だが、まぁよろしく頼む。とはいえ、お前達落ちこぼれと馴れ合うつもりはないからな」

仏頂面のスノウはそう言って、俺達に背を向けるとひらひらと手を振り

──

……おい、厄介者ってふざけんなよ。

そりゃあ俺達は、車いすに乗った体の弱そうな紐パンに、魔物っぽい腹ペコ

少女。
そして、身元不明の悪の組織の戦闘員とアンドロイドだが……！
——どう考えても厄介者です、本当にありがとうございました。
……あれ、ちょっと待て。
「つまり、お前も厄介者扱いされてここに飛ばされたって事か？　だって性格に難ありだもんな」
その言葉にスノウがビクリと身を震わせて、
「なな、何を言って……！　い、いや違う！　違うぞ、私はお前達の監視のために！」
「おい六号、こいつ降格させられただけじゃ飽き足らず、ティリスに体よく厄

介払いされたんだぜきっと。やーい、落ちこぼれ、落ちこぼれー！」
「や、やーい！　やーい!!」
「ひゅーひゅー！」
　アリスに煽られ、ロゼやグリムまでもがそれに続いてはやし立てる。
　悔しげに唇を嚙みながらも、スノウは強気に拳を握り。
「くっ、な、何とでも言っていろ！　とにかく貴様らはこの私の指示に従っていればいい！　私の指揮ですぐに目に見える戦果を挙げて、とっととこんな隊から抜け出してやる！」
　元エリートのプライドなのか、意志の強そうな目で肩越しにこちらを睨むが。
「あっ、聞いたか六号。とうとうこんな隊から抜け出してやるとか言ったぞ。さっきまでは、自分達の監視としてこの隊に配属されたとか言い張ってたく

こいつまで、自分達の監視としてこの隊に配属されたとか言い張ってたくせに」

「ほんとだ、とうとうこいつ左遷(させん)されたの認めやがった。というか、左遷隊長の指示なんか聞けるかよ。俺だって昔は部隊を率いてたんだ、好きにやらせてもらうからな」

アリスと俺が煽ってやると、堪(こら)え性(しょう)が無いのか左遷隊長の眉(まゆ)が吊(つ)り上がる。

「左遷隊長と呼ぶな！　貴様はこの国の戦争に関しては素人(しろうと)だろうが、黙(だま)って私の言う事を聞いておけばいいんだ！　大体、貴様の着ている変な鎧(よろい)が問題だ。なんというか、こう……。黒くて邪悪そうというか、騎士(きし)というより魔族の下っ端(ぱ)兵士が着ていそうで隊長っぽくないというか……」

「お、お前ふざけんな、俺の鎧は関係ないだろ！　戦闘(せんとう)服がトゲトゲしいのは認めるが、そこまで言われる筋合いねーぞ！」

旧式のクソ重い戦闘服だが、長年愛用してきた相棒みたいなもんなのに！
「ええい、うるさい！　貴様の様な奇天烈な行動に走る、顔に傷を持つ腐った目をした男が隊長だなどと、それだけで我々の名誉に関わるのだ！」
「なっ！　てめ、こっ、このっ……！」
　この女、ちょっとばかし甘い顔してればつけあがりやがって！
「見た感じ、学もなさそうだがどうなんだ!?　貴様は優秀な学院でも出ているのか？　私はこの国で最高ランクの大学を卒業しているが？」
「うぐっ……」
　大学なんて行ってねぇよ！
　戦闘員が忙しくて、こちとら高校中退だ！
「分かったら私の指示に従うと誓え！　そうすれば戦場で恥をかく事もな

いだろう！」

　こ、こいつ、調子に乗りやがって……ッ！

「なんだその目は？　握った拳は？　ほう、手を出すのか？　いいぞ、私が女である事など気にするな、遠慮なく殴りかかってくるがいい！　できるのか貴様に？　さぁ、私を殴る度胸があるのならやってみろ！」

　こっ……！

「こいつめ――ッッ!!」

　俺の発した大声に、スノウがビクッと身構える。

　俺は、真剣な顔で身構えたままの、スノウの両胸をわしづかんだ。

服の胸元を盛り上げてくっきりと自己主張するスノウの巨乳を。
呆然としている周りのやつらと身構えたままぽかんと口を開けたスノウの顔を、俺は忘れる事はないだろう。
《悪行ポイントが加算されます》

8

「誰か、誰か助けてくれ！　この女は頭がおかしい」
「一体誰がおかしい女だ！　おかしいのは貴様の頭だっ」
ロクに女性に縁のない俺だったが、今、生まれて初めて女に追いかけ回されていた。
「おい落ち着け、謝るから！　謝るから、まずはゆっくり話をしよう！」
「今更

「今更何を話す事がある！　今思えば貴様は最初会った時に斬り捨てておくべきだった！」

刃物を持った、髪を振り乱して血走った目をした女にだが。

「ちょろっと乳揉んだだけで刃物抜くとかお前絶対頭がおかしい！」

「だからおかしいのは貴様の方だッ！　頭がおかしくない人間は、そもそも人様の胸をなんの脈絡もなく揉んだりしない！」

うっかり転んだ拍子に胸揉んだりとか、漫画とかではよくある事だ。

それで女に追い掛け回されてしばかれるって展開も、お約束だって事は認める。

でも……、

「お前、もうちょっと頬を染めながら追いかけてくるとか、せめて叩かれたら痛いぐらいの道具にしろよ！　追いかけられてもちっとも嬉しくない!!

ガチ切れで目が血走ってこぇーんだよ！」
「当たり前だ、貴様を殺すつもりで追いかけているからな！」
「誰か来てぇぇ！」
　何だコレ、ラブコメみたいなニヤニヤできる展開とまるで違う！
　俺が本気で助けを求めながら城の中を走り回っていると、そこに……。
「ティリス！　ティリスじゃないか!!」
　目の前にはこちらに向かって歩いているティリスの姿。
「六号様、これはちょうど良いところに。実は……。ど、どうしたのですか二人とも、一体何が!?」
「今はそんな事はいいから、助けて助けて！」
「ティリス様、お見苦しいものをお見せしますが、すみません！　その男を叩き斬りますので！」

ティリスの背後に震えながら隠れる俺に、スノウが血走った目をぎらつかせてくる。
叩き斬るとか、絶対年頃の女の使う言葉じゃないだろ。
「な、何があったのかは知りませんが、城の中での刃傷沙汰は地下牢行きですよ！　スノウ、どうか落ち着いて！」
その言葉に、スノウは悔しそうな顔でしぶしぶ剣を納めるが……。
「……明日の任務では背中に気をつけるんだな」
スノウは、立ち去る前にそんな物騒な言葉を残していった。
……あいつ絶対騎士とかじゃなく、俺達悪の組織寄りの人間だろ。
「ふう、たかが乳揉んだくらいであそこまでガチ切れするとは思わなかった。助かったよティリス」
「ろ、六号様、なぜそんなバカな事を？　スノウは冗談が通じない子です。

家柄で騎士になった者とは違い、スラムのみなしごの身から近衛騎士団の隊長にまでたゆまぬ努力の末で登り詰めた、真面目な努力家ですから……」

　なんだよアイツ、プライド高そうだから、てっきりいいとこのお嬢かと思ってた。

「そういえば、俺に会った時ちょうどいいとか言ってなかったか？　何か用事でもあったん？」

「ええ。実は、アリスさんの部屋の事なのですが――」

「――まあ、しょうがないか。任務のためにも同じ部屋の方が何かと都合もいいだろうしな。おい、自分が美少女だからって変な事するなよ。生殖機能は付いてないからどうしてやる事もできんぞ」

「アホか！　ロボット相手にそんな気起きるか！　くそう、どうしてこうなった！」

」
俺とアリスの急な雇用のため、部屋が一つしか用意できなかったらしい。
お連れさん同士だし、しばらく相部屋でお願いしますとの事。
俺とアリスがずっと旅をしていたという設定が、こんな時に裏目に出た。
「ムラムラきたら、しばらく部屋から出てやるくらいには理解があるから安心しろ。後、部屋に入る前にはちゃんとノックしてしばらく経ってからドア開けるから」
「そんな気遣いはいらねーよ！　俺を猿かなんかだと思ってんのか！」
改めて、あてがわれた部屋を眺めてみる。
ベッドはちゃんと二つ用意してくれたのはありがたい。
他に備え付けられているのは質素なイスとテーブルに、タンスが一つ。
そして……。
「……見ろよアリス、水道が付いてるぞ。あと、これってランプじゃないよ

な？　油入れるところがないもん。壁(かべ)にもコンセントがないテレビみたいなのがくっついてるし。未開な土地に俺達の星の道具を持ち込んで神のごとく崇(あが)められようと思ってたのに、これじゃダメじゃん」

「ここの文明レベルも侮(あなど)れないな。そのランプやテレビもどきは魔法(まほう)的な物で動くんじゃないのか？　人造キメラなんて生み出す技術もあるみたいだし、城に残されていたアーティファクトといい、調べなきゃいかん事は山ほどあるな」

日本から持ってきた荷物を広げ、これでこの地での生活はなんとかなりそうだと一息つく。

重い戦闘服を脱(ぬ)いでベッドに寝転(ねころ)ぶ俺に向け、

「おい六号。ところで明日は、スノウの口ぶりだといきなり戦闘任務がありそうだ。本来の我々の任務を忘れるなよ？　基本的にこの国のサポートはするが、旗色が悪くなったら無理せず退却だ。騎士に取り立てておいての厄介者扱いは誰が仕組んだのか知らないが、なかなかいい性格をしているヤツがいるみたいだしな。あまり舐めていると痛い目を見るぞ」

　何がそんなに気に入ったのか、乾いた布でショットガンをきゅっきゅと磨いて手入れをしながらアリスが言った。

「そんな事ぐらい分かってるさ。でも王様との面会の時に、ナイフは没収されたのに拳銃は取り上げられなかった。つまり、ここの連中は銃が何だか分かってないって事だ。戦車の残骸もアーティファクトだとか言ってたし、まだ剣や弓で戦っている戦争レベルならいくらでも手はあるさ。職と住む所は手に入れたし、ここは大きい手柄の一つでも挙げて、褒美にアジトを貰っちまおうぜ！」

ま、せ……」

二章 商売仇を蹂躙せよ

1

翌朝。

「――卑怯な。敵の補給を狙うだと？　補給部隊は基本的に、戦闘に使えない下級の魔族で構成されているんだぞ。そんなものを襲撃して手柄になるか！」

王城の前に整然と騎士団が整列する中、俺達は一番隅っこに並ばされていた。

今から、この都市の周辺に集結をはじめている魔物の群れを叩くらしい。

整列した騎士団の前では、この国の将軍らしき人間がなにやら演説をしている。

そして、そんな連中とは別に、好きにやれとの命令を受けたいらん子小隊である俺達は、独自に作戦を考えていたのだが……。

「隊長、できればあたしも強い敵と戦いたいです。お爺ちゃんの遺言で、この世の全ての魔獣肉を食らい尽くし、最強のキメラとなれって言われてるんです」

こいつ、爺ちゃんっ子なのか。

遺言を果たすためとか言われると、悪の戦闘員な俺のちっぽけな良心でもぐらついてしまう。

「うーん、その気持ちは汲んでやりたいとこなんだが……。それだったら、誰かが倒した魔獣の肉をこっちに回してもらうんでもいいんじゃないのか？」
「新鮮な魔獣のお肉じゃないと美味しくないんですよねえ……」
……良心のぐらつきを返せよ腹ペコキメラめ。
「ロゼの言う通りだ！　強い敵が多くいる部隊は、それだけ大物の指揮官がいる。そこに突撃を敢行し首を取る。なに、この私が強敵を引き受ける。雑魚はグリムの呪いで一掃させよう。ロゼは私について来い！」
問題は、この手柄に目が眩んでいる脳筋女だ。
補給部隊を襲撃しようという提案を、スノウが頑なに反対していた。
俺がどれだけこの作戦の有用性を説いても聞きもしない。
この心の狭い女は、昨日乳を揉んだ事をまだ根に持っているらしい。
と、そんな俺達を見かね、アリスが口を開いた。

「まあ聞け、お前ら。補給部隊を襲う事は手柄にならないと思っているようだが、それは違うぞ。まず第一に、お前達は普段真正面からバカ正直に攻めるだけ。だから敵も補給を潰されるとは思わず、舐めてかかっているだろうからロクな護衛もいるまいよ。で、最前線で戦っている敵は、補給部隊が全滅なんて聞いたらどう思う？　少なからず混乱するさ」

「……むう」

　眉を寄せてアリスの説明を聞くスノウ。

「そして第二に、補給がなくなるという事はどこの戦争においても致命傷だ。たとえ戦闘に勝っても、物資がなければそこに留まれず撤退せざるをえない。我々が補給を絶てれば、たとえ騎士団が戦闘に負けたとしても敵は帰る。たった一部隊が敵の行く末を決めてしまうんだぞ。コレを大手柄と言わないでどうするんだ」

「………………ふむ」

俺の時とは違い、素直に話を聞くスノウが憎たらしい。

「ついでに言えば、一度でもこれをやっておくと敵は今後警戒する。警戒するという事は補給部隊にも護衛の兵が割かれるわけだ。たとえ我々が、今後一切補給部隊を襲わなくてもな」

アリスの言う通り、その分僅かばかりとはいえ、最前線に回される敵の数は減ることになる。

……ていうか、それもさっき俺がちゃんと説明したはずなんだけど。

「……どうだ？　補給部隊を襲うという単純で当たり前の作戦だが、長期的な目で見ていかに有効であるか理解できるか？　騎士道というものは知っているが、これは戦争なんだ、割り切るべきだよ」

「…………アリスの言っている事は理解できる。だが、大きな手柄と認めてもらえるかどうか。降格された事により給料も下がってな。このま

もらえるかどうか……　降格された事により給料も下がってた……　このままでは我が愛剣コレクションの一つ、灼熱剣フレイムザッパーのローンが払えず、取り上げられてしまう……」
　スノウはそう言うと、泣きそうな顔で自らの剣を胸に抱く。
　愛剣コレクションって、こいつ刀剣マニアなんだろうか。
「それに関してはこの男に任せておけ。手柄を誇張し、最大限に報告するのは大の得意だ」
「……なるほど。確かに、そんな姑息そうな顔をしている」
「お前ら、一発ずつ引っぱたいていいか？」
　話はまとまったかと思われたが、ロゼがお腹を押さえながら、切なそうに呟いた。
「あのう、それじゃあ今日の任務は補給部隊の襲撃ですか？　あたし、貰ったお給金で未だ食した事のない魔獣のお肉を買い漁ってるんで、いつもお金

がすぐに尽きちゃって……。今日も朝から何も食べていないんです。魔獣が食べられないとなると、そろそろ泣きそうなんですが……」

コイツの普段の食生活が凄（すご）く気になるなあ……。

まあ、そういう事なら。

「襲撃した補給物資は好きにしていいぞ。といってもほとんどが食い物ばかりだろうがな」

「補給部隊の襲撃作戦でいきましょう！」

「……あれか。なるほど、確かに油断しきっているな。ロクに武器すら持って

いないではないか。おいグリム、そろそろ起きろ」
　敵が集結している地点から、少し離れた街道の茂みに身を隠した俺達は、目の前をゆっくりと横切ろうとする補給部隊に狙いを定めていた。
　小柄なロゼに車いすを押してもらい、ここまで眠ったまま運ばれてきたグリムが、スノウにユサユサと揺らされる。
　ちなみにこいつは先程の作戦会議の時もずっと車いすで眠っていた。
「うう……、な、何？　目を覚ましたら太陽の下で野ざらしとか、私に恨みでもあるの？　ううう……太陽なんて滅びればいいのに……」
　スノウに起こされ、頭をフラフラさせながら変な事を口走るグリム。
「グリム、今から戦闘だ、しっかりしろ。といっても相手は雑魚ばかりだが、油断はするなよ」
　油断なく辺りを見回しながら、スノウが愛剣の具合を確かめる。

「雑魚ばかりなら、この大司教のグリムさんの出番じゃないわね……」

「おいこら、寝るな！」

「バカ、声がデカい！　気づかれたじゃねーか！」

スノウとグリムが言い合っている声で相手に気づかれてしまったらしい。

——あれは俗に、日本のファンタジー漫画なんかでオークと呼ばれている魔物だろうか。

豚顔の、ロクに武器も持たない二足歩行の怪物達が、物資を積んだ台車を引っ張っていた。

しかし、オークって地球の伝承にあった空想の生き物だよな。

それがなぜこの星に生息しているんだろう。

……まあ、そんな疑問は今考える事じゃない。

「気づかれたからにはしょうがねえ。お前ら行くぞ！　戦争だ!!」

俺は隠れていた茂みから飛び出すと、戦闘員マニュアルに書いてある、テン

プレートともなっているセリフを大声で。

「ヒャッハァー！　ここは通さねえぜぇぇぇぇぇ！」

叫(さけ)ぶと同時、抜(ぬ)いたナイフの刃(は)を舐(な)めながら襲い掛(か)かった！

——ショットガンの音が鳴り響(ひび)く。

アリスが放った銃弾(じゅうだん)により、オーク達が次々と倒れ伏(ふ)す。

「ヒャッハァ！　逆らうヤツは皆殺(みなごろ)しだぁ！　命が惜(お)しけりゃ荷物を置いて失(う)せやがれ！」

「失せやがれ！」

マニュアルにあるセリフを叫びながら、先頭のオークが引っ張っていた荷車

に蹴りを入れると物資を載せた荷車が引っくり返った。
横転した荷車に道を塞がれ、後続の連中が足止めされる。
俺とアリスが輸送部隊に突っ込むと、豚のような悲鳴を上げてオーク達が逃げ惑った。
俺達のすぐ後ろをついてきていたロゼが、戸惑った声で告げてくる。
「た、隊長、そのセリフはやめませんか？　これはただの軍事作戦のはずなのに、あたしなんだか、物凄い悪事に加担している気になってきます……」
そんな事言われても、これは戦闘員マニュアルにある、敵への正式な降伏勧告なのに。
「あっ、隊長！　敵の補給物資はどうしたらいいですか？　大量にありますが！」
「お前がお持ち帰りする分以外は全部焼き払ってしまえ！　魔王軍の連中

に、俺達の恐ろしさを思い知らせてやるのだ！　フハハハハハ！　フハハハハハハハッ!!」

「わーい、隊長素敵ーー！」

　ロゼに物資の焼却を指示した俺が高笑いを上げていると、背後から凄まじい殺気を感じた。

「殺ったーー！」

「うおうっ！」

　とっさに転がり回避をすると、そこには剣を突き出した姿勢のスノウの姿が。

「おい。……おいこら、お前今俺に何した」

「……チッ」

「お前今、舌打ちしただろ！　今、俺の事を本気で殺そうとしただろ！」

やっぱりこの女は頭がおかしい！
今後絶対にこいつには背中を見せないでおこう！
いや、もうここまできたら、いっそここで事故に見せかけて……。
「な、なんだその目は。やる気か？　いいぞ、こい！　乙女の胸の代償は高くつく事を教えてやろう！　我が愛剣の錆にしてやる！」
……と、俺達が一戦を交えようとした、その時だった。
「我が業火の海に沈むがいい……！　永遠に眠れ、クリムゾン・ブレス！」
ロゼのそんな叫びと共に、敵の補給物資が凄まじい熱と光に包まれた。
見れば、なんとロゼが灼熱の炎を吐き出している。
それを見た俺は、思わず日本語が口を突く。
『……おいアリス、あれがキメラの特殊能力か？　あの子、人造らしいけどさ……。この星にはあんなんがポンポンいたりしないよな？』

『アイツを地球に持って帰ったら、クリーンでエコなエネルギー源にならないかな。なんであんな事ができるのか、後で色々調べてみよう。実に興味深いヤツだよ』

　物資と共に炎に包まれたオークが悲鳴を上げて転げ回り、辺りに豚肉の焼ける匂(にお)いが漂(ただよ)った。

「……じゅるっ」

　その匂いに、ロゼが口の周りをすすだらけにしてよだれを……、おい。

「よだれよだれ。後、口の周りすすだらけだぞ。それと、一応言っとくけど戦闘(せんとう)中なんだからオークを食うなよ？」

「！」

　慌(あわ)てて口の周りを袖(そで)で拭(ぬぐ)うロゼの周りでは、何とか反撃(はんげき)しようとしているのか、オーク達が手近な物を手に取ってじりじりと近づいてくる。

「おいロゼ、ところで教えて欲しいんだが。さっきの前口上やお前さんが取っていたカッコいいポーズは、ブレスを吐く前には必ず必要なものなのか？」
「勘弁（かんべん）してくださいアリスさん、分かってて言ってるんですよね！　アレはお爺（じい）ちゃんが……！」
　と、涙目（なみだめ）でアリスに抗議（こうぎ）するロゼに向け、チャンスと見て取ったオーク達が殺到（さっとう）する。
　だが、いつの間にかオークの後ろに回っていたスノウが、目も眩（くら）むような紅（あか）い斬撃（ざんげき）をオーク達の背に浴びせかけた。
　スノウの灼熱剣が閃（ひらめ）く度（たび）にオーク達は炎に包まれ、悲鳴を上げながら次々と地に倒（たお）れ伏していく。
　まるで騎士（きし）のお手本とでも言えそうな、王道の剣術の腕（うで）に少しだけ感心する。

『六号、あいつも生身の体なのにやるなあ。騎士団ってのはあのレベルの連中がゴロゴロいるんじゃないだろうな。それだと、侵略が少し面倒な事になるぞ』

『いや、あの女はなんのコネもなく実力で騎士隊長にまで登り詰めたエリートだって聞いたな。流石にあいつみたいなのが騎士の標準だとは思いたくない』

　俺とアリスがボソボソとやっていると、スノウが目ざとく見咎めた。

「おい、まだ敵は残っているんだ、喋ってないでとっとと……、グリムはどうした？」

　そういやロゼの実力は見せてもらったが、グリムがまだ力を使ってないな。

　アイツが言ってた、呪詛ってヤツを一度この目で見てみたいのに。

そんな、スノウに呼ばれた本人は……。

最初に俺達が隠れていた茂みで、車いすの上で丸くなって眠っていた。

「「……おい」」

思わず出た声がスノウとハモる。

「まったくあいつは……。いくら夜しか活動できない身体（からだ）だといっても弛（たる）みすぎている。ちょっとキツイ制裁を……」

怒気（どき）をはらませグリムに歩み寄るスノウ。

俺はそれとは逆に、グリムとスノウに背を向けながら……。

「もうオークはあらかた逃げ出したし、ほっとけほっとけ。グリムは俺が押して持って帰るよ」

と、その時。

と、その時

俺達の頭上に影（かげ）が差す。

思わず空を見上げると、そこには──

「何アレ」

地球で伝承などでのみ見られた、伝説の幻獣（げんじゅう）。

グリフォンとか呼ばれる巨大（きょだい）生物が、ゆっくりと降下してきた。

3

「「グリフォン！」」

ゆっくりと降下してきたそれは、ワシの頭にライオンの身体を持ち、巨大な翼（つばさ）を羽ばたかせる生き物だった。

それを見て、なにやら緊迫しているスノウとロゼ。
そんな二人をよそに、初めて見る巨大な生き物に俺とアリスは……。
「おい、あれがゲームや漫画によく出てくる、あの有名なグリフォンらしーぞ！　オークといい、なんで向こうの空想の生き物がここにいるんだ？　そうだ、確かデジカメ持ってきてたな！」
「いや、グリフォンと聞こえているのは自分の意訳だ。しかし、どんな原理で飛んでいるんだ？　あのサイズを飛行させるには、ヤツの胸筋と翼では不可能なはずだが。あんなもん地球に連れ帰ったら、航空力学の学者達に石を投げられるぞ」
観光気分で写真を撮っていた。
「おい六号、何をしている！　遊んでいないで戦え！」
そんなスノウの警戒に対し、上空から声が投げかけられる。

「おっと、あたしが用があるのはお前じゃなく、そこの荷物だ！」
声の主は、ゆっくりと下降してくるグリフォンの背中にいた。
それは、白髪赤眼褐色肌の、頭部から二本の角を生やした女魔族だった。
「――まったく、部下に丸投げするんじゃなかったよ。補給部隊が遅いと思って来てみればなんてザマだ。ったく、やってくれたねえ……！」
そう言ってグリフォンの背から降りてきた、赤を基調とした露出の激しい衣装の美女。
「この惨状はお前達がやってくれたのか？　けったいな鎧を着た兄さん、見たところお前がリーダーだろ？　なんとか言いな！」
けったいな鎧って、この戦闘服の事だろうか。

褐色の巨乳に話しかけられた俺はといえば……。

「……なああんた、あたしの話聞いてる？　さっきから何してんの、それ？」

類まれなる褐色巨乳をカメラに収め続けていた。

「おい。……おい、六号。おい。どうせ撮るならグリフォン撮れ。お前、何取り憑かれたようにあの女ばっか撮ってんだ」

アリスの言葉に、俺は仕方なくデジカメを下ろし。

「……確かにお前らの補給部隊を襲ったのは俺達だが。そういうあんたは、その服装と態度からして……。なるほど、魔族の幹部クラスか」

俺の返事に、巨乳がほうと感嘆の吐息を漏らす。

「ひと目見ただけで幹部だって分かるのか？　お前、なかなかにいい眼をしてるじゃないか。いかにも、あたしは魔王軍四天王が一人、炎のハイネ！　あたしの力を見抜くとは只者じゃないね！」

そう言って、ハイネと名乗った女は目を細めて胸を張る。
「フ……、まあな。お前からは悪の幹部特有の、独特のオーラが感じ取れる」
ウチに所属している幹部連中は大概どこかおかしな人達ばかりだ。
この無意味に露出の激しい奇抜な服装は、世界は違えどもまず間違いなく幹部だろう。
そう、変人オーラってやつだ。
「へえ、人間にしてはなかなかやるね！　……ふふっ、気に入った。あんたはこのまま殺すのはちょっと惜しいね。そこの荷物を置いていくなら命は助けてあげるけど？」
ハイネは心底楽しそうに目を細め、怪しげな笑みを浮かべてくる。
「何をバカな事を！　魔族の言う事に耳を貸す人間がいると思っているのか!?」

「そうです！　たとえ幹部が相手だろうと、人類が悪に屈する事などありえません！　あと、この物資はあたしの晩御飯ですから！」
そう言って、ハイネの言葉にいきり立つ二人なのだが。
「……おい、どうするアリス？　アイツどう見ても怪人級だよな？　今の装備じゃキツイんだけど、今日はもう帰ろうか」
「そんなんだからお前はいつまで経っても平社員なんだよ。ていうかちょっとは空気を読もうな」
俺達の言葉にスノウとロゼがギョッとする。
「き、貴様という男は、敵に怖気づくなど恥を知れ！　やはり最初に会った時に斬っておけば良かった！」
「た、隊長、あたしのご飯が！　もうほんとひもじいんです、お願いします、帰らないでください！」

俺が糾弾される中、ハイネが一瞬キョトンとした表情を浮かべた後、大声で笑い出した。

「あっはははははっ！　お前、素直で面白いなぁ！　いっそ魔王軍に入らないか？　腕は立ちそうだし、人類圏を完全に制圧したあかつきには、お前を人間どもの管理者にしてやってもいいぞ。気に入った女は全てお前の物にすればいい」

「入ります」

「待て六号、即決すんな。……おいお前、ウチの戦闘員を勝手に引き抜かれたら困るよ。頭の弱いコイツだが、これでも主戦力の一人なんだ」

その言葉に、ハイネは今さら気付いたようにアリスにジッと視線を送った。

「……へぇ？」

アリスを観察していたハイネは、不思議そうに小首を傾げ。

「……お前、人間……か？　しかしなぜか、ゴーレム臭いな……？」
　そんなハイネの呟きは、俺に非難の眼差しを向ける二人の耳には届かなかったらしい。
「で、どうする？　あんた、あたしと一緒にウチに来るかい？」
　ぜひ行きますと言いたかったが、みんなからの視線が痛い。
　これ以上冗談言ってると本当にスノウに刺されそうだ。
「悪いな。俺にはもう怖い上司がいるんでね」
　言いながら、俺はナイフを引き抜き身構える。
「……帰ったら、怖い上司って言ってたってチクってやろ」
「ア、アリスさん、やめてください……」

ハイネは俺の答えに怒りもせず、目を細めながらククッと小さく喉を鳴らす。
「だろーね。見た感じ、お前は口では色々言っても、実際には弱者を裏切れないヤツだと分かっていたさ。あたしの眼は確かだ。あんたの名前を聞いてもいいかい？」
マジかよ、自分でも知らなかったが俺は弱者を裏切れない漢だったのか。
なにこの人、なぜか俺への評価が非常に高い。
初対面のくせに俺に高圧的に命令してきた鎧女や、安月給で人をこき使い、転送機で殺しかけた上司の顔が脳裏にチラつき、本当にこのまま付いて行ってしまおうかと一瞬悩むが……。
「戦闘員六号だ。六号って呼べよ、魔王軍四天王、炎のハイネ」
俺に名前を呼ばれたハイネは、一瞬の間の後、実に嬉しそうな顔をした。
「お、おう、六号か！　そう、あたしは炎のハイネ！　魔王軍四天王、炎のハ

イネだ！」

……なるほど。

『おいアリス。この女、ウチの幹部みたく通り名付きで呼ばれないと機嫌が悪くなるタイプだ』

『逆に言えば通り名で呼ばれると上機嫌になって扱いやすいって事だけどな。きっと、お約束の流れが大好物なヤツだぞ』

俺とアリスが日本語で囁き合っていると、ハイネは嬉々とした表情で声を上げ、手のひらに青い炎を宿らせる。

ええっ、なにこれなにこれ、なんだこれ！

これが魔法ってヤツなのか！

「何をコソコソやっている。行くぞ六号！　なに、命までは取らないでおいてやるさ！　魔王軍四天王、炎のハイネの力、思い知るがいい!!」

4

　俺はグリフォンの重い前脚での攻撃を、両腕をクロスさせて何とか受け止め押し返し、ハイネが投げ放つ炎の塊を、地面に転がりながら躱し続けていた。
「六号、まだ起き上がるな！　そのまま伏せろ！」
「うひょおおおおおおおお！」
　起き上がろうとしたところをまたグリフォンが襲い掛かり、
「隊長、後ろー！」
「なああああああああーっ！」
　それをあしらう間にハイネが炎を……。

「おい！　こっちの方が人数多いのに、何で俺一人で戦ってんだよ！　おかしいだろ！」
　叫びながらバックステップで躱す俺の前髪を、炎の塊が掠めていく。
「こ、今回の戦で持ってきたのは灼熱剣なのだ、炎を操る幹部を相手に、この武器は相性が悪すぎる！　敵の補給物資を焼いてしまうから、その間ハイネとグリフォンを足止めしろ！」
「あ、あたしはその間、スノウさんに焼かれないよう、持ち帰る分の物資を避けちゃいますね！」
　身勝手で頼りない仲間達の声を聞きながら、この理不尽な状況に寝返ろうかと本気で悩む。
「あっはははは！　凄い！　凄いよ！　グリフォンとあたしの攻撃を、こうも躱し続けるなんて!!　お前は一体何者なのさ!?」

なぜかご機嫌なハイネの笑い声を聞きながら、スノウを盾にしてやろうと振り返った、その時だった。

ハイネの炎をなんとか躱した俺に飛びかかろうとしたグリフォンが、轟音と共に上半身に銃弾を食らいのけぞった。

音が聞こえたその先には……。

――ショットガンを抱えたアリスが、地面に仰向けで転がっていた。

対大型猛獣用の特殊弾をぶっ放した反動に耐えられなかったらしい。

「……お前、助けてもらってなんだが、一体どれだけ貧弱なんだよ？」

「うるさい、お前が無様に逃げ回る中、ずっと隙を覗ってたんだ。そっちこそ

もうちょっとマシに戦えないのか？」

立ち上がり、グリフォンに銃口を向けながらアリスが文句を言ってくる。

上半身に大量の散弾を喰らったグリフォンは、あちこちから血を流し弱々しい悲鳴を上げていた。

それを唖然とした顔で見ていたハイネは、集中が途切れたせいなのか、手に浮かべていた炎を消しアリスの抱えているショットガンに目を見張る。

「……お前みたいなガキが、グリフォンを怯ませるだと？　なんだその武器は。……いや、お前達二人は本当に何者だ？」

ハイネは顔から余裕を消すと、体勢を低くして身構えた。

纏っている空気が先程までとは打って変わり、明確にこちらを敵と認識し

たものになる。

グリフォンよりこの女の方が危険だと脳内に警報が鳴り響く。

アリスも同意見らしく、銃口をグリフォンからハイネに向けて、その挙動に注視した……！

「どうやら形勢は逆転したようだな。さあ、このまま私の手柄になってもらおうか！」

補給物資をあらかた焼いたスノウが、身動き取れない状況を察知して、ここぞとばかりにやってくる。

コイツはさっきから、幹部戦ではちっとも役に立っていないクセになんなんだ。

俺が、手柄にしか目のない欲深女に文句を言おうとした、その時だった。

――背後で鈍い音がした。

それは、高いところからとてつもなく重いものが大地へと落ちる音。

俺が後ろを振り返ると、大きな何かがそこにいた。

辺りが突然暗くなる。

空から降ってきた、ソレが翼を広げたのだ。

アリスがぽつりと呟いた。

「怪人級……」

突然空から降ってきたそいつは、黒い光沢を放つ、硬質的な身体と特徴的な角を持つ人型の魔物。

身長にして三メートル以上はありそうだが、その重量感が凄まじい。

[illegible]蝙蝠の翼と牙の巨大な鬼。

一言で言えば蝙蝠の翼を持つ巨大な鬼
それが、片手に金属製の棍棒（こんぼう）を握（にぎ）り、悠然（ゆうぜん）と翼を広げて佇（たたず）んでいた。
『スノウを囮（おとり）にして即刻（そっこく）逃（に）げるぞ。行くぜアリス！』
『がってんだ！』
「おい六号、この状況でその謎（なぞ）言語はやめろ！　今よからぬ事をやり取りしただろう！」
スノウが何かを喚（わめ）いているが、相手をしている暇（ひま）はない。
ハイネとグリフォンだけでも厄介（やっかい）なのに、この上あんなもんを相手にしてられるか！
と、その時。
「……あっ……あれ？」
そんな場違（ばちが）いな寝ぼけ声が聞こえてくる。

見れば、落ちて来た怪人級の化け物の傍に、見覚えのある車いすが。
こんな状況ですら眠っていたグリムが、すぐ近くで立てられた音と振動で目を覚ましたのだろう。
目をこすり、ぼんやりした顔で辺りを見回すグリムは、その大きな何かと目が合った。
「お、おはようございます……？」

グリムが寝ぼけたようにそんな事を呟くと、ソレは手に持った金属製の巨大な棒を振り上げ――

――それはパキャッという何かが砕ける乾いた音。

首から上を無くしたグリムが、車いすにゆっくりと背を預けた。

「お、おい。グリム？」

ピクリとも動かないグリムを見て、すぐさまスノウが身構える。

「六号！　私がアレの相手をする。貴様はその間にグリムを回収してこい‼」

グリムの回収？

いやだって、今のはあきらかに致命傷で。

「ああ？　コレの回収？　お前、大丈夫か？　コレはもうただの肉だろ」

そう言って、金棒をブンと振って血を払ったソイツはグリムの車いすを蹴飛ばした。

車いすが破壊され、投げ出されたグリムがドサッと地に落ちる音。

「おいハイネ、こんな雑魚相手に何を遊んでやがんだよ。人間イビリなら俺も交ぜろよ！」
「チッ、遊んでたわけじゃないよ。もういい、興が冷めた。後はあんたが好きにしな」
ハイネはそう言うと、未だ弱々しい鳴き声を上げるグリフォンに乗り背を叩く。
立ち去る前にチラリとこちらを覗うと、ハイネはつまらなそうに去って行った。
――この短時間の一連の成り行きに脳が追いつかない。
そうだ、スノウに言われたように、早くグリムの回収だ。
ああ、そういえばグリムは魔法使い的なカテゴリーに入る隊員だったはず

だ。
　ならきっと、アレは幻術的な何かなのだろう。
「おい六号、しっかりしろ！」
　いつの間にか隣にいたアリスが、俺の背中をバンと叩く。
「うおっ！　お、おう。よ、よしスノウ、そいつを頼む。グリムは任せろ！」
　俺がそう言って駆け出すと、スノウが俺に合わせて前に出る。
「アア？　ちょっと小突いたくらいで簡単に死んじまう人間が、俺の相手をするだぁ!?　面白くねえ。面白くねえなァ人間！」
　巨大な翼をはためかされる、ただそれだけで強烈な突風が押し寄せる。
「くう……っ！」
　風に煽られたスノウが近くに寄れずに小さく呻く。
「おい人間、殺す前に名乗ってやるから覚えとけ！　俺は魔王軍四天王が

一人、地のガダルカンド様だ！　覚えたか？　覚えたな？　よし、じゃあ、お前らもプチッと死ね！」
　ガダルカンドとやらが叫ぶと同時、アリスの散弾が撃ち放たれた。
　とっさに両腕で顔を庇ったガダルカンドは、硬質的な音を立てて散弾をはじきながら、そのままスノウに向かって走り出すと、助走をつけるように大地を踏みしめ……！
「すううううっ！」
　それに合わせて、ロゼが大きく息を吸い込んだ。
「うおおおおっ！　こ、このっ！　なんなんだお前は、舐めた真似しやがってっ！」

今まさにスノウに飛びかかろうとしていたガダルカンドが、ロゼが吐き出した炎に包まれる。
追撃とばかりにスノウが灼熱剣を振るわせると、燃え盛っていた炎が勢いを増し、ガダルカンドは苦悶の声を上げて後ずさった。
ガダルカンドが翼をはためかせて纏わりついた炎を消し飛ばす中、俺はグリムに駆け寄り抱き起こすと……！
思考が止まる。
どう見ても、それは幻術でもなんでもなく。
頭部を失ったグリムの体からはグッタリと力が抜け……。
『──なあアリス、これどうなってんだよ。この星の人間は、このぐらい大丈夫なのか？』
『六号、冷静になれ。ソイツはもうダメだ、すでに死んでる』
グリムを抱えた俺に、アリスがそう告げてくる。

グリムを抱えた俺にアリスが話しかけてくる
その言葉で、頭にカッと血が上った。
グリムとは昨日会ったばかりの間柄だ。
ぶっちゃけこいつに関しては紐パンである事以外何も知らないが、それでも言葉を交わした仲ではあって……。
「あの野郎、ぶっ殺してやる！　おいアリス、スノウ、援護しろ！　四天王だかなんだか知らんがそいつを殺るぞ！　ロゼはグリムの遺体を頼む！」
激怒している俺の指示に、スノウが一瞬ビクリとするも、
「わ、分かった！　こいつは敵の大幹部の一人だ、ここで討ち取っておけば大戦果だ」
そう叫んで俺の隣にピタリとついた。
「うはっ！　なに熱くなってんだよ人間！　もっと人生楽しくいけよ、それでなくてもお前らは、寿命短いし簡単に死ぬんだからよ！」

「[illegible]」

「コイツ、絶対ぶっ殺す！　アリス、Rバッソーを転送してくれ！　ズタズタに引き裂いてやる！」

「おう、分かった！」

ガダルカンドの挑発に、全員が動こうとしたその時だった。

「何をしておられるのですかガダルカンド様！」

空から声がかけられる。

そこにいたのは、ガダルカンドを二回りほど小さくしたような姿の魔物だった。

「何だお前か。いやな、今日の戦はクソ生意気なラッセルの野郎が指揮してるからよ。のんびりと戦場に向かってたら、ハイネが、補給部隊を襲っていたこいつらと遊んでやがったからよぉ」

「すでにハイネ様は戦場に参戦されて、戦闘が始まっております！　少数の人間相手に遊んでもらっては困りますよ！　補給部隊が襲われようが、それは戦の指揮を執る水のラッセル様の責任となります。ですが、あてがわれた戦場に遅れれば、それはあなたの責任です！　我らが一族のためにも、早く前線にお越しくださいませ！」

　その言葉にガダルカンドは舌打ちすると。

「命拾いしたな人間。これからは俺の姿を見た時は隠れとけ！　じゃあな！　その女の遺体を抱きながら、城に泣いて帰るといいぜ!!」

　クソみたいな捨て台詞を残し、空高くに舞い上がった。

「待てこの野郎、逃げんのか臆病もんが！　お前ふざけんなよ、降りて来いオラアアアアアァ！」

そんな俺の叫びも虚しく、ガダルカンドは戦場へと飛び去って行った——
「——あの野郎、戦場に向かうって言ってたな」
「……ヤツを追う気か？　それは現実的ではないな。空を飛ぶ相手に追いつけない。今から戦場まで向かっても時間が掛かるし、その頃には戦争が終わっているかもしれん。それよりは、グリムをどうにかしてやった方がいいだろう」
取り残された俺の呟きに、隣に佇むスノウが言葉を返す。
「……アリス、Ｒバッソーは？」
「アイツが空に舞い上がった時点でメモ送るのは中止した。……送ってもらうか？」
「………いや、いい。グリムを弔ってやろうぜ。あの野郎はどうせその内戦場に出てくるだろ」

俺は、ロゼがせっせと敵の補給物資の台車に乗せている、グリムの遺体に目を向けた。
勿体ねえなぁ……。
言動がちょこちょこ怪しい上に、昼間はいつもぼーっと寝ぼけていたけど、見てくれはいい女だったのに……。
「スノウ、この国じゃ遺体はどうするんだ？　土葬か？　それとも燃やすのか？」
せめて、きちんと弔ってやろうという俺の言葉に。
「……ん？　もしかしてグリムから何も聞いていないのか？」
「……？」
何を言っているのかが分からないでいると、スノウは更に告げてくる。

「グリムが死んだと思っていないか？　コイツはこのぐらいで死にはしないぞ」

……………。

「はっ」

何言い出すんだこの女。

「いや、だから。グリムはまだ死んではいない。というか、ちゃんと履歴書を見なかったのか？」

そう言ってスノウが指差す先では、ロゼがグリムの遺体を積んだ台車の空いている部分に、せっせと戦利品の食料を積み上げていた。

少しでも多く積み込みたいという気持ちは分かるが、グリムの頭のあった位置にカボチャみたいな野菜を置くのはシュールだからやめて欲しい。

「えっと、つまりどういう事だ？」

呆然としながら尋ねる俺に、

「あの場に集まった連中は、厄介者ばかりだと説明しただろう。ロゼの場合は、見ての通り魔物の血が流れているからだ。あの娘はあれだけ強いのに、それだけで忌み嫌われ、どの部隊でも無茶な扱いばかり受けていた。単騎で敵に突撃してこいとかな。言ってみればほとんど使い捨ての扱いばかりだったのだ」

…………。

「この国には、相対的に俺が清く正しく善いヤツに思えるぐらいのクズがいるんだな」

「そうだ。貴様に匹敵するぐらいのクズが、この国には蔓延っているのだ」

このクソ女。

「そして、グリムだ。コイツが崇めるゼナリスという神は、ちょっと特殊な存在でな

[illegible]てた」
　スノウは言い難（にく）そうにしながらも。
「グリムは、知る人ぞ知る大司教。そしてゼナリスとは、不死と災（わざわ）いを司（つかさど）る太古の邪神（じゃしん）だ」

5

　俺達が城に帰還（きかん）すると、そこにはすでに騎士団の姿があった。
　こっちは補給物資をパクってきたため時間が掛かったといっても、これはいくらなんでも早すぎる。
　というか、よく見ると騎士団の数が出発前に比べて大分少ない。
　そしてその場にいる騎士達も軽くない怪我（けが）を負っていた。
「負けたな、連中の表情が暗い。だがこれは我々にとって好都合だ。六号、今

こそ手柄(てがら)を勝ち誇(ほこ)る時だ。誰(だれ)か偉(えら)いヤツを捕(つか)まえてこい。お前らは無様に負けて帰って来たが、我々の補給襲撃(しゅうげき)作戦の成功により、敵はこの地に留(とど)まれず撤退(てったい)するだろうと報告し、たっぷり恩に着せてやれ」

アリスが、敗戦で心身共にぼろぼろな連中に追い討ちをかける悪魔のような提案をしてくる。

「任せろ！　こんな事もあろうかと遂行(すいこう)した作戦だったが感謝しろよと言ってくる。ついでに、俺達は四天王の一人の足止めまでしていたのに、お前らはなんてザマだって罵(ののし)ってきてやるぜ」

「……ず、随分(ずいぶん)とゲスな所業だが、貴様らはこんな時だけ頼もしいな……。だがそういうのは嫌いじゃないぞ。失態を犯(おか)したエリートや強者をネチネチ追及(ついきゅう)するのは最高に楽しいからなあ。ああ、今も思い出しただけで、よだれ

が……」

コイツは出世街道を這い上がる間に今までどれだけの人間を蹴落としてきたのだろう。

ぶっ飛んだドS発言をするスノウに軽く引きながらも、俺は嬉々として報告に向かった。

――そこは王都から離れた場所にある、天井が吹き抜けになった小さな祭壇。

天然の洞窟を改造したと思われるその祭壇には、あちこちに邪悪な形の置物が並べられていた。

街の近くにこんな怪しげな施設があるのかと感心していると、洞窟の中

央にある台座にグリムの遺体が寝かされる。

「こんな所でグリムを蘇生させるのか?」

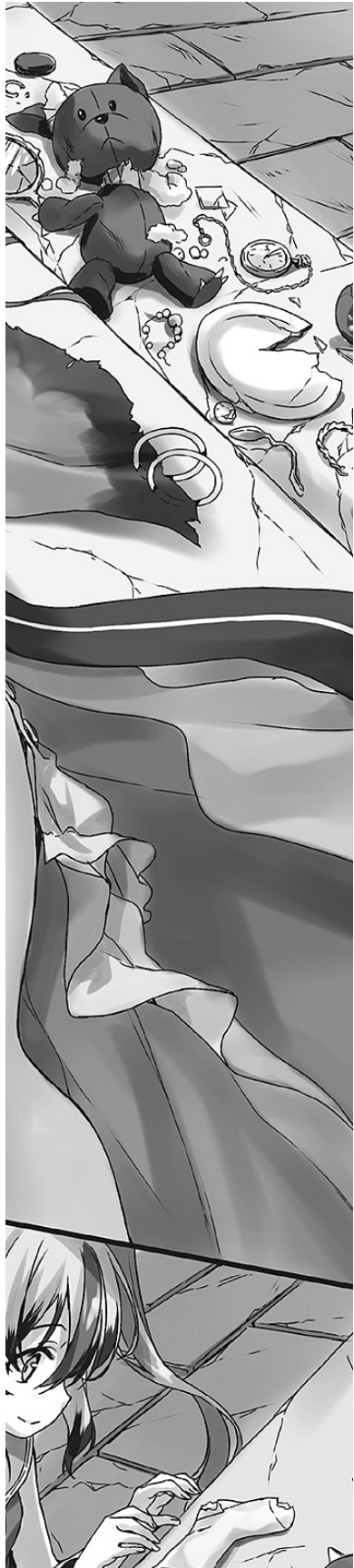
偉い人が涙目になるまで罵った俺は、アリス達の後に続き、祭壇にやってきていた。

「ああ。蘇生と言っても祭壇にグリムの遺体と供物を置いて、このまま放っておくだけだがな。後は夜になれば勝手に蘇っている事だろう」

「……供物ってひょっとして、そこに置かれたガラクタの事?」

グリムと一緒に置かれているのは、ボロボロになった人形や使い古した服、他にも大切に使われたのであろう年季の入った様々な道具、そして……。

「あっ、それはあたしが大事にしてたお気に入りの靴下です。穴が開いちゃったので、グリム蘇生のお供えに持ってきました」

グリムの枕元に置かれた靴下をしげしげと眺めていると、ロゼが恥ずかしそうに言ってくる。
マジかよ、グリムの命って靴下と同等の価値なのかよ。
「グリムが仕える邪神ゼナリスへの供物は、人の大事な想いや執着が籠もった品々だ。これだけの思い出の品があれば大丈夫だろう。……さて、私は食事をして部屋に戻る。今夜はゾーリンゲル社のナイフ特番があるんだ、アレを見逃すわけにはいかない」
「あ、私も大量に貰ってきた補給物資食べちゃいます！」
「自分は、ショットガンぶっ放しまくったからコイツの手入れでもしてくるかな。六号はどうする？」
皆が思い思いに行動する中、

「うーん、俺はこのままここにいるよ。グリムは夜になれば蘇生するんだろ？　どんな風に復活するのか見てみたいし、生き返って誰もいないってのも寂しいだろ――」

――夕日が沈み、辺りが薄暗くなっていく。
やがて夜の帳が下りる頃になってもグリムの蘇生はまだだった。
グリムが安置された台座から数歩ほど離れた所に、俺は膝を抱えて体育座りでじっと待つ。
ぼーっと吹き抜けから空を眺めていると、信じられない量の星の数が肉眼で確認できた。
それだけこの世界の空気は澄んでいるのだろう。
王都に高層ビル群がなく街灯が少ないのも、よく星が見える理由の一つかも知れない。
日本に帰った時のお土産代わりにデジカメで撮っておこうか。
そういや、オークやガダルカンドなんかも撮影しておくべきだったかな。
俺がそんなどうでもいい事を考えていると、グリムが置かれた台座がほん

の少し光った気がした。

……いや、気のせいじゃなく光ってる。

――と、グリムを中心に突然魔法陣のような紋様が浮かび上がると、吹き抜けの部分から空に向け、まばゆい光が突き抜けた。

やがて光が収まると、祭壇に置かれていた供物は無く、寝かされていたグリムがゆっくりと目を開ける。

グリムはそのまま上体を起こすと、頭痛を抑えるように頭に手をやりながら。

「……隊長？　そんな所でひざを抱えて何やってるの？」

「……お前が蘇生するのを待ってたんだよ」

何かを探すように辺りをキョロキョロと見回しながら、グリムが不思議そ

うな表情で尋ねてきた。

「どうして隊長は私の復活を待っていたの？　……あ、力の一つも使わないまま死んじゃったから、何か処罰でも受けるのかしら……？」

「うん？　いや違うよ。生き返った時に誰もいないとなんか寂しいかなと思って。供物を置いて放っておけば、そのうち勝手に生き返るって言われたのが、半信半疑だったってのもあるかな」

「な、なんか、私が死んでる間って結構雑な扱いなのね……」

　供物の中にお古の靴下があった事は言わないでやるのが優しさだよな。

　何かを探していたグリムはそれを諦めたのか、普段のおどおどした態度ではなく、俺を真っ直ぐに見つめると。

「それにしても、隊長は変わってるわね。今まで私が所属してきた部隊の隊長は、私の復活を待っていてくれるとか、そんな優しい人はいなかったわ

よ？」
「ほう。なんか、この国に来て初めて人として褒められてるっぽいんだが」
　俺の言葉に、グリムが目を細めて微笑んだ。
「ええ、褒めてるわよ？　普通の人は不死と災いの神、ゼナリス様を崇めているだけでも嫌な顔をするのに、その上何度死んでも蘇る不気味な私に対して、こうやって普通に会話してくれるし。ロゼに魔物の血が混じってると知った時も、隊長は特に気にもしなかったわね」
　そう言われても、ウチの組織の怪人の方がロゼよりインパクトあるしなあ。
「隊長に忠告してあげるわ。私やロゼはそうそう死なないからいいけれど、厄介者が集められたこの隊は、危ないところにばかり送られるの」
　そう言って、ちょっとだけ悲し気に微笑むグリム。

きっと今までにも、多くの厄介者が命を落としていったのだろう。
その今にも消えてなくなってしまいそうな儚げな表情のグリムは、誰だお前はと言いたくなるぐらいに、昼間寝ぼけてのんびりしているヤツとは別人のような印象を与えてくる。
厄介者が寄せ集められる部隊か。
生き残って戦果を挙げてくれれば儲けもの、死んでも別に困らない人間を配属させる、か。
なんて事だ、ウチの組織が可愛く見えるぐらいの黒さだな。
日本に帰ったら、一応こういう効率的な事やってたって報告しとこう。
……まあ、ウチの幹部達はこういう姑息なやり方はきっと嫌うだろうが。
「そんなわけで隊長。ここの隊は危ないわ。とっとと辞めて、この国を出た方がいいわよ？」

やっぱりどこか寂し気に、それでいてこちらを気遣うグリム。
その言葉に、俺は思わず素で返してしまっていた。
「はあ？　なに言ってんのお前。俺は今の隊から離れないよ？」
なにバカな事言ってんだといわんばかりの態度に、グリムが驚いた表情を浮かべる。
「た、隊長こそなに言ってるの？　この隊は、危険な最前線だとか、捨て駒みたいな任務ばかりを与えられるのよ？」
今更そんな事言われても。
「俺がもといた組織では、魔王軍の幹部クラスの強敵が、数百人単位で入り乱れて戦うような激戦区に送られてたぞ」
「……えっ？」
それを聞いたグリムが、驚きの声を上げる。

ヒーローが多数在籍するアメリカに真正面から侵攻した時は、それはもう酷かった。
「そんなんと遭遇しても、俺、ちゃんとこうしてピンピンしてるからな。今日だって、ほんとはお前を殺した魔王軍幹部だとか言ったあの野郎、八つ裂きにしてやろうとしたんだがな。なんかこっちを無視して戦場の方に行っちまった」
「そ、それは……。なんというか、運が良かったわね。普通は四天王クラスの魔物と対峙したら、まず無事ではいられないわよ……？」
　そうはいってもなあ。
「あの程度の相手なら、万全の状態での完全装備体勢なら、五人は相手にできるな」
　ヒーロー連中は大体五人一組で襲ってくるものだ。

俺は怪人でもないのにたった一人で連中の相手をさせられ、死にそうになりながらも撃退した覚えがある。
　そんな嫌な過去を思い出し顔を顰めていると、グリムはあっけにとられて押し黙った。
「……隊長は何者なの？　アリスが持ち歩いている変わった武器も気になってたんだけど……」
　おっと、このまま詮索されるのはよろしくないな。
「まあいいじゃないか、そんな事。ていうかよく考えたら、今の小隊メンバーって俺以外全員女のハーレム編制じゃないか。こんなもん、頼まれたって辞めないっつーの」
　その言葉に。
「ふふっ……。分かったわ。聞かれたくないのなら尋ねはしないわ。では、今後

ともよろしくお願いしますね、隊長」
　グリムが心底楽しそうに、穏やかな笑顔を見せてくれた。
「……さて、もう随分遅い時間ね。隊長はこれからどうするの？　今日は作戦行動があったから、明日はお休みよ？」
「まじかよ。この国、働いたら次の日休みとか待遇良過ぎだろ。前の所なんか、三日間徹夜でゲリラ戦やらされた後、帰還してようやく休めると思った俺をパシリに使った上司がいたぞ」
　その上司とは、なかなか研究室から出ようとしない自堕落幹部、黒のリリスの事だ。
「た、隊長も随分苦労してるのね。もしかして、私やロゼよりも大変な目に遭ってたり……」
「するかもしれないな」

[illegible]れない」

組織から離れて気付いたが、俺はひょっとしてかなりのブラック企業にいたんじゃなかろうか。

「そ、そう……。そ、それで隊長、今から何か予定は？」

「いやあ、何にも。つーかこの国娯楽が無さすぎだろ。昨日部屋をもらった後、ちょろっと街に繰り出したが、飲み屋ぐらいしかなかったしなあ」

そう、この国にはコンビニもなければ遊ぶ所も何もない。

いや、ひょっとしたらいかがわしいお店はあるのかもしれないが、まだ給料も貰っていない身としては、そんな所を探索する事もできやしない。

そんな俺に、グリムはクスリと笑いかけ。

「隊長。もし良かったら……。私とデートしない？」

……よく分からないが、これがこの世界でのデートらしい。

《悪行ポイントが加算されます》

《悪行ポイントが加算されます》

「あはははは！　あはははははは!!」

「ヒャッハー！　飛ばせ飛ばせぇぇぇぇぇぇ！」

グリムと俺は、王都の中を疾走していた。

正確にはグリムが乗った車いすを、俺が後ろから押して駆け回っているのだが。

「隊長、この車いすは凄いわ！　軽いし速いし、私、こんなの知ったらもう前の体には戻れない！」

「何せこれもキサラギ製だからな！　高品質のアルミフレーム！　ノーパンクタイヤの最速仕様！　グリム、今のお前はこの国で一番速い！」

先ほど蘇生したグリムが探していたのは愛用の車いすだったらしい。

だがアレはガダルカンドに蹴飛ばされ、壊れてしまった。

なので日本から適当な車いすを転送してもらったのだが……。

「最高よ！　今夜は最高の夜だわ！　あっ、隊長見なさいな！　前方にカップル発見よ！」

「よし、ショックに備えろ！　突っ込むぞ！」

「こっ、こらああああああ！」

車いすで街中のカップルの間に突撃するという嫌がらせを楽しんでいた俺達を、警察と思わしき制服姿の女が追いかけてきた。

「そこの二人、待ちなさい！　なんて迷惑な事をしているの!?　ここは逢引

き宿が建ち並ぶ、カップル達の憩いの場所よ？　そんな物で走り回るのなよそに行きなさい！」
　仕方なく足を止めた俺に向け、グリムが不思議そうな顔で見上げてくる。
「だからこそ、ここを駆け回ってるんだよなあ？」
「ほんとよね。この女は一体何を言ってるのかしらね？」
「あなた達、確信犯なの⁉　ちょっと署の方まで来てください、そこで話を伺います！」
　真面目そうな警官に、グリムがフッと鼻で嗤った。
「汝、こんな遅くまで働かされる者よ、もっと素直になりなさい。ほら、周りを御覧なさい？　憎いでしょう、このカップル達が！」

いえ、私はちゃんと彼氏がいるんですが……　いたっ！　痛い！　ちょっと
何をするの!?　公務執行妨害で牢にぶち込むわよ！」
　車いすの上からげしげしと、近付いて来た警官に素足で蹴りをくれだしたグリム。
「お前、その足動いたのか？　なんで車いすに乗ってんの？」
「これは呪いの反動でね。ゼナリス様のお力を借りる際には、色々な制約があるのよ……」
　呪いの反動？
「とにかく、意味もなくそんな物で走り回るのは止めなさい！　……まったく、こんなバカな事をしているから男の一人もできないのよ……」
　警官がぼそりと余計な一言を付け加えると、懐から小さな人形を取り

警官が[illegible]

出したグリムがカッと目を見開き指をさす。

「おのれ、よくも言ってくれたな！　隊長、披露(ひろう)する事のできなかった私の力、今こそ見せてあげるわ！　偉大(いだい)なるゼナリス様、この女に災(わざわ)いを！　立ち眩(くら)みを起こすがいい！」

「ぐっ⁉」

指を突(つ)き付けられた警官は、こめかみを押さえてよろめいた。

…………。

「えっ、お前の力ってこれだけ？　なんぼなんでもしょぼ過ぎないか？」

「隊長、呪いというのは必ずしも成功するとは限らないの。私の呪いの成功率は大体八割といったところかしらね。まず、同じ文言の呪いは使うごとに成功率がどんどん下がっていくわ。そして、呪いを発動させるにはそれに応じた供物(くもつ)が必要な上、不発に終わった場合には自らに降りかかるの。……そ

う、こんな風に……」
　グリムはそう言って、悲し気に自らの足をそっと撫でる。
「……なるほどな。足の力を弱体化させる呪いとか、そんなのが跳ね返ってきたのか……」
「いいえ？　これは靴を履けなくなる呪いのせいね」
　ちょっと同情した俺に謝れよ。
「く……。な、なんてしょうもない力なの……。なんだか憐れで、署に連行するのもバカらしくなってくるわね……」
　と、立ち眩みから回復した警官が、憐憫の眼差しをグリムに向けた。
　それを聞いたグリムが再びカッと目を開く。
　今度は懐から数体の人形を取り出すと、
「しょうもない力だと!?　そこまで言うのなら本気の呪いを見せてくれ

る！　偉大なるゼナリス様、この彼氏持ちに災いを！　タンスの角に足をぶつけた激痛を味わうがいい！」

「ッ!?」

　指をさされた警官はビクリと震（ふる）え、思わずギュッと目を閉じる。

「あああああああああ！」

　そんな警官の前では、右足の指先を抱（かか）えて泣き叫（さけ）ぶグリムの姿が。

「おい、車いすの上で暴れ回ると危な……あっ！」

「ああっ！」

　ジタバタと悶（もだ）えていたグリムは、俺と警官の見ている前で車いすから転げ落ち、頭を強打し動かなくなった。

……なるほど、これが呪いの反動か。

しかし　。

……

…………コレ、もう一度さっきの洞窟に持っていくのか？

7

翌日。

「勘弁してください！　勘弁してください！　ほんと勘弁してください!!」

「大丈夫大丈夫、これでお前はもっと強くなれる」

　今日は休みらしいので、フラフラと宿舎内をうろついていたのだが……。

「無理です無理です、昆虫系はほんと無理です！」

「昆虫は栄養が豊富なんだぞ。サバイバルでは虫を食うのが基本なんだ。わがまま言ってないでとっとと食え」

聞き覚えのある声に、通りかかった部屋のドアを開けてみる。
そこには、涙目のロゼにバッタを食わせようとするアリスがいた。
「お前ら一体何やってんの？」
俺を見付けたロゼが、盾にするように背中に隠れ、
「隊長、助けてください！　アリスさんが酷いんです！」
そう言って、怯えたようにアリスの様子を覗っていた。
「六号、ちょうどいいところに来たな。ちょっとそいつを押さえつけといてくれ」
「隊長はそんな事しませんよね！　隊長は優しい人ですもんね！　ね⁉」
二人の間に挟まれながら、
「どうしたんだアリス、お前はそんな事しても悪行ポイントなんて入らないだろ？　そういう事は俺にやらせろよ」

「隊長酷い！　もう誰も信じられない！　やっぱりお爺ちゃんが言ってた通り、人類とは愚かで滅ぼすべき存在なんだ！」

　訳のわからない事を叫びながらバシバシと背中を叩いてくるロゼはそのままに、俺がアリスに視線を向けると、

「いやな、コイツは食べた物の遺伝子情報を取り込んで、それに影響されるだろ？　それで、一体どういう仕組みになってるのかと思って色々調べてたんだよ」

　ロゼは人造キメラって事らしいが、スノウやグリムいわく、本人がそう言い張っているだけで、未だその正体は謎に包まれているらしい。

　ロゼはとある遺跡のアーティファクトの中で眠っていたところを発見され

たそうなのだが……。
「なあ、コイツが発見された遺跡ってなんなんだ？　この世界には過去に超文明でもあったのか？」
「その可能性も否定できんな。それを調べるためにもコイツに色々食わせて試したいんだ。そこでこのバッタだ。バッタの遺伝子を取り込ませれば、多分最強の力が備わるはずだ」
　なるほど、なんとなく状況は理解した。
「そこでバッタを食べさせようとする意味が分かりませんよ！　もっと強い生き物のお肉があるじゃないですか！」
　涙目で反論するロゼの言葉に、これが文化の違いかとショックを受ける。
「バッタの遺伝子をバカにするなよロゼ。俺がいた組織では、バッタ型の怪人を作る事はタブーとされていたほどだ

[illegible]」
「そういう事だ。ほら、我慢（がまん）してとっとと食え。完食したらいいもん食わせてやるから」
「分かりません！　二人が言ってる意味が分かりませんよ！」
　俺達からジリジリと後ずさったロゼは、恐（おそ）る恐るアリスに尋（たず）ねる。
「で、でも、いい物ってなんですか？　美味（おい）しい物ですか？　それによってはちょっと考えなくもないですけど……」
　アリスは何かの包みを取り出した。
「シリコンって言ってな、これを食うと多分胸が成長するぞ」
「素晴（すば）らしいな。おいアリス、もっともっと取り寄せよう。そんでロゼにバンバン食わせて巨乳（きょにゅう）にしようぜ」
「いりませんよそんな物！　別に今のままで困ってませんし！」
　と、そういえば。

「前から聞きたかったんだけど、お前はどうしてここの連中にこんな扱(あつか)いでこき使われてんの？　その強さなら、もっと金になる仕事だって探せるだろうに」

「……自分の正体を知るためです。あたしが寝(ね)かされてた遺跡を、この国の学者さんが調べてるみたいなんですが、この国のために働いたら、研究結果を教えてくれるって約束でして……」

　そう言って、ロゼが俺達に語ったのは、遠い記憶(きおく)の昔話。

　本人いわく、自分を生み出した開発者である老人は、禁断の秘術に手を染めて命を落としてしまったそうだ。

　老人は、その秘術を行う直前に、ロゼに様々な遺言(ゆいごん)を残した。

　コイツはそれを叶(かな)えるために、ある物を探しているらしい。

　老人が禁断の秘術に手を染めてまで欲(ほっ)したのはとある石。

煎じて飲めばあらゆる病を治し、不老不死を得られる薬になり、それを使って武器を作れば何物よりも固く、決して折れない代物となる。
魔法の触媒に用いれば天変地異すらも引き起こし、祭事で捧げれば神が降りる。
ロゼの開発者が追い求めたのは、そんなとてつもない代物だったらしい。
……なんかロゼに関する話を聞くに、どう考えてもコイツ自身がアーティファクト的存在なんじゃないかと思えてきたんだが、この国の連中はよく普通にこき使ってるなあ。
というか、コイツはそれをネタに薄給で危険な事をさせられてんのか。
ほんとこの国ロクでもないな。
『おいアリス、無事に地球とここが繋がったら、その遺跡にキサラギの研究者

を送り込もうぜ。そんで、ロゼはウチで働かせよう』
『自分もそう考えてたんだ。コイツはすでに見た目は怪人っぽいしな。後は心構えさえどうにかできれば、きっと優秀な戦闘員になる』
「な、なんですか？　二人とも、急に変な言葉を喋りだしてどうしたんですか？」
　急な日本語に戸惑うロゼの両肩を、俺とアリスが左右からガッと掴む。
「ロゼ、これからは俺達が、無知なお前に色んな教育をしてやる。今日から正式に仲間にしてやろう」
「そうだな、お前はまだ子供だし、しっかりとした思想教育が必要だ。これからは自分を母親代わりだと思って慕っていいぞ」
「アリスさんの方があたしより年下じゃないですか！　変な事教えこまれそうだし遠慮します……。……あっ、なんですかこのバッジ!?　勝手にくっつけないでくださいよ！」

キサラギの関係者である事を示すバッジがアリスの手でロゼの胸元に付けられた。

「おめでとう。これでお前も戦闘員見習いだ」

「良かったな。これからは六号の部下なだけでなく、後輩でもある。言う事聞けよ」

「い、嫌ですよ、二人とも、なにか企んでそうな顔してますし……。えっ、なんで急に拍手するんですか？　やめてください、今のままでいいですよ！　あっ、隊長なんですかこの手は！　食べませんよ!?　バッタもシリコンも食べませんから！」

【中間報告】

転送先が高度数万メートルだった事以外は無事現地に到着。
アリスいわく、地球とは異なる生態系が多々見られるが、大気成分は二酸化炭素が少ない事以外、あまり変わらないとの事。
広大な未開拓地、及び文明圏を発見。
資源調査はまだですが、少なくとも現地で手に入れた食料は食しても問題ない模様。
少なくとも、未開拓地をどうにかできれば人口増加による食糧問題は解決できそうです。
なお、現地にて戦闘員として登用される事に成功。
当方の優秀な素質を見抜かれ、小隊長に抜擢される。

現在、現地には魔王軍なる同業者が存在し、自分の登用先と戦闘を行っている模様。

同業者である魔王軍と交戦、怪人級の相手を確認。

現在の貧弱な装備では勝てるはずもなく、紙一重で敗北。

つきましては、セコイ事言ってないで、最新の装備一式の支給を願います。

報告者　リリス様に殺されかけた戦闘員六号

三章

正しい塔の攻略法

1

ロゼという新しいオモチャ……ではなく、下っ端を無理やり加入させた俺達は、それから何度か出撃命令を受けては小競り合いをし、近年稀に見る勝利を収め、さらには着々と戦果を挙げた。

そんな毎日を送り続け、そして、今日はお休みとなったのだが……。

「おかしい」

宿舎内にある、俺達にあてがわれた部屋の中。

その呟きを聞いたアリスが、分解掃除中のショットガンを磨く手を止め顔を上げた。

「どうした？　なにか、魔王軍の動きで気になる事でもあったのか？」

「いや、魔王軍とかそんな小さな話じゃない」

アリスがショットガンの部品をテーブルに置き、真剣に俺の話を聞く体勢に入る。

「……俺達はここに来て、もう何度か出撃し、度重なる活躍を収めた。そしてもうそこそこの時が経ってのに、誰も俺の事を好きになる気配がないんだ」

「……は？」

そんなアリスは、アンドロイドのくせにぽかんと口を開けるという味のあ

る表情を見せてくる。
「は？　じゃない。いいかアリス、俺の隊は女ばかりだ。さらにはティリスや騎士団の女騎士、果ては敵ではあるが炎のハイネや、彼氏持ちとはいえ警官のお姉さんとの出会いまであったわけだ」
「その警官から警告がきてたぞ。お前が与えた車いすをグリムが気に入ったせいで、毎日街中を疾走してるって。次に見つけたら捕まえるってよ」
　俺はアリスの言葉を聞き流し、拳を振り上げ力説する。
「だが！　これだけの出会いがあるってのに、未だ何一つ色気のあるイベントが起こらないんだ。そろそろスノウなんかが、男湯と間違えて俺の入浴中に入ってきたりとか。寝ぼけたグリムが部屋を間違えて、朝起きたら俺のベッドに潜り込んでたとか。腹を空かしたロゼが、ウインナーと間違えてうっかり俺のを……とか。なんか、そろそろそういうイベントの一つや二つ、起こら

なきゃおかしいはずだ」
「最後の例は最低だが、今日のお前がいつになくおかしいという事だけは理解できた」
　珍(めずら)しい生き物でも見付けたように、興味深そうにこちらを見上げるアリスに向けて、俺はさらに言葉を続ける。
「俺は負け続きだったこの国に、初の勝利をもたらして、更(さら)には小競り合いではあるものの、結構な戦果も挙げている！　本来であればそれだけでも惚(ほ)れられ要素は高いはずだ。だが俺は、廊下(ろうか)の角でぶつかり倒(たお)れた拍子(ひょうし)の乳揉(も)みイベント等を期待し、廊下の角で膝抱(ひざかか)えて座り込んだりと日々の努力も怠(おこた)っていない！」
「あれ、邪魔(じゃま)だから止(や)めてくれって色んなとこから苦情がきてるぞ」
　いちいちツッコんでくるアリスの頭をぐりぐりと押さえつけ、

「俺も美少女に告白されても偶然突風が吹いて聞こえなかったりだとか、相手の好意にちっとも気づかず、この鈍感男とか罵られたい！　そんでそんで、何人かの美少女に、一体誰を選ぶの!?　とかって修羅場に……おい、俺の手引っ張ってどこ連れてく気だ？」

「うんうん。分かったから、ちょっと医務室までついてこい。自分が精密検査をしてやるからな」

俺はアリスの手を振り払った。

「俺は正気だっつーの！　だっておかしいだろ、この国の騎士って女の比率の方が高いんだぞ！　なんでここまで女が多いのに、ラッキースケベの一つもねーんだ！」

俺の魂からの叫びを受けて、アリスが深々とため息を吐いた。

こいつはたまに思うんだが、やたら人間臭い時がある。

アリス達の[illegible]。

アリスは俺の右手を取ると、自分の胸の上にその手を置いた
その行動の意味が分からず、無言で見つめ合っていると。
「あんあん」
無表情のまま棒読みの喘ぎ声を出すアリスの手を、俺は再び振り払った。
「美少女の胸が触れて良かったな。今日はこれで我慢しとけ」
「ロボットの胸にくっついたシリコン揉んで何が楽しいんだ！　あとせめて、もうちょい感情込めて言えよ！　ていうか違うんだよ、そういう事じゃなくて！　いや、もちろんエロい事もしたいんだけども！」
「もういいからちょっと落ち着け。自分と一緒に医務室に行こう？　な？」
興奮した俺がアリスになだめられていると、コンコンとドアがノックされる。

「ドアの外まで聞こえる大声で、一体何を叫んでいる。今から会議を行うそうだ。貴様にも呼び出しがかかっている。……エロだなんだと、貴様の隊に所属する私まで恥(はじ)をかくからやめてくれ！」

顔を赤くしたスノウが、部屋のドアを開けながら俺に呼び出しを伝えてきた。

「──勇者殿(どの)一行が、ダスターの塔(とう)の最上階を守る魔物、力のギルと知のリスタに敗北し、傷を負わされた。現在、治療(ちりょう)術士総出により緊急(きんきゅう)治療を行っている」

そこは城の会議室。

各部隊の隊長が集まったところで、将軍と呼ばれているおっさんが切り出

した。
　勇者敗れるの報を聞き、会議室が大きくざわめく。
「静かに！　幸いな事に、勇者殿の傷は命にかかわるほどではない。治療は難しくはないそうだ」
　その言葉に、ほっとした表情を見せる隊長達。
「しかし、皆知っての通り、現在我が国は魔王の軍勢に押されている。勇者殿が討ち取られなかった事は幸いだが、今回の敗戦である問題が浮上した」
　会議室内が、おっさんの次の言葉を待つように静まり返る。
「それは、我々には時間がないという事だ。総戦力においては、悔しいが魔王軍に軍配が上がる。戦争が長引けば、我が国はいずれ滅ぼされるだろう。我々に残された希望は、勇者殿が、我が国が滅ぼされる前に魔王を打ち倒してくれる事。つまり、勇者殿には酷なようだが、急いでもらわねば困る状況なのだ。しかし、ここに来て今回の負傷である。

況なのだ。そこにきて今回の負傷である」
　皆の顔に、暗い陰が広がっていく。
「……現在治療を受けている勇者殿に、なぜダスターの塔を攻めたのかを尋ねてみた。すると、魔王の城を攻略するために必要な秘宝があの塔に保管されているのだそうだ。つまり、勇者殿は治療が終わり次第、また塔の攻略に行かなければならない。だが、我々には時間がない……」
　皆が静かに聞き入る中、おっさんがバンとテーブルを叩いた。
「そこで、勇者殿の療養中に我々でダスターの塔を物量で攻める！　必要とされる秘宝を、我が国の総力をもって奪い取るのだ！　一刻も早く魔王を打ち倒してもらえるように！」
　会議室内に歓声が沸いた。
　各部隊の隊長達が、皆一様にいきり立っている。

……でもこれって、俺の知ってる勇者となんか違うなあ……。
王様に必要最低限の小銭を渡され、これで魔王倒して来いとか無理難題を言われるのが勇者だと思ってたのに、国を挙げてのバックアップか。
いや、そういえば勇者ってこの国の王子様なんだっけ。
そりゃ物語の中でもないのなら、国家総動員ぐらいして当たり前なのか。
まあ俺達の出番なんてそうそうないだろうと、会議室のテーブルに突っ伏しだらけていると。
「お待ちを。将軍、して、勇者殿ですら攻略不可能だったダスターの塔をどう落とすのか、何か策はあるのですか?」
そう言って立ち上がったのは、片目に傷のある、頭の薄いおっさんだった。
確か作戦参謀をやっているおっさんで、以前こいつらが戦争に負けた際、俺は自分達の手柄を誇張するため、涙目になるまで罵ってやった相手だ。

モンスターの塔は、塔内が吹き抜けとなっており、内部の壁に沿って螺旋階段が巡っている。なので、狭い階段で塔を守る魔物達と戦う事になる。傷を受けた兵を次々と交代させ、数に物をいわせて少しずつ塔を攻略していくしかない。朝から攻略を始めても、果たして一日で終わるのかどうかといったところだ。……参謀殿は何か、良い作戦はあるかね？」

逆に聞かれたおっさんが途端に慌てる。

特に何も考えてはいなかったらしい。

「い、いえ、私は特には……」

おっさん、がんばれ。

……と、そこでおっさんが、何故か俺を横目で見た。

どうしたおっさん、俺は助け舟なんか出せないし、出せたとしても出さないぞ。

「ここ最近次々と戦果を挙げ、しかも他国の人間の六号殿なら、我々が考えもつかない作戦を思いつくのでは？　なにせ、以前戦に負けた我々をあれだけ罵ってくれたぐらいですから……」

おっさんは、どうやらよほどあの時の事を根に持っていたらしい。

おっさんの言葉に、会議室内の視線が俺に向けられた。

……今度その薄い頭を更に薄くしてやるからな。

将軍が、俺に真っ直ぐ視線を合わせ。

「六号殿、貴殿は何か策はあるかね？」

……あるにはあるけど、この人達引かないかな。

この世界の連中は騎士道精神が旺盛だから、悪の組織の俺とは考えが合わないんだよなあ……。

「火をつけよーぜ」
　テーブルにうつ伏せたままのだらしない姿の俺の言葉に、その場の全員が首を傾げた。
「火攻めという事ですか？　しかし、塔は石造り。炎は効果がないと思いますよ……？」
　俺の近くにいたお姉さん隊長が聞いてくる。
「いや、塔の内部が吹き抜けになってるって言ってたからさ。塔の一階を制圧したら入り口を開けっぱなしにして、吹き抜けの真ん中でキャンプファイヤーやろうぜ。敵のボスから塔の魔物から、みんなまとめて煙でいぶして燻製にしてやればいい。楽しいぞ！」
　…………………。
「み、皆、ど、どうだ？　いや、確かに間違いなく効果的ではある。効果的ではあるが……」

……」

戸惑う将軍の言葉に。

「いや、いくらなんでも非道過ぎませんか!?　その、いくら魔物相手とはいえ……」

「だが被害は限りなく少なくなるが……」

「ねえ、これって騎士としてやっちゃっていい作戦なのかしら？」

再び会議室内がざわめく中、各隊長達が思い思いに喋りだした。

……………十分後。

「な、無しで！　六号殿、せっかく案を出して頂いたが、その作戦は無しで、正攻法で！」

各隊長達が、首を揃えてうんうんと頷いた。

その塔は広い荒野の奥地に、ぽつんと建っていた。

ちょっとした高層ビルぐらいはありそうな白亜の塔。

そこでは、既に大量の騎士が塔内部に投入され、戦える足場の多い一階はすでに制圧していた。

その塔にアリスが近づき、外壁を興味深げにぺたぺたしている。

「というわけで、俺達はこのまま夕方までのんびりします」

「「……は?」」

スノウとロゼが、俺の言った事の意味が分からないのか目をぱちくりさせている。

ちなみに俺のそばでは、グリムが相も変わらず、車いすの上で気持ちよさそうに眠っていた。

「何を言っている、既に塔の攻略は始まっているんだぞ!? しかも、あの塔には勇者ですら敗北したとびきりの魔物がいるんだ！　これを討ち取れれば、我らの手柄はどれ程(ほど)の物になるのか!!」
　拳(こぶし)を握(にぎ)って興奮し、暑苦しく力説するスノウ。
「お前なぁ……。確か勇者って強いんだろ？　それこそ魔王軍の四天王が一対一じゃ敵(かな)わないぐらいに。その勇者に勝ったヤツを真正面から倒しに行くのか？　嫌(いや)だよ怖(こわ)い、そんなリスクは負いたくないし、俺はここで昼寝(ひるね)してるよ。これだけの大軍で来てるんだ、その内どこかの部隊が終わらすだろう。夕方になってグリムが起きて、まだ塔が落ちてなかったら、その時また考えようぜ」
　その言葉にスノウのこめかみに血管が浮(う)き立ち、顔がみるみる赤くなっていく。
　こいつ、なんでこんなに切れやすいんだろう。

こいつ、なんでこんなに切れやすいんだろう？
「き、貴様というヤツは！　ここ最近、戦闘（せんとう）においてだけはそこそこ頼（たよ）りになると思っていたが、私の思い違いかこのヘタレめ！　もういい、私一人で行ってやる！　手柄を挙げても分けてやらんからな！」
スノウはそう言い捨てると、荒（あら）い足取りで塔へと向かっていってしまった。
「あの、隊長……。いいんですか？　スノウさん一人で行かせちゃって……」
スノウの後ろ姿を心配そうに見つめるロゼは、追いかけようか迷っているようだ。
「大丈夫（だいじょうぶ）だよ、あいつは強いし。それに今の塔内部は味方の兵がわらわらいるし、まずやられる事はないだろ。多分その内疲（つか）れて帰ってくるよ」
――数時間後。

「……ハア……ハア……」
　本当に疲れて帰って来た。
「ハア……ハア……、も、もうすぐ夕方だぞ六号……、ま、まだグリムは起きないのか？」
「そろそろ起きそうなんだけど、なんか面白いうなされ方してるから、さっきから皆で見てる」
　車いすの上でよだれを垂らしたグリムがぶつぶつと呟いた。
「あああ……スノウが……、スノウが真っ赤な顔で隊長に……私の胸を揉むでも何でも好きにするがいいと……はしたないおねだりを……」
「起きろグリム！　貴様、ロクでもない夢を見てるんじゃない！　おい、起きろ！　それ以上妙な夢見てるとぶった斬るぞ！」
　スノウにゆさゆさと揺らされ、グリムがぼんやりと目を開ける。

「ハッ！　……私、今、素敵（すてき）な予知夢を……」
「もういい、お前はもう少し寝てろ。今から斬り捨てて埋（う）めておいてやる」
「せっかく起きたのにまた寝かせるな。それよりアリス、どうだ？　行けそうか？」
　俺は据（す）わった目のスノウをなだめ、塔の外壁を調べていたアリスに尋ねた。
「うん、塔を構成してるのはしっかりした造りの石材だった。ちょっと穴開けたぐらいじゃ崩（くず）れたりはしないだろう。後は、上に行くほど風が強くなるから注意する事。それと、薄暗いから手元にも気を付けろよ。後、重い鎧（よろい）は脱（ぬ）いでいけ。全員、動きやすい格好でな」
　そんなアリスの言葉に、スノウが怪訝（けげん）な表情を浮かべた。
「何の話だ？　また一体どんな事を企（たくら）んでいる？」
「企んでるとか失礼な。あの塔（とう）を攻略するんだろ？　そろそろ、いい頃合（ころあ）い

だと思って」

　スノウが、更に怪訝そうに。

「貴様、先程は怖いから嫌だと腑抜けていたではないか。一体どういう風の吹き回しだ？」

「俺は真正面から倒しに行くのは怖いから嫌だって言ったんだ。でも、お前じゃないが手柄は欲しい。それもできるだけ楽して、危険が無い状態で手柄が欲しい。ずっと塔攻略の様子を見てたが、すでに何組かは最上階のボスに戦闘を仕掛けることができたみたいだな。どうだ、ボスに手傷ぐらいは負わせられたのか？　少しは弱った感じか？」

　俺の問いに、スノウが呆れた顔で言ってくる。

「……貴様は、もう清々しいくらいに姑息だな。……何人かは最上階にたど

り着けたものの、準備を整えて待ち構えたボスに瞬殺されるという状態が続いている。敵は二人組で連係攻撃(こうげき)が強力だそうだ。現在、何か弱点はないかと攻めあぐねているところだ」

と、その時だった。

アリスが張り付いている塔の外壁から、バチュンという、何かを打ち込む音がした。

そちらを見れば、塔の壁に小さな鉄杭(てつくい)を打ち込んだアリスの姿が。

「うん、いけるいける。簡単に打ち込めるな。六号、持ってけ」

アリスの手には、コンパクトサイズの杭打ち器。

本来なら岩盤(がんばん)に杭を打ち込む道具なのだが。

「……なんだ、その道具は？　……いや、おいまさか」

スノウがそれを見て、ダラダラと冷や汗(あせ)をかきだした。

「おし、行くか。こんなのを内側から攻略とかやってられるか、かったるい。魔物達も下から登ってくる兵士の相手で忙しいし、暗くなった今なら外壁よじ登っても見つからないだろ。まさか、こんな所登ってくるなんて思わないだろうしな」

3

「おいそっち回れ！　あの、魔法使う魔物を先に仕留めろ！　被害がデカくなるぞ！」
「押し切れ！　数で押し切れ！」
喧騒轟く塔の外壁を、杭打ちを手にした俺を先頭に少しずつ登って行く。
壁に杭を打ち込む音は、塔内の騒がしい戦闘でうまい具合に掻き消され

ている。

「こんな……こんな塔の攻略が、許されるものなのか？　こ、こんな……」

俺のすぐ下では、先ほどからスノウがぶつぶつ言いながらついて来ていた。

スノウは今は鎧を脱ぎ、剣は背中に背負っている。

他のメンツも重い装備は外し、身軽な格好でよじ登っていた。

「おいスノウ、この戦闘じゃ聞こえないだろうけど、念のため極力喋るなよ。こんなところで敵に気づかれたら一網打尽だぞ。文句なら、作戦を立案したアリスに言え」

戦闘服を脱いでいる今、こんな高所から落ちたらひとたまりもない。

かなり上の方にまで登ってきたため強い風に吹き煽られる中、鉄杭を片手でしっかり摑み、新たな杭を壁に打ち込み足場を作る。

そんな作業をどれだけ続けてきただろう。

そろそろ塔の最上階が見えてきた辺りでスノウが小さく囁いた。

（……おい。おい、六号！）

それに俺も囁き返す。

（なんだ、そんな切羽詰まった声出して。お前まさか、こんなところでトイレ行きたいとか言い出すんじゃないだろうな）

（違うわ！　そ、そんな事ではなくてだな……）

じゃあなんなんだと訝しむと。

（……昼間、剣を振るいまくったせいで体力が限界に近い。どうしよう、腕がぷるぷるしてきた）

（このバカ、こんなところで落ちたら死ぬぞ！　っていうかお前が落ちたら、順番的に下のヤツらも巻き込まれるだろうが！）

（わ、分かっている！　だからどうしようと言っているのだ！　いや、これほんとヤバイ、ど、ど、どうしよう……）

　勝ち気なスノウが今にも泣きそうな顔で見上げてくる。

　これはこれで新鮮なのでもうちょっと追い詰めてみたい気もするが、この強情な女が弱音を吐くという事は、本当に限界が近いのだろう。

（ああもう、しょうがない、手を貸せ！）

　俺は杭打ちを一旦口に咥えると、片手で鉄杭を掴み、もう片方の手でスノウの手を取った。

（お、おい、どうする気だ!?　ひいっ!?　空中に片手で宙吊りされるとか、肝が冷えるっ！）

　騒いでいるスノウを、そのまま俺の肩の位置まで引っ張り上げる。

　正直、戦闘服を着ていない今ではこんな行為も結構キツイ。

正面、戦闘服を着ていない今ではそんな行為も結構キツイ
俺は改造人間ではあるものの、肉体スペックは人間の限界ギリギリに引き上げられている程度だ。
剣を背負ったスノウを片手でいつまでも掴んでいられない。
口に杭打ちを咥えたまま、背中におぶされと視線を送る。
（くっ、す、すまない）
自力で壁を這い上がっていくのは無理でも、両手両足で背中にしがみつくぐらいはできるだろう。
スノウが俺の首に手を回し、しっかり掴まったのを確認すると、再び最上階を目指して登りはじめた。
……というか、これは……。
（おい、もっとしっかり掴まれ！　風の抵抗を受けないように身体をもっとくっつけろ！）

（わ、分かった、こうか？）

背中に、柔(やわ)らかい物が押し付けられる。

念願のエロイベントです、本当にありがとうございました。

（お前、今日初めていい仕事したな。お荷物ならせめて、もっと胸を張って密着させろ）

（き、貴様はこんな時に！　やはりお前は人間のクズだ）

（う、うるせー！　巨乳(きょにゅう)はお前の唯一(ゆいいつ)の長所だろうが、それを生かしてやってるんだから感謝しろ！）

（お前、作戦が終わったらちょっと宿舎の裏に来い!!）

そんな事を小声で言い合っている間に、ようやく最上階に手が届く位置までやってきた。

下の連中を確認すると、なんの問題もなくついて来ている。
体力のあるロゼは元より、普段車いす生活のグリムも夜とあって元気そうだ。
アリスにいたっては疲れと無縁なアンドロイドの余裕からか、たまに塔の窓から中の様子をこっそり覗いたりしていた。
俺は小声で皆に告げる。
（よし、俺が先に登って様子を見るから、お前らは俺が声を上げたら登ってこい）
その言葉に、おぶさっているスノウ以外がコクリと頷く。
最後の杭打ち作業を終え、俺は頭だけを覗かせてこっそり様子を覗った。
すっかり薄暗くなった最上階にいたのは二匹の魔物。
巨大な斧を持った牛頭の魔物が大きな体で階段の前に立ち塞がり、それ

から大分離れた位置に、杖を握った山羊頭の魔物が立っていた。
侵入者は狭く足場の悪い階段で一人ずつ戦う事を余儀なくされ、敵は広くてしっかりした場所で援護を受けながら戦うのだろう。
なるほど、敵ながらよく考えている。
（よし、こちらに気付いていない今がチャンスだ。このまま登り、全員を引き上げ挑むとするか）
と、背中のスノウが、そんな事を囁いてくるが……。
俺が様子を覗う先では、二匹の魔物は無防備に背を向けて、何やら楽し気に話をしていた。
「フハハハ、これで何組目だ兄弟？　俺はまだ、かすり傷一つ負わされてはおらんぞ！」
「ヒッヒッ、もう数えるのもめんどくさくて覚えてないよ兄弟。ま、勇者ですら敗北した俺達に、ただの騎士や兵士が束になっても敵うまい」

俺はスノウを背負ったまま、こっそりと最上階によじ登る。
　二匹の魔物は今なおこちらに気付く事なく、機嫌良さそうに会話を続けていた。
「それよ。勇者を打ち負かした俺達は、ひょっとしたら四天王クラスの幹部に抜擢されちまうんじゃねえか？　そろそろ、魔王様からそんな話が持ちかけられてもおかしくねえぞ？」
「ああ、四天王ですら討ち取れなかった勇者に、命までは取れなかったものの、あれだけの傷を与える事に成功したのだ。俺達はもはや四天王を超えたと言ってもいいんじゃないか？」
（よし、後は皆を呼ぶ……おい、六号？）
　スノウの囁きを無視した俺は、ほふく前進で山羊頭の魔物へにじり寄る。
「フハハハハ、夢が広がるな兄弟！　そうとも、俺達は二人揃えば無敵だ

ぜ！」
「ヒッヒッヒッ、そうとも、俺達二人の連係の前には勇者だろうが四天王だろうが、それこそ魔王様ですら手こずるかもしれないぜ？」
　相変わらずこちらに気付く事なく、上機嫌の山羊頭。
　そいつは階段から離れた場所で、吹き抜けになっている中央部分から楽しそうに戦況を見ている。
　俺は、その山羊頭の背後にさらに前進を続けると……。
（お、おい、六号、もう充分だろう。早く皆を呼んで、こいつらを……）
「フハハハハ！　兄弟、今攻めて来ている連中を撃退したら、俺達の名はますます上がるぜ⁉」
（ろ……六号？）
　牛頭の魔物が、気持ち良さそうな笑い声を上げる中。

俺はスノウを背負ったまま、山羊頭の後ろで立ち上がると……。
「ヒッヒッヒッヒ！　そうともさ！　いずれ世界に轟くぜ！　俺達、力のギルと、知の……」
──未だ夢中に喋り続ける知のなんとかを、塔の上から突き落とした。
「おおおおおおおい！　六号おま、お前、なんて事してるんだああああ！」
「もういいぞ！　さあ、お前らの出番だ！　登ってこい！」
俺が下の連中に呼びかけると、背中から降りたスノウが剣を抜き何か言いたそうな顔で身構えた。
「おい六号、人としてあれはどうなんだ!?　流石に私も同情したぞ！　ボ

スが戦闘前に塔から突き落とされるなど聞いた事がない！」
「なっ⁉　て、てめえら一体どこから湧いた⁉　しゃらくせえ、おいリスタ、あれをやるぞ！　俺達二人の必殺……」
　俺とスノウの後ろから隊員達が這い上がってくる中、ギルがキョロキョロと辺りを見回した。
「……リスタ？　おいリスタ、どこにいる？」
　当然の事ながら、その視線は俺とスノウに向けられる。
　そんな俺達の視線は、自然とリスタの落ちていった方へと向けられた。
　ギルが階段前の守護も放り出し、慌ててリスタが落ちた方へ駆け寄ると……、
「リ、リスタ！　リスター！」
「た、助けてくれギルー！」
　聞こえてきたその声に、そっと塔の下を覗いてみると、リスタと呼ばれた

山羊頭が螺旋階段の一部に必死な顔でしがみ付いていた。
「ちっ、しくじったか！　おいアリス、あの引っかかってるのを狙い撃てるか？」
「撃ち落とすのは余裕だが、わざわざ貴重な銃弾使わなくても、石でも投げてやればそのうち勝手に落ちるんじゃないか？」
「それもそうだな。よし、こいつで……」
　と、俺が手頃な石を拾い上げると。
「や、やめろ、やめやがれ！　リスタに手は出させねえ！」
　ギルはそう宣言すると、引っかかっているリスタを背に庇うように立ち塞がる。
「アイツに手は出させねえ！　一体どっから湧き出して、何でこんな状況になってんのか分からねえが、兄弟は俺が必ず守る！」

「うう……、や、やりにくい……」

　俺の後ろで、ロゼが呟く。

　しかし、この状況は好都合だ。

「お前ら、あいつを囲むように移動するぞ！　そして、もし俺達の誰かに接近し攻撃を仕掛けてきたら、残りの者は下に引っかかっているヤツに石を投げろ！」

「さすが六号、キサラギ社員の鑑のような素晴らしい作戦だ。それを相手に聞こえるように指示する事で、うかつにこちらを攻撃させないというわけだな」

　そういう事だ。

「おい、ギルとか言ったな！　へっへっへっ、そこを動くなら動いてもいいが、そしたらお前の大事な相棒がどうなるかな？　……よしお前ら、俺とスノウは石持って待機！　残りの各員は、敵の手の届かない位置から遠距離攻撃を食らわしてやれ！」

「「う、うわぁ……」」

俺とアリス以外の仲間達がその言葉にドン引きする中、力のギルは悲壮感を漂わせ、斧を構えて泣き叫んだ。

「クソったれえええええ！」

「――ギル！　ギル、無事か！」

叫びながら階段を登ってきたのは知のリスタ。

「まあ、無事ではないよ。生きてはいるが」

予想以上に粘（ねば）られ、ギルが倒（たお）れ伏（ふ）した時には、引っかかっていたリスタの姿はそこになかった。

　そのリスタは今、塔の魔物（まもの）を引き連れてギルを助けに現れたのだが……。

「き、貴様ら……！　俺を不意打ちで突き落としただけではなく、手を出せないギルをなぶりものに……！　ゆ、許せぬ！　貴様らは皆殺（みなごろ）しにしてやる！」

　激昂（げっこう）し目を血走らせているリスタに向けて、俺は手のひらを突き出した。

「おっと、お前は俺の言った事が聞こえなかったのか？　無事ではないよ、生きてはいるが。そう、生きてると言ったんだぜ？」

　互（たが）いの仲間が牽制（けんせい）し合い警戒（けいかい）を強める中、俺はリスタに笑いかけた。

　警戒心を解こうとした俺の笑顔（えがお）になぜかリスタが後ずさる。

「……ここ、お前の大事な相棒が瀕死（ひんし）の状態で転がっている。急いで手当

「……ここに、お前の大事な相棒が瀕死の状態で転がっている。急いで手当てをすれば助かるかもな。……さて、ここで質問だ」

俺の更なる深い笑みに、リスタの喉がゴクリと鳴る。

「お前、自分の相棒を、幾らで買う？」

そんな俺の問いかけに、聞き慣れた声が頭に響いた。

《悪行ポイントが加算されます》

4

部屋のドアが叩かれる。

「おい六号。いるか？」

ドアの外で俺を呼ぶのはスノウの声。

……どうせたいした用事でもないだろう。

「清く優(やさ)しい六号さんなら、川のゴミ拾いに出掛けてるよ」

「ふざけるな、いるじゃないか！」

俺の言葉にスノウが怒鳴(どな)りながら入ってくる。

時刻はすでに二十二時を回っており、人を訪ねるにはちょっと遅(おそ)い時間帯だ。

「なんだお前こんな時間に。夜遅くに男の部屋に来るって、お前誘(さそ)ってんのかよおっぱい女」

「そのバカな呼び方は止めろ！　他人に聞かれて定着したらどうするつもりだ！」
「おいおっぱい女。自分は若い二人に気を利かせ、席外しといた方がいいか？」
「こっ、この！　アリス、お前までその呼び方をするのか!!」
ハアハアと荒い息を吐きながら、スノウは大きな皮袋を差し出してきた。
「……何だコレ？」
それを受け取った俺は何気なく中を開け……、そしてそのまま固まった。
「それは貴様の給金だ。ここ最近で挙げた、戦果の報奨も含まれている。……まったく、未だに納得がいかん。あんな塔の攻略方法も納得いかんし、ボスを突き落とすなんて戦法も納得いかん」
固まったままの俺に不審を覚えたのか、アリスも袋を覗き込み。
「

「……ワオ」

「一番納得いかんのは、魔物と取引なんてしたことだ！　確かに被害(ひがい)を出さず塔の秘宝を手に入れられたが、あのような人質(ひとじち)を取るやり方は騎士(きし)としてさすがにどうかと……。おい、何を固まっている？」

　スノウの怪訝(けげん)そうな声にハッと我に返った俺は、改めて袋の中身を確認(かくにん)した。

　金貨が、金貨がパンパンです……。

「なあスノウ。この金貨の量だと、この国でどれだけの価値があるんだ？」

「価値？　ああ、そういえば貴様は頭をおかしくして色々な事を覚えていないのだったな、貨幣(かへい)価値すら忘れたのか。その量だと、一つの家庭が一年ほど贅沢(ぜいたく)な暮らしができる程度だ」

「……マジかよ」

俺が呆然と袋を握り締めていると、どうやらスノウは違う受け取り方をしたらしい。

「む……。その額では不満か。分かるぞ、私も金に関してはうるさい方だからな。だが、あれだけ手柄を立てたとは言っても、貴様はまだ小隊長。もっと上の階級にでもなれば、そんな額がはした金に見える、ちゃんと手柄に見合った報酬が……」

スノウが言い終わるより早く、俺はアリスにキッパリ告げた。

『アリス、俺もうスパイやめるわ。この国に骨を埋める事にする』

『おい待て早まるな。お前、日本語で言ってくるって事は本気だろ』

真顔で突っ込んでくるアリスに向けて、

『いいか、よく聞けよ？　俺はサハラ砂漠で一ヵ月以上戦闘してようやく帰

ったと思ったら、労いの言葉もなく上司にポテチ買いに行かされた事があるんだぞ。そして給料が、保険とか色々引かれて手取りで十八万だった』
『むしろ、なんでお前が今まで辞めなかったのか不思議なくらいだな』
日本語で話し出した俺達に、スノウが怪訝な顔をした。
「どうした二人とも、変わった言葉を使いだして」
「気にすんな。六号は興奮して自国の言葉が出ただけだ。貰った金が予想以上に多かったんだよ」
どこか納得いかなそうな表情ながらも、スノウは小首を傾げながら、
「そ、そうなのか？　ならいいが……。これはアリス、お前の分だ」
「おおう、これはどうも。人様から何かを貰うだなんてショットガン以来だな」

確かにあの時ショットガンをプレゼントしろとは言われたが、俺のポイントを使ってアリスが勝手に取り寄せただけで、別にそこまで大げさな物でもないと思うんだが……。

相変わらず大事そうにショットガンを抱き締めながら、どこか浮かれた様子で袋を受け取るアリスを見て。

……まぁ、なんか気に入ってるみたいだし、別にいいかと思い直した。

【中間報告】

連日、自分の所属国と同業者との戦闘(せんとう)は激しさを増している模様。

現在、自分の所属部隊が多大な戦果を挙げ、そのあまりの目覚ましい活躍(かつやく)に対し、

日本円に換算(かんさん)すると数百万円相当の金貨を報奨として支給される。

日本円に換算すると数百万円相当の金貨を報奨として支給される。

現在のところ任務に問題、支障はなし。

また連絡(れんらく)いたします。

四章

悪の幹部の倒し方

1

「勇者の一行が、ダスターの塔で手に入れた秘宝を使い魔王城への道を開いたらしいな。これで敵さんも本気にならざるをえないわけだ。我々は、勇者が魔王を討ち取るまで城に立てこもり、ガッチリ防衛していればいい」

「魔王軍が俺達を滅ぼすのが先か、勇者が魔王を倒すのが先かってか」

俺とアリスが、それぞれに武器の手入れをしながらそんな事を話していると、突然部屋のドアが叩かれた。

「おい、六号、いるか？」
　それは不機嫌そうなスノウの声。
「いるけどお前の前には出たくない」
「ふざけるな、居留守を使われた方がまだマシだったわ！　……なんだ、武器の手入れをしていたのか？」
　スノウは俺が机の上で研いでいたナイフに視線を向けると。
「……な、なあ六号、そのナイフをちょっと見せてくれないか？　前々から思っていたのだが、結構な業物に見えるのだが」
「……いいけど、持って帰るなよ？」
　ナイフの柄を向け、それをスノウに手渡すと。
「これは素晴らしいな……！　なあ、この子には銘はあるのか？　無いのなら私が付けてもいいか？　というか産地はどこなんだ。……な、なんだ、放せ！　まだ見足りない！　というか、私が研いでやるから　ああっ！」

危ない目付きでナイフに頬(ほお)ずりを始めたためスノウの手から取り上げると、小さな悲鳴を上げながら非難の混じった視線を向けてくる。
「お前は何しにきたんだよ、俺のナイフを奪(うば)いに来たのか？」
「そ、そうだった、あまりにも綺麗(きれい)な子がいたからつい……！　……将軍がお呼びだ、会議室に来い。私達に、頼(たの)みたい事があるそうだ」

——スノウに連れられ会議室に来てみると、そこには将軍と参謀(さんぼう)の、おっさん二人のみだった。

将軍は、俺にかけるように椅子(いす)をすすめると。
「まずは、よく来てくれた六号殿(どの)。貴殿(きでん)の今までの功績はなかなかのものだ。その中でも特筆に値(あたい)するのが、貴殿が何度も四天王と交戦したにも拘(かか)わら

ず、未だ無事生きている事だ」
「まあそれほどでもありますが」
「こ、これっ！」
あっさりと肯定した俺に参謀のおっさんが注意するが、一体何のために呼ばれたのやら。
と、将軍がなんだか、話をいつ切り出そうか言いにくそうにしていると、俺を案内したスノウが口を開いた。
「将軍、我々に何か特別な任務を与えたいのですか？」
スノウの助け舟に、将軍が重く頷く。
「うむ、その通りだ。お前達の小隊に頼みたい事とは……。今後、四天王などの大物が現れた時、お前達には、それらの相手をしてもらいたい」
「喜んでっ!!」

「おいこら待て！　スノウ、お前いつから隊長になったんだ！」
　喜び勇んで興奮しているスノウを止めるも、
「貴様、これ程名誉な任務はそうあるものではないぞ！　敵の幹部を相手にするのは我らこそが相応しいと、そこまで実力が認められているという事なのだぞ!?　そして当たり前だが、この任務は最も戦果を挙げられる。となれば、褒美も出世も思いのままだ！」
　こ、こいつ、ここまで欲望に忠実だと逆に感心するな。
　俺がスノウをどう説得しようか言葉を選んでいると、参謀のおっさんが大げさな身振りと共に語りだした。
「スノウ殿のおっしゃる通り。六号殿は炎のハイネに地のガダルカンド。そして、力のギルに知のリスタ。これ程の面々を相手に渡り合った、我が国の英雄ですぞ。貴殿が相手をできないと言われるのなら、他に魔王軍の幹部に対抗できる者など――

捨てきる者たち……」
　言いながら、おっさんが深くため息をつく。
　芝居がかった物言いに、俺の中で何かがピンと引っかかった。
「……なあおっさん。ひょっとしてこれを将軍に進言したのって、あんただったりする？」
「おい六号、おっさん言うな！　この方は将軍に次ぐ発言力を持つ……」
　俺を非難するスノウを遮り、おっさんではなく将軍が答えた。
「そうだ。この参謀殿が六号殿を高く買っていてな。魔王軍の幹部に対抗できるのは、勇者殿を除けば六号殿以外にはいない、と……」
「ほう」
　べた褒めされているのは嬉しいが、おっさんの愛想笑いが引っかかる。
　キサラギに所属していた時に見てきた、自分の甘い利権を守ろうとする権力者達。

このおっさんからは、なぜかそんな連中と同類の雰囲気が感じられた。
俺が警戒度を上げる中、参謀のおっさんは。
「六号殿。英雄であるあなたの力をお借りしたい。人手が足りないと言うのならば、貴殿の隊の魔物混じりや邪教徒などでなく、もっと格のある正規の騎士を付けよう。なんなら、小隊ではなく中隊を率いてくれてもいい。……どうだろう、引き受けては貰えないだろうか？」
そう言って深々と、薄くなった頭を下げた。

——それから数日が経ったある日。

出撃を命じられた俺達に向け、やたらとテンションの高いスノウが、声を

精一杯に張り上げた。

「いいか貴様ら！　今回我らが請け負った任務はとてつもなく名誉なものだ！　負ける事など決して許されぬ。皆、心してかかれ!!」

「おい、なんでお前が仕切るんだ」

城から離れた丘の上に堂々と騎士団が立ち並ぶ。

俺達の部隊は、その騎士団の中心に配置されていた。

現在、魔王軍の軍勢がこの近くまで侵攻してきているらしい。

数はそれほど多くないそうだが、敵の中に魔王軍の四天王、炎のハイネがいるとの事。

ハイネに当たる事になっているのは、もちろん……。

「四天王、炎のハイネの首！　この私が貰い受けるっ!!」

そう、俺達の部隊が担当だった。
「六号、このテンション高い女を何とかしてくれ。普段から暑苦しいが、今日は特に鬱陶しいぞ」
いつになく張り切るスノウに、感情なんて無いはずのアリスが心なしかげんなりしている。
「ほっとけほっとけ、こいつには言うだけ無駄だ。お前ら、敵に遭遇しても適当に流す程度でいいからな。こんな任務で怪我をするのもバカらしい」
それを聞いたスノウはこちらをキッと睨みつけると、額に青筋立てて食って掛かる。
「貴様、何を言っている！　将軍や参謀殿から託された特別任務だぞ!!」
「俺、あの参謀のおっさん嫌いなんだよ。あいつからはなんか、自分の保身し

か考えないような、姑息な卑怯者の臭いがする」
俺の胸倉(むなぐら)を掴(つか)んでいたスノウが、呆然(ぼうぜん)とした表情を浮かべ。
「お、お前……、言いたくないが自分を客観的に見た事はあるか？」
「おい六号、鏡っていう道具を知ってるか？　ピカピカで自分の顔が映るやつだ」
「隊長、ブーメランって道具も知ってますか？」
……あのおっさんだけじゃなく、お前らも大っ嫌いだ。
フルボッコにされる俺に、スノウが腰(こし)に手をあてながら。
「とにかく！　やる気がないというなら無理にとは言わん！　せめて今回は、以前あの女と戦った時のように私の邪魔はするんじゃないぞ！」
どうやらこいつは、以前炎のハイネに逃(に)げられた時、まるで相手にされなかったのを未だ根に持っているらしい。

「む、六号、なんだその目は。ふふん、今日の私はひと味違（ちが）うぞ？　炎のハイネへの対策はちゃんとできている。見ろ、コレを！」

　そう言ってスノウが見せびらかしてきたのは一本の青い剣（けん）。

　冷気でもまとっているのか、その剣は白い煙（けむり）を漂（ただよ）わせていた。

「氷結剣アイスベルグ！　三年ローンで手に入れた、炎のハイネに対抗できそうな新しい愛剣だ！　グリム、今回こそはお前の力を役立ててもらうぞ！　おい、起きろ！」

　新しい愛剣を早速試（さっそくため）したいのか、興奮したスノウが、狭（せま）い車いすの上で器用に体育座りで眠（ねむ）っているグリムを揺（ゆ）り動かしている。

「――しかしアリス、お前はどう思う？」

「どう思うって、捨て駒（ごま）扱（あつか）いなこの任務の事か？」

俺は丘の上から、遠くに姿を現した魔王の軍勢を眺めながら、
「分かってるのか。そうだよ、あのおっさんに押し付けられた、このクソ任務の事だよ。俺、あのおっさんが負けた時、涙目になるまで罵った事ぐらいしか恨まれる覚えはないぞ」
「それは恨まれる理由として充分だとは思うが。まあ、後は単純に目障りなんだろうな。そもそもこの部隊は、いつ死んでもいい人間を厄介払いするための部署らしいからな。それが、我々は過程と手段はともかくとして、功績だけ見ればぶっちぎりだ。しかもよそで疎まれている連中がだぞ。そりゃあ面白くないだろうな」
なんてこった、今のところはまだこんなにも品行方正な俺が疎まれていたのか？
でもそういやあのおっさん、コゼレグノムの事も見下したような言い

……でもそういやあのおっさん、ロゼさんチームの事も見下したような話し方してたしなあ。

「こらっ、いい加減起きろ！　おい、グリ……あっ！」

「ああっ!!」

　向こうではスノウとロゼが騒いでるが、何やってんだ？

「ともかく、敵幹部を見たら戦ってるフリだけして撤退だ。というか、自分はショットガンにワックスかけてる途中だったから今日は武器すら持ってきていない」

「武器は持ってこい武器は。ショットガンがダメになったらまた新しいのくれてやるから。まあ、なるようになるさ。あの巨乳ねーちゃんなら多少は話も分かるしなー

ダメでした」
　俺はそう言って、
（スノウさん、グリムが変な落ち方しましたよ。ていうか、く、首が……）
（ど、どうしよう……。とりあえず車いすの上に戻せ！　な、なんか白目むいてるな……）
　車いすのそばで、何やらコソコソしながら慌てている二人の下に……。
「おいスノウ、グリムを起こしてくれ。……ていうか、二人でグリムを抱えて何やってんだ？」
「なんでもない！」
「ですっ！」
　声を掛けられたスノウとロゼが、グリムを抱えたままビクンと跳ねた。
「……？　じゃあ、俺達もそろそろ行くぞ、本隊も動き出すみたいだしな」

——眼前に威風堂々と佇む魔王軍。
様々な魔物の大群が並ぶど真ん中。
そこに、露出の多い格好をした、褐色肌の巨乳女が不敵な笑みを浮かべ立っていた。
その隣にはいつかのグリフォンと、そして……。
「……なあ、ハイネとグリフォンだけじゃなく、なんか凄いのがいるぞ。何だあれ」
「……あ、あれはゴーレムと呼ばれる、強固な岩石で作られた、魔法で動く操り人形だ」
スノウが引き気味に説明するそいつは、二メートルをゆうに超える巨体に重量感のある石の肌を持つ、トン単位の重さは間違いなくありそうな人形。
言ってみれば、魔王軍の四天王、地のガダルカンドを劣化させたみたいな

のがそこにいた。
「また魔法か。なんでも有りだな魔法とやらは。この星の物理法則がどうなってやがるのか調べたい。六号、相手方に怪我をして動けない魔法使いが落ちてたら、拾っておいてくれ」
「いや、魔法に関しては俺も気にはなってるけどさ。……なあ、俺達はハイネだけを相手にすればいいんだよな？　グリフォンとかあのゴーレムは、他の隊が受け持つんだよな？」
　俺とアリスのやり取りが聞こえたのか、俺達の周りにいた隊長格が。
「六号殿！　炎のハイネの周りを囲むハイオークの集団はお任せを！」
「では我が隊は、あの屈強なオーガの小隊を！　なに、手強い相手ですが任

せてください！」
「よし、脚の速い俺達の隊は、敵の狙撃兵を抑えに回るぞ！」
　俺達以外の小隊は足早に行動を開始した。
「俺はこの国でも、こんな危険任務担当かよ！　スノウ、グリムを起こせ！　こうなったらハイネにとびきり強力な呪いをかけてもらえ！」
「グ、グリムを起こすのは他に任せた！　私はあの女に、この氷結剣で以前の雪辱を果たさねば！」
　そう言って、人の話を聞かない脳筋はハイネに向かって駆けていく。
「あ、あの、隊長！　あたし、グリフォンの相手をしてきていいですか？　グリフォン肉の味が気になりますし、アイツのお肉をたくさん食べて、空を飛んでみたいんです！　お爺ちゃんの遺言を守らないと！」
　こっちにも脳筋がいた！
　俺はスノウに続く、コゴニを見送った後、アリスの方を振り返る。

俺はアネに続くロゼを見送った後、アースの方を振り返る

「グリムを起こすのは自分に任せろ。となると、お前の相手は……」

まるでアリスの言葉に反応するかのように、行動を開始したこちらに合わせ、ゴーレムが石のこすれるような唸り（うな）を上げた。

2

「──魔王（まおう）軍四天王、炎のハイネ！　我が名はスノウ！　あの時の借りを返してやる！　我が愛剣の一つ、氷結剣アイスベルグの錆（さび）となれ！」

「来るがいいさ、スノウとやら！　この魔王軍四天王、炎のハイネが相手になろう！」

俺達が陣取（じんど）っていた丘の中央で、ついに戦闘（せんとう）が始まった。

少し離れた場所で、ハイネとスノウがカッコよく対峙（たいじ）する中。

「効かねえ！　分かっちゃいたけど拳銃じゃ無理だ！　アリス、グリムを早く！　早く起こして!!」

見た目は鈍重そうなゴーレムが、攻撃を仕掛けた俺に向け、意外な速さで接近してきた。

「なあ六号、こいつ寝てるんじゃなくて気絶してるぞ。これは当分起きないな」

「何でコイツはいつもいつも戦う前から死んだり気絶したりしてんだよ！　グリムがまともに役に立った事ってまだ一度もないぞ！　どうすりゃいいんだ!!」

厄介者を寄せ集めた隊にグリムが送られていたのは、あながち間違っては

いなかったのかもしれない。
「仕方がないな。おい六号、時間を稼げ。ここはC４送ってもらう」
「早くしてえ！」
　アリスに叫び、俺はキサラギ製戦闘服の、筋力補助機構を目いっぱいまで引き上げた。
　助けを求めて見渡せば、遠くではハイネが放つ炎を回避しながら、ジワジワと距離を詰めているスノウが見える。
「ピギャアアアアアアア!!」
　甲高い鳴き声に目をやると、そこには空中を舞うグリフォンにしっかりと両手の爪を食い込ませ、首筋に嚙みついているロゼの姿が。
　どっちも忙しそうで、とても援護してもらえそうな状況には見えない。
　となると、後は……。

「よし、向こうに転送要請を出した。六号、しばらく耐えろ！」

重い足音を響かせて、目の前にゴーレムが立つ。

俺の背後には、白目でグッタリするグリムと武器を持たないアリスがいる。

追い詰められたこの状況だが、なんだか久しぶりに燃えてきた。

俺は数多のヒーロー達と激戦を繰り広げ、それでも生き残ってきた最古参、六号さんだ！

「かかって来いコラァ！　キサラギ製戦闘服の力、見せてやる!!」

湧き上がる感情に身を任せ、叫ぶと同時、渾身の力で殴りかかった！

「……いだあああああ！　アリス、これ絶対折れてるよ！　折れてる！　折れてるって！」

俺の拳[illegible]ゴーレムの胸にヒビが入る。

俺の拳と引き換えにゴーレムの腕にヒビが入る。
　俺のやる気は二秒で失せた。
「折れてたら、折れてるよなんて叫ぶ余裕はないもんだ。よってお前は折れてない」
「おかしい、その理屈は絶対おかしい、お前を作ったリリス様並みにお前もおかしい！」
　アリスに罵声を浴びせながら、俺はゴーレムが伸ばした腕をかいくぐって後ろに回ると、今度は背中に蹴りを食らわせた。
　が、ゴーレムは体勢を崩す事なく振り返り、両手を広げて掴みかかってくる。
　俺はゴーレムと手四つの形になると、少しでも時間を稼ぐため、力比べに持ち込んだ。
「アリス、なんか今日はいつもより動きが遅くないか？　どうなってんだ――」

ニテーン　なんか今日はいつもより転送遅くないか!?　どうなってんだー!」
その叫びにアリスはポンと手を打つと、
「おお、自分に搭載されている体内時計によると、今の向こうの時刻は十五時十四分。お茶の時間だな。もうちょい頑張れ」
「クソッタレー!」
泣き叫ぶ俺の片膝が地に着いた。
戦闘服のパワーでも勝てないとか、どうなってんだよこのゴーレムは!
ここは地球より文明が遅れた未開な世界じゃなかったのか?
これから俺の大活躍が始まるんだろうが。
というか一番言いたいのは、悪の組織のクセにキッチリ休憩取ってるんじゃねえって事だ!
このままでは押し潰されると踏んだ俺は、渾身の力を込めて抵抗しなが

ら、声を嗄らして叫んでいた。

「制限解除──────！」

悲鳴にも近いその叫びに、アリスが即座に叱咤する。

「バカかお前は、キャンセルしろ！　敵はゴーレムだけじゃないんだぞ、無防備なクールダウン中にあの女幹部に焼き殺されるぞ！」

そんなアリスの声と共に、俺の脳内に聞き慣れたアナウンスが響いてきた。

《戦闘服の安全装置を解除します。よろしいですか？》

アリスの忠告を尻目に、俺はアナウンスに言葉を返す。

アーデンの忠告を、それに俺はアステシスに言葉を返す

「よろしいです！　早く早く！」

《安全装置の解除を行うと、一分間の制限解除行動後、約三分のクールダウンが……》

「分かってるよそんな事！　全部了承だ、早くして!!」

《安全装置を解除します。取り消す場合はカウントダウン中にキャンセルを唱えてください。10……９……８……》

「あああああ、早くしてえええ！　つ、潰れるー！」

泣き叫ぶ俺がまさに押し潰されようとしたその瞬間。

空から落ちてきた何かがゴーレムに激突し、その隙に少しだけ体勢を立て直す。

続いて少し離れた場所に、焼け焦げた臭いを漂わせ、グリフォンまでもが降ってきた。
恐らく、空中でしがみついたままグリフォンに炎を吐きかけたのだろう。
グリフォンが痛みにのたうつ中、結構な高さから落ちたロゼが、何事もなさそうに起き上がった。
「た、隊長、アレはダメです、不味いです。飛行能力を得られる程食べられそうにはありません！　ていうか生なのがダメなのかも！」
お前、もう味見したのか。
——と、その時。
《安全装置が解除されました》
俺の頭に、待ちわびていたアナウンスが響き渡った。
「あああああああ!!」

戦闘服本来の力を解放し、伸し掛かっていたゴーレムを押し返していく。

「え……ちょ、た、隊長……!?」

凄まじい重さを誇るゴーレムが徐々に持ち上げられていく光景に、ロゼが息を呑み立ち尽くす。

「きたぞ六号、C4だ！　今ゴーレムに貼り付けるから待ってろ！」

俺に持ち上げられ足をバタつかせているゴーレムに、アリスがC4と呼ばれるプラスチック爆弾を貼り付ける。

「な、何ですそれ？　粘土ですか？」

ロゼが疑問の声を上げる中、アリスが爆弾を取り付けたのを確認すると、

「おどりゃあああああああああああ！」
　俺は気合いと共に、ゴーレムを全力で投げ飛ばした。
「あれはウチの国の爆弾だよ。あんな小さい物でも凄まじい威力がある」
「ばっ、爆弾⁉　炎使いがいるのに爆弾なんてっ！」
　ぶん投げられたゴーレムが引っくり返っているその隙に、俺は慌てて距離を取る。
　それを見届けたアリスの手には、すでに起爆装置が握られていた。
「心配すんな。この爆弾は火を付けても燃えるだけで、爆発はしないんだ」
「じゃあ、どうやって爆発させるんですか？」
　ロゼの疑問に答えるように、アリスが起爆装置のコックをひねる。
「こうやって」

倒れたままのゴーレムが、轟音と共に爆散した――

「――痛い痛い、ゴーレムの破片が顔に！　おいアリス、お前俺の身体を盾にすんな!!」

一分が経ち、クールダウンで身動きが取れない俺を盾に、アリスが降り注ぐ破片から逃れている。

「す、すごい……」

この薄情なポンコツを後でどうしてくれようか考えていると、顔に破片が当たるのにも構う事なく、ロゼが爆散したゴーレム跡地を呆然と見つめていた。

「うう……、もう少し優しく起こして……。なんか扱いが、日に日に雑になってるような……」

ゴーレムの破片の雨で、グリムがようやく目を覚ましたらしい。

「グリムも起きたか。おいお前ら、俺はちょっとした事情によりしばらく身動きが取れなくてな。悪いが三分間だけ敵から守ってくれ。まあ、雑魚は他の隊が引き受けてくれてるし、ハイネはスノウが抑え、グリフォンもさっきロゼが……」

「そのハイネがこっちにやって来るみたいだな。後グリフォンも、起き上がって敵意剥き出しで睨んでるぞ」

…………………。

「……た、隊長、あたし、この戦いが終わったら美味しいご飯が食べたいです」

「ずっと寝てたからよく分からないけど、私は美味しいお酒が飲みたいわ」

「ちくしょう、足元見やがって！　いくらでも奢るから助けてください！　でもグリム、お前は後でしばいてやる！」

3

「よう六号！　また会えたな！」
　燃える赤い瞳(ひとみ)を爛々(らんらん)と輝(かがや)かせ、ロゼに庇(かば)われる形の俺の前にハイネが現れた。
　戦闘(せんとう)服のクールダウン中の俺が身動きを取れない事は、まだハイネも気づいていない。
「久しぶりだな炎(ほのお)のハイネ。なんか今日はテンション高いな。元気そうで何よりだ」
　ここはゆっくり会話でもして、少しでも時間稼ぎを。
「ああ、テンション高いさ！　なんせ戦場だからな!!　さあ、やろうぜ六

号！　こないだは邪魔が入ったが、今日は最後まで楽しもうぜ！」
　会話もそこそこに戦闘開始を宣言したハイネは、手に炎を浮かべると……！

「ま、待てハイネ！　話をしよう！　というか、俺はお前に前から聞きたい事があったんだ！」
　その言葉にハイネの動きが止まる。
　少しでも時間を稼がなくては！

「聞きたい事？　なんだい、言ってみな？」
「何食ったらそんなな胸になるんですか？」
　ハイネが無言で投げつけてきた炎を、ロゼが慌てて叩き落とす。

「隊長、前から思ってたんですが、たまにアホですよね。一体何考えてるんですか？　それとも何も考えてないんですか？」

　こいつ結構毒吐くな。

「へえ、あたしの炎を素手(すで)で叩き落とすなんてやるじゃないか。さっきの女騎士(きし)は正直期待ハズレだったが、お前は少しだけ楽しめそうだ」

　炎を防がれたハイネは、何故(なぜ)か嬉(うれ)しそうに、炎を防いだロゼに感心している。

　よし、ここはもう一度話しかけて引き延ばしを……と、思っていたその時。

　スノウがこちらに向かって駆(か)けながら泣き叫(さけ)んだ。

「うあああああああああ！　六号！　六号ー！　氷結剣(けん)が！　買ったばかりの氷結剣がこの女に溶(と)かされた！　お前は変わった飛び道具を持っていただろう、アレでアイスベルグの仇(かたき)を取ってくれえええええ！」

おい馬鹿やめろ。
「あのヘンテコな武器か！　いいさ、かかってきな六号！　なんでもダスターの塔の秘宝はお前が持って行ったらしいな。ハハッ、やっぱりあたしが見込んだ通りだ、人間のくせにやるじゃないか！　さあ、殺し合おうぜ!!」
　珍しく女性から好意を寄せられているのにちっとも嬉しくない！
　と、ハイネが再び炎を放ち、それをロゼが打ち落とす。
「おい六号、アイスベルグの仇を！　まだローンも残ってるのに、初のお披露目で溶かされたんだ！　長い注文待ちの中、ようやく手に入った氷結剣、嬉しくて毎晩抱いて寝ていた氷結剣……！」
　頼むからこれ以上いらん事言うなと、俺がスノウに泣きそうな視線で訴えかけていると。
「……おい、六号。何でずっとその娘に守られてるんだ？　…………よく分

からんが、お前、まさか動けないのか?」
　ハイネにあっさり見抜かれた。
「――グリフォン、お前は六号から娘を引き剝がせ！　その隙に焼いてやる!!」
「ちきしょうスノウ、この役立たず！　お前このバカ、覚えてろよー！」
「な、なんだと!?　というか何故動けないのだ！　くそっ、愛剣を溶かされた上、熱で近づけない私にはできる事が……」
　こいつ、そんな状況で本当に何しに来たんだ！
　スノウが俺の状況が分からず戸惑う中、グリフォンがこちらに突進してく

る。
　その前に立ち塞がったロゼが大きく息を吸い、
「我が業火の海に沈むがいい……！　永遠に眠れ、クリムゾン・ブレスッ！」
　わざわざそんなセリフを叫びながら、向かってくるグリフォンに炎を吐いた。
「くそっ、とことんその娘とは相性が悪いな！　もういい、お前が防ぎきれない特大のヤツをお見舞いしてやるっ！」
　炎に怯むグリフォンに業を煮やしたのか、ハイネが両手を掲げると、そこに集まる炎がどんどん燃え盛っていくのが分かる。
「なあロゼ、その前置きって必要なのか⁉　本当にいるのかそれ⁉」
「あたしだって本当は言いたくないですよ！　お爺ちゃんの遺言なんです、しょうがないじゃないですか！」

ロゼと言い合うその間にも、ハイネの炎は赤い色から、更に高温の青へと変わり……！

おい三分まだか、もうとっくに過ぎてんじゃないのかよ!!

「ロゼ、お前はできる子だよな！　あれぐらい、耐えられるよな!?」

「た、隊長、確かに爆炎トカゲを食べ続けて耐性が付いた私は炎で傷つきませんが、問題が!!」

切羽詰まった表情のロゼに、俺は不安のままに思わず尋ねる。

「ど、どうした!?」

「こんな公衆の面前で、服が燃えたら困ります！　それにあたし、この服しか持ってなくて……」

「服ぐらい買ってやるからー！」

ロゼは俺を抱えて逃げる気なのか、持ち上げようとするが、

「だって、乙女として、あれを受け止めるのは心の準備が……！　……って隊長、な、何でこんなに重いんですか!?　ぐぎぎ、あたし一角獣鬼に匹敵する力なのに、ビ、ビクともしませんよ！」

「この戦闘服が重くて動けないんだよ！　後少しで冷却に回してる動力が回復するから、なんとかそれまで守ってくれ！」

俺達の焦りをよそに、ハイネの炎が青を通り越し、白く輝く。

「さあ六号、覚悟しな！　せめてもの情けだ、一撃で楽にしてやる!!」

「あっ！　あいつ悪のセリフマニュアルにある、言ってはならない決め台詞を吐きやがった！　ロゼ、この危機はなんとか回避されるぞ！　そうだ、きっと健気で可憐な俺の危機を察知して、カッコいいヒーローが颯爽と——

現実逃避を始めた俺を、ロゼがなんとか動かそうとしながらも、
「隊長、現実に戻ってください！　このままじゃあたし、公衆の面前で全裸ショーやらされてお嫁に行けなくなりそうなので、もう逃げてもいいですか!?」
「お願い、その際は俺が喜んで責任取るから見捨てないでぇー!!」
と、その時だった。
「偉大なるゼナリス様、この女に災いを！　金縛りに遭うがいい！」
今まさに炎を放とうとしていたハイネが、石で塗り固められたかのように動きを止める。

「ッ!?　な、なんだと!?　バカな、これは呪いか!?」
　驚きの表情を浮かべたハイネが戸惑いの声を上げる中、同じく身動きを取れない俺は救いの主に感謝した。
「グリム、助かった！　なんかお前がまともに役に立った姿を初めて見た気がするよ！」
「そうでしょうそうでしょう、隊長もこれでゼナリス様のお力を……。ねえちょっと待って、私って今までどう思われていたの!?」
　と、その時俺の頭の中に、ようやく待ち望んでいたアナウンスが流れてくる。
《クールダウンが終了しました。戦闘服の機能が使用できます》
「もう大丈夫だロゼ。離れてくれ」
　俺がそう囁くと、ロゼはそいつこそがライバルだとでもいうようにグリフォンと睨み合う。

それを見て、金縛りから解放されたのか、ハイネが途方に暮れたように肩をすくめ、投げやりな口調で溢してきた。
「参ったなあ……。そもそも今日は、ゴーレムの能力テストが主な任務だったのに……。お前が作戦に関わると、なんかうまくいかないんだよなあ。……なあ六号。お前、本気で魔王軍に来る気はないか？　何が望みだ？　恐らくは、大概の願いを叶える事が」
「全員急いで六号の耳を塞げ！　もしくは、その危険な女を一刻も早く処分しろ！」
　ハイネの言葉を遮るように、アリスが大声で指示を出す。
「隊長、あたしと話をしましょう！　絶対に敵に耳を傾けてはいけませ

ん!!」

「た、隊長、あんな女よりも、私とまた一緒に夜のデートに行きましょうよ！」

そんな事を口走りながら、俺の耳を塞ごうとにじり寄って来る二人の部下。

その時、数多の戦場で培った俺の本能が身の危険を訴えた。

「ふわーっ!!」

ほとんど反射的に前に転がり、その必殺の一撃をかろうじて回避する。

俺が慌てて振り返ると、そこにはダガーを抜いたスノウの姿が。

「なっ！　き、貴様、身動きできないのではなかったのか！　動けるとはどういう事だ！」

「お前の方がどういう事だ、頭いかれてんのか！　せめてきちんと裏切って

から斬れよ!!　何なんだお前ら、俺がホイホイ魔王軍について行くとでも思ってんのかよ！」
　まったくもって心外だ！
　一体俺をなんだと思って……。
「まず、給料は今貰っている三倍は出す。後は……おい六号、サキュバスって魔物の名前を聞いた事はあるか？」
「聞いた事があります」
「おい六号、正座して話を聞くな！　敵に敬語を使うな！　それ以上耳を貸すな、銃を抜け!!」
　珍しく焦った口調のアリスが早口でまくしたてる。
「ったく、どれだけ信用が無いんだよ。ざ、残念だったな炎のハイネ。俺はそう簡単に、金や女で釣られる男じゃ……」

立ち上がりながら腰の銃に手を伸ばそうとする俺に、ハイネが微笑み右手を差し出す。
「さあ六号、この手を取るんだ。望む女をいくらでもお前の世話係につけてやる。わがままボディのサキュバスに、未成熟だが甘えん坊(ぼう)なリリム。魔性(ましょう)の美しさを持つヴァンパイア、耳元で甘い声で囁いてくれるセイレーン……」
「おいグリム、呪いであの女を黙(だま)らせろ！　これ以上魅了(チャーム)の魔法を使われると六号が持たない！」
「あれ、魅了の魔法なの!?　なんの魔力も感じられないんだけど……っ!?」
『……アリス、ごめん……。俺はもうダメかもしれん……』
『おい六号、気をしっかり持て！　あと本気っぽく感じるから日本語で言うなコラ！』
アリスが切羽詰まったように叫ぶ中、俺とハイネの間に白い影(かげ)が割って入った。

「殺(と)ったー!!」

様子を覗(うかが)っていたスノウが、俺に差し出したハイネの腕(うで)を下からダガーで斬り上げた。

俺に手を差し伸べていたからなのか、今のハイネは身にまとっていた炎(ほのお)も解除している。

恐(おそ)らくは、今が好機だと踏(ふ)んだのだろう。

裂帛(れっぱく)の気合いと共に銀閃(ぎんせん)が奔(はし)り、手を引っ込めたハイネの籠手(こて)から何かが外れ、それが赤い光を放ちながら空に舞(ま)う。

「ああっ!　ま、魔導石が!!」

ハイネは、目の前の俺やスノウなど眼中にないかのように、宙を舞う宝石を目で追った。

その視線の先には宝石をキャッチしたアリスの姿が。
「……ほう、これは？　反応からしてとても大事な物のようだが」
「い、いや！　別に、それほど大切な物でも……」
ハイネは口ではそう言いながらも、視線はアリスの手元に釘付けだ。
俺はアリスの隣に立つと、その宝石をマジマジと見る。
「大切な物じゃないんだとさ。なら、戦利品としてもらっとけもらっとけ」
「そうだな。敵同士なんだし返してやる義理もないしな。大切な物じゃないなら、なおさらだ」
「あ！　あのっ！　そ、その……それは、その、大切な……」
俺とアリスのやり取りに、ハイネが何かを言い淀む。
「それは魔導石ね。魔法使いは触媒を通して魔法を使うの。普通は、杖や指輪、腕輪なんかを触媒に使うものだけど、彼女はその石を触媒にしてるの

ね。その石からは凄まじい魔力を感じるわ。恐らく、長い時を重ねて魔力を注ぎ続け、ようやく作り出した触媒ね」

　近付いて来たグリムがアリスが持つ石を下から覗き、その出来に感心しながら教えてくれた。

「……これがないと、ハイネはどうなる？」

「魔法が使えなくなるわ。他の物でも代わりは利くけど、魔王軍四天王と呼ばれる程の力は、今後出せなくなるでしょうね」

　俺とアリスは顔を見合わせ、そしてハイネを振り返る。

「……ひっ！　な、なんだその顔は、お、おい六号？　お前はその石を持って、魔王軍側に降るんだよな？　な？　そ、そうだよな？」

　泣きそうな顔で言い募るハイネだが。

「「うわぁ……」」

俺達の表情を見た仲間達が声を揃えて引いていた。

4

辺りからはすでに戦闘の音は止んでいた。

魔物も兵士も突然始まった魔王軍幹部の突発イベントに、目が釘付けとなっているからだ。

そのイベントとは……。

「ちっがーう！　もっと上目遣いで前屈みになって谷間を強調！　おっ、涙目のその表情はポイント高いぞ！」

《悪行ポイントが加算されます》

《悪行ポイントが加算されます》

《悪行ポイントが加算されます》

先ほどから忙しなく響くアナウンスを聞きながら、俺がデジカメを構える中。

「……死にたい……」

ハイネは俺に指示されるがままに、こちらをキッと睨みつけ、大勢の視線に晒されながら扇情的なポーズを取り続けていた。

「よし、次は手を後ろについて、脚を開いて腰を落としてみようか。こら、その手をどけろ！　手は後ろに！　おっ、反抗的なその目はなかなかいいぞ！　一部のマニアが狂喜乱舞して高値を付けそうだ！」

「うっ……ううっ……、うううう━っ…………！」

とうとう本気で泣き出したハイネを遠巻きに眺めながら、ロゼがぽつりと呟いた。
「き、気の毒に……」
　デジカメのボタンを押す度に、脳内に響くアナウンス。
　その声が聞こえる度に、端末でポイントを見ていたアリスがうんうんと嬉しそうに頷いていた。
「いいぞ六号、もっとだ！　もっとハイネを追い詰めろ！　フハハハハハ、強敵が堕ちていく様を見るのは本当に堪らぬ！　ふぐう……っ！　み、見ろ、六号、あれだけの強さを誇った、ハイネの泣き顔を……っ！」
　俺の隣では、スノウが自らの体を抱き締め、そんな事を口走りながらブル

ブルと身を震わせている。
「私の愛剣の仇だ、せいぜい嬲られるがいい！　フハハハハハハハ！　フハハハハハハハハ!!」
　金欲と出世欲に溺れる人間性だけじゃなく、人の堕ちる様に喜びを覚える性癖だとか、こいつはどこまで業が深いのだろう。
　まあこの危ない女は置いておき、今は目の前のハイネの事だ。
「よし。次は涙目のまま、その体勢でダブルピースしながら笑ってみようか！　……よしよし。そろそろ次のステップにいってみよう。……そうだなあ、服が邪魔だなあ」
「ひいっ！」
　これ以上何を命令されるのかと怯えるハイネを見て、ロゼがおずおずと近づいてくる。

「た、隊長、これ以上は敵の幹部とはいえ、あまりにも気の毒ですよ……。そろそろ石を返してあげたらどうです？　ハイネさんが再び魔法を使えるようになったら、その時は堂々と再戦すればいいじゃないですか」

　その、ロゼの言葉に。

「アリスアリス、俺、言う事を聞いたら石を返してやるなんて言ったっけ？」

「いいや、知らんぞ？　確かお前はこう言ったんだ。『よーし、それじゃあまずは、その胸を両手で寄せて上目遣いで見上げてみようか！』ってな。一言も、言う事聞いたら返してやるなんて約束はしていないな。アイツが勝手に勘違いして指示に従っていただけだ」

「ひ、酷過ぎる……！」

　俺達のそんなやり取りに、ハイネが跳ねるように立ち上がる。

「ここまでやらせといてそりゃないだろ！　こ、殺す！　お前は絶対に殺すっ!!」

「お？　魔法を使えないその状態で、殺せるもんならやってみろ。ほら、早く早く！」
「くっ、ぐぐぐ、ぎぎぎぎぎぎ!!」
　ハイネは余りの悔しさと怒りからか、その目に涙を溜めながら、歯を食い縛り睨みつけてくる。
「しょうがねえなあ。そこまで返して欲しいのか？」
「かっ、か、返してくれるのか!?　た、頼む、それは大切な……、ななな、何を！　お前、何やってんだ!!」
　俺は戦闘服のチャック部分に手をかけてごそごそとまさぐった。
　着脱が面倒な戦闘服は、急にもよおした時のため、こういう部分は大変便利に作られている。
　俺の一番大切な物が収納されているそこに、ハイネの大切な物も一緒に

しまってやった。
紳士な俺は、ハイネが少しでもソレを取りやすいよう、腕を組んで首と足だけでブリッジすると。
「ほーら、取ってごらん」
「……六号、お前、覚えてろよおおおおおおお!!」
ハイネはグリフォンに飛び乗ると、泣きながら帰って行った。

5

城下町にある小さな酒場にガラスを打ちつける音が鳴る。

「「「乾杯!!」」」

戦いを終えた俺は、部隊の連中を連れて打ち上げをしていた。

「しかし、大戦果だったな六号！　あの巨大なゴーレムを破壊し、手段が手段とはいえ、魔王軍四天王を弱体化させ追い返す。指揮官を失った魔王軍の敗退ぶりを見たか？　我らの隊の一人勝ちではないか!!」

鼻歌交じりに言いながら、スノウが上機嫌でジョッキを傾けた。

「最近は魔王軍に対して善戦できてる気がするわ！　隊長が来る前は、私なんて戦闘がある度に死んでいたもの！　偉大なるゼナリス様、今日は復活の祭壇以外で目覚められた事に感謝します！」

狭い酒場の中を車いすで大きく占領していたグリムが、そう言って感謝の祈りを捧げ出す。

「おいひいよお……。おいひいよお……！　たいひょうが来てからは、おいひ

い物をお腹いっぱい食べられててあわせわふ！」
　その隣では、ロゼが酒より飯といわんばかりに、目に涙を浮かべながらがっついていた。
「そうだろうそうだろう、もっと俺を褒めてくれてもいいんだぞ！　……しかしなんだな。そろそろ俺達は、この国の住人達の噂になってもいいんじゃないか？　おいおい、その辺歩いててサインねだられちゃったりしたらどーするよ！　なあ、どーするよ!?」
　俺が上機嫌でジョッキを呷りそれを一気に飲み干すと、チビチビとジョッキを傾けていたスノウが言った。
「まあ、最年少で騎士に叙勲された優秀な私がいるのだ、このぐらいは当然だろうな。このまま手柄をあげ続け、再び騎士団長に返り咲いてやる！」

お前、普段大して役に立ってないじゃんと言おうとしたが、俺はふと別の事が気になった。

「最年少で騎士になったって、そりゃ何年前の事なんだ？　つーかお前、今いくつよ」

「ん、私の歳か？　十七歳だ。騎士に叙勲されたのは十二の頃だな」

その問いかけにシレっとした顔で答えたスノウは、ゆっくりとジョッキを傾けて……、

「お前ふざけんなよ老け顔が！　俺より年上じゃねーのかよ!?　その体と偉そうな態度と物言いで、絶対年上だと思い込んでたわ!!」

「はぶっ!!」

俺の言葉にスノウが酒を噴出した。

「ぎゃー！　目、目がぁ!!」

吹き出された酒を目に喰らい、グリムが車いすから落ちてのた打ち回る。
ちょっとむせたのか涙目になったスノウが口を拭い、
「貴様、騎士とはいえ私だって女の端くれだ！　老け顔とはどういう了見だ!?」
「うっせーよ年下が！　お前俺より年も立場も下のくせにタメ口利いてやがったのかよ！」
俺は椅子の上にふんぞり返ると、スノウに小銭を投げつけた。
「おいお前、ちょっとパン買って来い」
「誰が行くか、そんなものは給仕に頼め！　……まったく、貴様は年上だというのなら、もうちょっとしっかりしたらどうなんだ。そろそろ隊長としての自覚を持ってだな……」
不満タラタラのスノウの言葉に、ロゼが目を輝かせながら手を止める。

「とうとうスノウさんが、隊長を隊長と認めました！」

「ち、違う！　私は隊長としての覚悟と責任を説いているだけでだな……！」

「誰か、タオル取ってえええ！」

俺達のそんな迷惑な騒ぎも、酒場の中の喧騒の前には及ばない。

国の住民にも今日の戦勝の事は伝わっており、この場の皆も浮かれているのだ。

そんな賑やかな夜の空気に包まれながら、俺達はひと時の宴を楽しんでいた。

「――ふうー……。そういえば、今日はアリスは来なかったの？」

グリムが何杯目になるのかも分からないジョッキを空けて、ほんのりと赤い顔で尋ねてきた。

物を食えないアンドロイドなので酒場に来れないと言うわけにもいかず。

「アリスはなぁ。流石にほれ、こんな時間の酒場はお子様の教育に良くないだろ。俺の部屋に先に帰らせてあるよ」

それを聞いていたスノウが少しだけ感心したような表情で、チビチビと酒を飲みながら口を開く。

「戦場にまで連れて行っておいて今さら教育もなにもないと思うが……。あの子は口は悪いが凄まじい才能を秘めているな。なんというか、知能の高さが半端じゃない。こないだ、城の書庫に保管してある全ての書物を一日で読

み終えたなどと、冗談みたいな話を聞いたぞ」
「あたし、商店街で商人さんと色々交渉しているアリスさんを見かけましたよ」
「んぐ、んぐっ……ぷはぁー！　私は、治療術士の詰め所に何かを持ち込んでいるアリスを見かけたわね！」
　あいつ、俺の知らないところで色々やってるんだなあ。
「商人に、治療術士？　おい六号、最近武器や防具の質が上がり、商人達が随分と羽振りが良さそうだとか、色々な新薬が発売されたとか聞いたが……。もしやアリスが関係してるのか？」
「知らない」
　知らないとは言っても、間違いなく関係している気はするが。

と、スノウはそんな俺に胡乱(うろん)な目を向けながら、ジョッキの酒をチビリと舐(な)めて。
「……フン。まあ、貴様らの素性(すじょう)などどうでもいい。今やお前とアリスは我が隊に欠かせない存在だからな。だが、勘違いするなよ。私はまだ貴様を認めたわけではないからな！」
「おい見ろよロゼ、これがツンデレってヤツだ。こいつ口ではこんな事言ってるが、もう俺の事が好きでたまらないんだぞ」
「へー！　スノウさんが隊長に突(つ)っかかるのは好きの裏返しってヤツですか！　勉強になります！」
「ふざけるな、叩(たた)き斬(き)るぞ！　大体貴様は、初めて会った時から……」
「そこのイケメンのお兄さん、おかわりー！」
楽しい時間というものはあっという間に過ぎていくものだ。

この日は俺がこの世界に来て、一番時が経つのが速い夜だった。

6

——すっかり泥酔している六号を、肩を貸してやりながら店から無理やり引きずり出す。

同じく店から出てきた同僚達が、顔を赤くした六号に笑いかけ、

「隊長、今日はご馳走様でした！　あたし、こんなに食べたのは久しぶりです！」

「同じく、ご馳走様！　さあロゼ、あなたにはもうちょっと付き合ってもらうわよ！　なんだか今夜は最速記録を出せる気がするの！」

何やら不穏な発言をしているグリムの言葉に、車いすを押してやっていたロゼが、
「やめようよー。あたし、もうお腹一杯になったし眠りたいよー。行くなら一人で行ってよー。それにお爺ちゃんの遺言で、夜更かしするなって言われてるんだよー」
「あなたが来なかったら、誰が私の記録の見届け人になるのよ！　さあ行くわよ!!　戦勝で浮かれているカップル達に地獄を見せるの！」
「あ――……」
グリムに腕を掴まれて無理やり付き合わされるロゼを見送り、六号と共に城へ向かう。
「ふあああああ、飲んだ飲んだー！　おい、あの店の給仕のねーちゃん可愛かったな！　ちょっと尻触っただけであんな反応するなんて、新鮮でとてもよかった！」

と、上機嫌の六号……、いや、バカ男がロクでもない事を言い出した。

「……貴様は、自分がこの国の騎士だと自覚しろよ？　お前がバカなのはもう死ぬしか直しようがないが、同じ騎士の私までもが同類に見られるんだ」

「バッカ、お前あれは戦闘員としての礼儀に則ったまでなんだよ！　マニュアルに書いてある事も知らねーのか？　可愛いウエイトレスに出会った時の褒め方は、『へっへっへ、姉ちゃんいいケツしてんじゃねーか、酌してくれよ！』だろうが！」

酷く酔っ払っているせいか、このバカはいつも以上に言っている事が分からない。

「まったく……。ほら、そっちじゃない、こっちだこっち！　お、おいこら！　そんな所で用を足そうとするな!!」

フラフラしている六号を無理やり城の宿舎に連れ帰り、ようやく部屋の前まで連れて行く。
「おう六号、帰ったか。またえらく酔っ払ってるな。このアホはどれだけ飲んだんだ？」
　六号の帰りを待っていたのか、ドアをノックするとアリスが即座に出迎えてくれた。
「酷いものだったぞ、樽ごと持って来いだの言い出したり、今日の俺はお大尽だと叫んで酒場中の連中に奢ったり……」
「コイツは金を貯めるという事ができないからな。有ったら全部使う男だから仕方がない。ご苦労だったな」
　こんな子供にここまで言われるのはどうなのだ。
　このバカは、これで年上だとかほざいているのだから……。

「じゃーなスノウちゃん！　上官の案内任務ごくろう！　ほら、おやすみのチューしろよ!!」

「ちゃんを付けるな酔っ払いめ！　バカな事を言っていないでとっとと寝ろ！」

くだらない事を言う酔っ払いを部屋に蹴り込み、足早に自室に向かう。

まったく……、あいつはよくもあれで今まで生き残れたものだ。

思えば出会った当初から無礼なヤツだった。

まあ今となっては、その実力だけは認めているが……。

しかしあの酔っ払いめ、何がスノウちゃんだ。

「六号のヤツめ、とことんまで人をバカにしおって……。いつかこの手で斬り捨ててやる！」

まぁここまで同じ隊で共に戦ってきた今では、もうそんな事ができない事は理解はしているが。

そもそも、あまり認めたくはないが、あの男は私よりも……。
「ほう、六号殿を斬り捨てる。それは聞き捨てならない話ですな」
突然の声にビクリとして振り返ると、
「参謀殿……」
そこには、薄い頭を帽子で隠した片目に傷のある男がいた。
「い、いえ参謀殿、今のは……。別に本気で六号を、と言っているわけではなくてですね……」
まあ、いつも公衆の面前で堂々と、あの男に対して斬り捨ててやるとか殺してやるとか言っているので、今さら慌てる必要もないのだが……。
と、参謀は私の言葉を片手を突き出し遮ると。

「いいのです、いいのです。気持ちは分かりますから。ポッと出の得体の知れない無礼な男が現れ、バカな事をやらかした。なぜかその責任を取らされ降格されたあなたとは逆に、あの男はいきなり隊長に抜擢され、卑怯な手で次々と手柄をあげているのです。これで恨みに思わないはずがない」

　勝手に納得し、うんうんと頷く参謀。

　いや、別に恨みに思ってはいないのだが……。

　しかし、無礼な男という部分だけは非常に共感できる。

「まったくです！　あの男ときたら、バカで無礼で品も無く、常に私を怒らせてばかりで……。アイツは人をからかう事を生き甲斐にでもしているのだろうか！」

　元々酒に強くもないせいか、酔った勢いのまま日頃の怒りを吐き出してしまう。

「分かりますともその気持ち！　この私も、事ある毎におっさんだの何だのと……。いや、スノウ殿とは気が合いますな！」

そう言って隣に並んだ参謀は、さりげなく私の肩に手を置いた。

気が合うだのとは白々しい。

私がまだ下級騎士だった頃、出自で散々見下してくれたのは今でもちゃんと覚えている。

と、そんな事を考えながら、なんとなく肩に置かれた手を気にしていると。

「うむ、スノウ殿はそろそろ元の地位に戻ってもいい功績を収めている。どうです？　そろそろ近衛騎士団に戻りたくはないですか？」

「も、戻れるものなら戻りたいです！」

スラム街のみなしごとして生まれた私が、どれほどの苦労をしてあの地位

に登り詰めたか。
身分の差から、妬まれ、嫌がらせを受けた事など数えられないほどだった。
それが、再び自分が隊長に返り咲ける！
……だが、今自分が所属している隊はどうしようか。
いや、考えてみれば自分があの功績をあげたわけではなく、隊としての手柄なのだ。
なら、私の騎士団に隊の連中を編入させてやればいい。
私の隊だ、グリムやロゼももちろん平等に扱おう。
そしてアリスは頭が切れるから、作戦立案でも担当してもらおうか。
……そして、あのバカだが。
口も頭も性格も悪い男だが、戦いに関してだけは私よりも上だ。
まあ仲間はずれもなんだし、アイツも入れてやるとしよう！

——その時の私は、一体どんな顔をしていたのか分からない。
だが参謀は、私の表情を見て満足そうに頷いた。
先ほどから肩に置くこの手が気になるが、それを指摘(してき)して機嫌(きげん)を損(そこ)ねられても困る。
この不快感は、後日あの男に……。
「うんうん、どうやらスノウ殿もお喜びのようだ。そうでしょう、あのような、魔物(まもの)の血が混じっている不可解な娘(むすめ)や、邪神崇拝(じゃしんすうはい)者などと共にいたくない。分かります、分かりますとも」
その言葉にこめかみがピクリとくるが、なんとか心を落ち着かせる。
これだからあの男に短気だなんだと罵(ののし)られるのだ。
「ところで……。スノウ殿、六号殿についてですが。あなたは以前、謁見(えっけん)の間

で陛下にこうおっしゃっていましたね。あの男は他国のスパイである、と」

　そういえば、出会った頃にそんな事を言っていたのを思い出す。

「いえ、あれは私の勘違いでした。というか、あの男にスパイなんて器用な事ができるとも思えません。むしろ、居心地が良ければ任務を忘れ、そのまま相手国に住み着くかもしれません」

　うん、あのアホがスパイ活動なんて高度な事を行える気がしない。

というか、いくらなんでも怪し過ぎるだろう。

……だが、参謀はゆっくりと首を振ると。

「それは分かりませんとも、アレであの男は数々の戦果を挙げている。となれば、本性を隠しているのかもしれません。……あなたは聡明な方だ。そして、常にこの国を想ってくれている方だ。そんなあなたに頼みがあります。それとなく六号殿を探ってはくれませんか？　スパイである証拠を見つけて

欲しいのです。その、真偽がどうであれ――」
――トボトボと宿舎の廊下を歩きながら、私は参謀の言葉を思い出し、ため息を吐いた。
近衛騎士団に戻る代わりに、六号がスパイである証拠を見つけ出す。
真偽がどうであれという事は、つまりあのバカを陥れるネタを持って来いという事だろう。
……国が滅ぶかというこんな時に、あの参謀は自分の出世争いの方が大事なのだ。
『……俺、あの参謀のおっさん嫌いなんだよ。あいつからはなんか、自分の保身しか考えないような、姑息な卑怯者の臭いがする』

六号が言っていた言葉だが、今さらになってそれを思い出した。
お前が言うなといってやりたいセリフだが、今となってはなぜかあのバカの方がマシに思える。
もう一度深くため息を吐き、肩を落として六号の部屋へと歩みを進めた。
私の手には、六号に届けて欲しいと頼まれた今回の特別報奨の入った皮袋がある。
「何が、六号殿に会いに行く口実ができますし……だ！　くそ、あのアホの事だ、こんな時間に再び部屋を訪ねたら、また何を言われるか……」
……しょうがない、騎士団に戻るのは諦めよう。

あの連中と共に手柄をあげ続ければ、また再び返り咲ける時が来るはずだ。
六号の部屋の前に立つと、心を深く落ち着かせた。
あの男の事だ、まず間違いなく皮肉からはじまり、下ネタを絡め、人をおちょくりにかかる。
深呼吸をして心を落ち着け臨戦態勢を整えていると、部屋の中から声が聞こえた。
「しかし、どうすんだこの活躍ぶりは。そのうち王様が、我が娘ティリスと結婚してこの国を治めて欲しいとか言い出したらどうしよう。この国って一夫多妻制なのかな？」
一体どういう思考をしているんだアイツは。
「知るかそんなもん。というか、ティリスは美少女だと思うんだが、嫁が一人じゃ不満なのか？」

「いや、不満ってわけじゃないんだが。ほら、俺の隊って女ばっかだろ。隊の連中が、俺とティリスの結婚式前夜とかに、私……実は隊長の事が……みたいな展開になったら困るだろ？」

……ほ、本当に、どういう思考をしているのだろう。

「……自分は随分色んな知識を手に入れて、大概の事は予想もできるし、理解できない事などないと思っていたがまだまだだったよ」

「そうか。よく分からんが、お前はできる子だ。頑張れ」

アイツのお守り役のアリスがなんだか気の毒に思えてきた。

「でもスノウとかを嫁にしたら、毎日違う意味で刺激がありそうだなぁ」

聞き捨てならないその言葉に、頭に血が上るのを自覚する。

盛大に罵ってやろうと、ドアノブに手を伸ばし……！

【中間報告】

この星においての調査はほぼ完了。

これよりアリスと共に、侵略（しんりゃく）の足がかりとなるアジトの確保を優先します。

アリスが現地で行った資金運用により、アジト購入（こうにゅう）の費用としては充分（じゅうぶん）な額を確保済み。

条件に見合うアジトを入手次第（しだい）、追って連絡（れんらく）いたします。

すいこう

……現在において、任務遂行に問題無し。

報告者　戦闘員六号

五章

ヒーローになるために

1

「──どういう事だ？」

突然(とつぜん)ドアを開け放ち、拳(こぶし)を握(にぎ)り俯(うつむ)きながら、スノウが声を震(ふる)わせる。

「……スパイとは、どういう事だ？」

……一番聞かれちゃいけないヤツに、一番聞かれてはいけない話を聞かれてしまったらしい。

どうしよう、どうごまかす？
バカになった振りでどうにかなるか？
いや、既に戦闘で頭の病気を患っている設定なのだ、これ以上はマジで勘弁してほしい。

ここは逆切れだ、逆切れするのだ！

「お前ノックもなしにドア開けるとかどーいう教育受けてんの？　俺が特殊な事してたら大惨事だぞ、それともドア開けたら俺が着替え中とか、そんなエロイベント期待してんのかおっぱい女！」
「というか、この酔っ払いの戯言を真に受けて突入してくるヤツがあるか。お前、その内悪い男に騙されるぞ。そんなんだから常日頃から六号に……」
　意図を察したアリスが俺に続いて畳みかけるが、身を震わせながら俯き続けるスノウを見て。

続けるスノウを見て

「……おい六号。こりゃダメだ。諦めろ」

マジかよ、ここで諦めたらどこぞのスパイとして首チョンパされんじゃねーのか。

素直に処刑されてたまるかと、スノウをどうごまかすべきか迷っていると……。

「お前達が何者かは聞かない。それは、今までこの国を守ってきた事に対する、せめてもの礼だ」

歯を食い縛り、拳を握り。

「ここから出て行くがいい。そして、私の前に姿を見せるな……」

最後まで俺達二人の顔を見る事なく、スノウが力なく呟いた──

「――いえーい、一番乗りーー！　俺この部屋がいい！　ヒャッホーー！　超ベッドでけえええええ！」

「おい、ズルイぞ六号！　じゃあ自分の領土は、二階のトイレと一階のトイレを占領だ！」

　俺とアリスは、一時的な拠点として家を借りた。

　郊外にある小さな家だが、悪の組織の隠れアジトとしては良い感じだ。

「お、おまっ！　お前はトイレ必要ねーだろ、二階のトイレは俺によこせ！」

「なら、トイレと引き換えにその一番でかい部屋を自分によこすんだな」

　俺とアリスは家の中を探索しながら次々と部屋割りを決めていく。

「ここは俺の部屋からすぐ遊びに行ける距離だな。よし、アスタロト様の部屋はここでいいだろ。勝手に部屋のドアに名前を書いてしまおう。部屋が近

けりゃ、風呂上がりのアスタロト様がちょこちょこ拝めると思うんだ」
「……そうか、まあ好きにしろ。そういえば六号。お前が毎日騎士ごっこをして遊んでいる間に、この付近の有用な資源や生態系の調査はあらかた済ませておいたからな」
　コイツ、俺が目を離した隙になんかやってると思ってたらそんな事してやがったのか。
　ていうかそんな任務を与えられていたのをすっかり忘れてた。
「お前って案外、本当に高性能なのか？」
「当たり前だろ、今さら何言ってんだ。ついでに、行き過ぎない程度の新素材や新薬を提供してコネを作ったり、先物取引で活動資金を増やしたりもしてるぞ」
　マジかよ。

[illegible]だ。

「アリスさん小遣いください。毎日のように散財したせいで、この家借りた時にすっからかんになっちまった」

「……アンドロイドに小遣いねだるってどうなんだ。それより随分遠回りしたが、残された最後の任務を終わらせるとしようか」

俺達に残された最後の任務。

「……そうだな。地球向けの転送機の設置場所は、この家の地下で大丈夫か？」

「ああ、多少時間はかかるがクリーンルームに改装すれば小型の物なら充分だ。なら、今日から早速装置の部品を送ってもらおう」

なんか、任務の重要度にしては結構アッサリしたもんだったな。

転送機が組み上がり次第、地球の戦闘員を呼び寄せてこの国を内部か

ら侵略だ。
　俺達の力があれば、魔王軍なんて敵じゃないだろう。
　キサラギの近代兵器と物量で、間もなくこの星は蹂躙される。
「今回の任務は楽勝だったな。サバイバルもなきゃ弾丸が飛び交う事もなかった。その分炎の塊が飛んできたけど……」
　うん、まあ……。
　終わってみれば、なかなか楽しい任務だった。
「どうした？　何か悩みでもあるのなら言ってみろよ。自分はお前のサポートをするために作られたんだ。話ぐらいは聞いてやるぞ？」
　アリスがボフッとベッドに身を預け、顔だけをこちらに向けながら言ってくる。
「……別に何も悩みなんてないさ。俺は悪の組織の戦闘員だぞ。今までも

散々悪事に手を染めといて、ここだけ侵略しないってのもおかしいしな。それよりも、地球に帰ったら冷えたビールをたらふく飲んでやる。こっちの酒はぬるいんだよな。ていうか今回ぐらいは幹部連中に奢ってもらおう。こんなガスも電気も通っていないような未開な星、未練もねーぜ！　これだけの功績があれば、俺も晴れて大幹部だな！」

　これからの明るい未来を考えてはしゃぐ俺に、アリスは仰向けのまま天井を見上げると。

「……そうか。ならいいさ。それじゃあ六号、自分は部屋の改装と転送機の組み立てに入る。これから一月、邪魔にならないようにその辺で適当に遊んでいてくれ」

　……一月？

「なんでそんなに時間が掛かるんだよ。組み立てなんてちょちょいと終わり

そうなもんだけど」

「……お前は本当に人の話を聞かないんだな。ここに最初に来た時に説明したろ。転送機を組み立てても、移送空間を安定させるのに一月ぐらい時間がかかるって」

　そういやそんな事言ってたような。

「……その間、めちゃめちゃ暇（ひま）になるじゃん」

「だから、自分の邪魔をしないようにどこかで遊んでいてくれよ。……そういえばここ最近、魔王軍が妙（みょう）な動きを見せてるらしいぞ。何でも、勇者様とやらが幹部の一人をある洞窟（どうくつ）に追い詰（つ）めているそうだが、勇者が王都から離れた隙を狙（ねら）って、他（ほか）の幹部が軍勢を集結させているらしい。勇者の留守を狙い、この国に空き巣を仕掛けるつもりだろうな」

　コイツはどこでそんな情報を仕入れてくるのだろう。

　しかし、そうか　　、魔王の軍勢が　　！

ス、ス……魔王の宣誓ス……

「ざまあみろ！　あのクソ女、俺を追い出した事を今さらになって後悔するがいい！　そりゃまあスパイな俺にもほんのちょっとは非もあるけど、あれだけの功績をあげたんだから、事情ぐらい聞いてくれたってよさそうなもんだ！」

「スパイは大概の国で死刑だけどな。まあ、何も聞かずに追い出すだけで済ませてくれたのは、アイツなりの恩返しも含まれてるんだろ。それよりも、勇者様とやらが万が一にもまた敗れれば、この国は一気に敗色濃厚になるが。……それでいいのか？」

意味深なアリスの言葉に、内心を見透かされたような気分になる。

「……な、なんだよ。俺はヒーローじゃないんだから助けねえぞ」

そう、俺は悪の組織の戦闘員だ。

なんの得にもならないのに、危険を冒して人助けなんてのは美学に反す

る。

まあ、あの女が助けてくれと泣き付いてきたら、考えない事もない。

それに、反抗的なアイツはともかく、ロゼやグリムは俺の部下だったわけだしな。

でも、それにしたって助ける理由としては弱すぎる。

そんな俺の葛藤に。

「なあ六号」

高性能を自称する相棒が。

「自分達が狙っている侵略地を、同業者に荒らされるのは面白くないと思わないか？」

アンドロイドのクセに、ニヤリと口元を歪めて言った。

2

「──魔王軍に不穏な動き？」
「はい隊長。監視の兵からの知らせだそうで、近日中に攻めてくる恐れあり、だそうです」
「……そうか、ご苦労だったロゼ。……ああ、それと。私の事は、隊長ではなく今まで通りの呼び方でいい」
　私のその言葉に、ロゼが無邪気な笑みを浮かべた。
「……はい、分かりましたスノウさん！」
……私もこのぐらい素直に、そして、もっと柔軟な思考でいられたなら、あの男を追い出す事もなく、話ぐらいは聞いてやれたのだろうか。

そんな自嘲気味の考えを振り払うように、私は騎士団の隊員達に呼びかけた。

「今から二班に分かれ、模擬戦を行う！　想定する敵は魔王軍の精鋭部隊！」

その声に、威勢よく返事をして訓練を始める忠実な隊員達。

……こんな形で、この隊に戻ってくるとは……。

この隊に戻れた経緯を思い出し、つい顔を顰めてしまう。

あの男が出て行った後、勝手に勘違いした参謀が、嬉々として私を近衛騎士団の隊長に戻してしまった。

そんなつもりであの男を追い出したわけじゃない。

金や出世に関しては人一倍欲深い自覚はあるが、こんな形での出戻りは

素直に喜ぶ事ができない。
……まったく、我ながら難儀な性格だ。
と、そんな苛立ちが表情に出ていたのだろう。
ロゼが、おずおずと言い難そうに。
「……あの、スノウさんにもう一つ、報告が……」
「何だ？　良い知らせか？　悪い知らせか？」
これ以上悪い知らせは聞きたくないのだが……。
「ど、どっちなんでしょう……。それが、その。……最近、街に夜な夜な変質者が現れるとかで」
「……そんな事か。それは警察の仕事だろうに」
だがロゼは、私の疑問に困ったような表情を浮かべると。

「目撃者の話だと、変質者はトゲトゲしい黒い鎧を着た人らしいんですが……」

3

「ほーらお嬢さん、今からお兄さんが手品を見せよう！　さあ、手も触れないのにズボンのチャックが下りていくよーー！」
「きゃーーっ変態！　だ、誰か来てえええええええ‼」
　こんな時間に女の子の一人歩きとは、親はどんな教育をしているのやら。
　俺は逃げていく少女を見送ると、お馴染みのポイント加算のアナウンスを聞きながらズボンのチャックを引き上げた。

「まったく、けしからん。この国の行く末が心配だな。……ふう、これで今夜は六人目。……次は、あの路地裏をフラフラしてる子にするか」
時刻はすっかり夜を回り、そろそろ日付が変わる頃。
俺は路地を一人で歩く少女を追った。
辺りには誰もいない、やるなら今だ！
「おおおお、俺を見ろおおおおおおお!!」
「きゃあああああああ!!」
俺は両手を広げると、少女の前に立ち塞がる。
「さあお嬢ちゃん、勇気を出して、俺のズボンのチャックをちーってしてしてごらん？」
「いやああああああ、犯されるー!!」
少女は突然現れた俺に驚いたのか、地面にへたり込んだまま動けないよ

うだ。
「ふへへへ、安心しな。別に手出しはしない！　ちょっと悲鳴を上げて逃げてくれればいいんだよ！　さあ、早く逃げないと、お嬢ちゃんがやるまでもなくチャックが勝手に下りていくぞー？」
「きゃあああああ！　手を出さないなんて、そんなのきっと嘘だわ！　甘い言葉に私が安心した瞬間、暗がりに引きずり込まれてそのまま犯され、性奴隷にされてしまうんだわ!!」
きゃあきゃあと泣き喚く少女を俺は少しだけ安心させようと、
「安心しな、こっちにも事情があって手を出す事はできないんだよ！　さあ、早く起き上がって逃げないと、何を見せつけられるか分からないぞー？」
そう言って、チャックに片手をかけながらジリジリとにじり寄る。
「嘘よ、嘘だわ！　きっとこのまま拉致されて、そのたぎる欲望を毎日ぶつけられるんだろう！　ああっ、何と[illegible]なり、あなたに迫ってて転んだ拍子に[illegible]

けられるんだわ！　ああっ、何て事なの　あなたに連れて転んだ拍子に足をくじいて、これじゃ逃げられないっ！　いやあああああああっ!!」

「あ、あんた転んでなんていなかったじゃないか……。いや、拉致なんてしないし一般（いっぱん）人に手は出さないってば、ちょっと俺を見て不快感を覚えてくれるだけで……」

「いやあああっ！　嘘よっ、こんな美少女が夜中無防備にふらついてるのに、手も出さないなんてありえないわ！　きっと綺麗（きれい）な海の近くの人気（ひとけ）のない白い家に連れ込まれ、性奴隷にされ子供を三人ぐらい産まされるんだわ！　最初はもちろん男の子！　そして次は女の子！　三人目はどっちがいいの!?」

　なんだろうこの子、マジで一体なんなんだろう。

「い、いやだから、ちょっと……。あ、あれ、おかしいな、悪行ポイントが加算されない……。おいあんた、本気で嫌（いや）がってないだろ。ちょっと見てくれるだけ

でいいんだって！」
　必死になって説得するが、少女は耳を塞いでイヤイヤとばかりに首を振(ふ)り、
「いやあああ！　見るだけだなんて、いやあああああああああ!!」
「見ろおおおおおおおおお!!」
「――ならば、私が見てやろう」
　わけの分からない少女の扱(あつか)いに困っていた俺は、背後から聞こえた声に安心して振り返った。
「なんだ、そんなに見たいのか!?　なら見せてやろう、俺のこの……」

そこにいたのはスノウでした。

「俺のこの……、なんだ？　続けてみろ。何かを見せてくれるんだろう？」

俺が絡(から)んでいた少女を逃がし、可哀想(かわいそう)な物を見るかのような目を向けてくるロゼの隣(となり)で、スノウはこれ以上にない冷たい無表情で腕(うで)を組んで立っている。

「……ごめんなさい」

蚊(か)の鳴くような俺の声。

「別に謝らなくていい。今から何かを見せてくれるんだろう？　見てやろうと言っている。おいロゼ、そこの酒場からギャラリーをたくさん呼んできてくれ。今からこいつが何かを見せてくれるそうだ。さあ、見せてみろ！　その、粗末(そまつ)な物をじっくり見てやろう！」

「謝るから許してください！　でも粗末な物ってとこは訂正しろよ!!」
「――で？　お前が人間として失格で、バカで変態でどうしようもないのはよく知っているが、一体何がどうしてこうなった。納得いく説明をしてみろ」
　俺は人気のない路地裏で、スノウの前に正座していた。
「そ、その……。これは魔王軍に対抗するための備えというか……」
「……お前、ひょっとして私を真正のバカだと思っているのか？　もう少し言いわけを考える努力ぐらい見せろ」
　言ってスノウは腰の剣に手をかけて……。
「違うから！　嘘ついてないから本当に！　これは必要な事なんだって！　なんなら家にいるアリスに聞いてみろ!!」
「バカか貴様は！　何をどうトチ狂ったら、貴様の変態行為が魔王軍に対抗

「バカか貴様はー！　何をどうトチ狂ったら、貴様の変態行為が魔王軍に結びつくのだ!!」
　畜生、正論言いやがって！
　でも、確かにこんなもんどう説明したらいいのやら……。
「本当なのにー！　俺嘘ついてないのに、本当なのにー!!」
「もういい黙れ！　あれほどシリアスに別れたのに、色々と悩んだ時間を返せ！　真面目に落ち込んでいた私がバカみたいじゃないか！」
「た、隊長もスノウさんも、落ち着いてください！　そ、それより！　隊長は、どうして隊長を辞めたんですか？　スノウさんに聞いても教えてくれなくて……」
　慌てたロゼが剣を抜きかけたスノウを止めに入る。
　ていうかコイツ、俺達が出てった理由を誰にも話していないのか。
「スノウのセクハラが日に日に酷くなっていくのに耐えられなくなってな。コ

イッ、廊下ですれ違う度に俺の尻を触ってくるんだ。城の連中にはそんな感じで広めといてくれ」

「人を何だと思っている、バカなデマを流すな！　もういい、この男と話していると私まで頭が悪くなる。今回だけは見逃してやるが、もしまた変質者の噂を聞いたら次はないと思え！」

　スノウはそう言って踵を返し……。

　俺はその背中に向けて、

「近いうちに魔王軍が攻めてくるって聞いたぞ。超強い俺の助けが欲しくなったら、今まで調子こいてごめんちゃいって、媚びを売りながらお願いしろよ！」

「誰が貴様に助けを乞うか！　相変わらず人を怒らせる事だけは天才的なヤツめ、今度こそ叩き斬ってやろうか！」

カッとなって振り返ったスノウが思わず腰の剣に手をかける。
「大体貴様、私の前に姿を見せるなと言ったのに、なにをひょっこり現れているんだ、バカ！」
「お、お前が勝手に俺の前に湧いてきたんだろうが、バーカバーカ！」
「二人とも子供じゃないんですから落ち着いてください！　ほら隊長も、スノウさんも！」
　喧嘩する俺達を、ロゼが必死に止めようとするが、
「ロゼ、こいつはもう隊長ではないのだからその名で呼ぶな！　もういい、行くぞ！」
　スノウはそう言い捨てて、再び俺に背を向けた。
「お前なんか怒り過ぎて脳の血管切れればいいのに」
「なにおっ！」
「二人ともいい加減にしてください！　さもないとかじりますよ！」

「二人ともいい加減にしてください！　さもないと先生に言います！」

4

数日後。

「いたぞ、チャックマンだ！」

「おいチャックマン！　チャック下ろして見せてみろよ‼」

街を行く俺の背に、子供達がはやし立てながら石を投げる。

「ほら見て、あれが例の……」

「……ねえねえ、声かけてみる？　チャック下ろすかもしれないよ⁉」

学生と見られる女の子達が、遠巻きにヒソヒソと噂をしている。

「あ、あの……、これと、これを……」

そういう全てをなんとか無視して、串焼き屋のお姉さんに注文を。

それら全てをたんと大無礼し、串焼き屋のお姉さんに注文を

「はい、トカゲ肉とネズミ肉の炭火焼きですね。合わせて銅貨六枚になります」

　俺はお姉さんに金を渡そうと手を出すと……、

「キャッ！」

……………………。

　硬貨を手に立ち尽くしていると、お姉さんが申し訳なさそうに、しかし半笑いの表情で。

「ご、ごめんなさい。その……。チャックが開いて、そこからお金を渡してくるのかと」

「――うわあああああああ！　アリス、聞いてくれよー！　街の連中が酷いんだよ！」

俺は泣きながらアリスの部屋に駆け込んだ。
「どうしたんだいチャックマン。チャックに皮でも挟んだのかい?」
「チャックマン言うな!」
俺はスノウが手配した人相書きにより、この近隣では有名な変態としてもてあそばれていた。
窓の外から声が聞こえる。
「チャックマーン! おい出て来いよ! チャック使った手品見せろー!!」
「くっそガキがぁー! 皆の前でパンツ下ろしてノーパンマンとしてデビューさせてやる!!」

走り出そうとする俺を、アリスが紙に何かを書きながら引き止める。
「やめておけよチャックマン。今問題起こすと本当に逮捕されるぞ」
「チャックマン言うな!!　ちくしょう、魔王軍と戦うためにやってる事なのに——!」
そう、アレは悪行ポイントを貯めるため、仕方なくやった事なのだ。
「しかし、今の内に悪行ポイント貯めてこいって言ったのは自分だが、まさかあんな行為で貯めようとするとは思わなかったよチャックマン」
「チャックマン言うな!!　この街の連中も覚えてろよ、全部終わったら俺が只の変態じゃなかったって知らしめてやる!」
「一応変態の自覚はあるんだな。……よし、大体できた」
アリスは、地図や書物を机に並べ、改めて俺に向き直った。
俺は買ってきた串焼きをかじりながら、アリスの向かいの席につく。

「基本は対人地雷を大量に。大型の魔物用に、対戦車地雷もいくつか取り寄せようか」
　ここ数日で稼いだポイントを、どう使うかはアリスに任せた。
　自分で決めてもいいのだが、自称高性能の判断を信じてみたのだ。
「現在のポイントが五百と少し。切り札って事で、二百ポイントほど残しときたいとこだ。三百ポイント消費して、対戦車地雷三つと、残りは対人地雷を送ってもらおう」
「地雷にポイント使う日がくるなんてなぁ。貴重なポイントが勿体ねえ……」
　本来なら悪行ポイントは、通常では手に入らない強力な武器を支給してもらうのに使うものだ。
　対人地雷は非常に安く、物によっては数百円だ。
「こっちの金貨送るから、それで地雷送ってくれって言っても無理かな？」

「無理だろうな。幹部連中は、お前への支援をケチってるってより、悪行を積ませたいんだろうよ。小さな事からコツコツと、やがて大きな悪事に手を染めて、最後は立派な幹部候補に、ってな」

　まあ、地球にいた頃からそんな節は確かにあった。

「俺が大悪事を働けるほど度胸のある人間だと思ってんのかな、あの人達は」

　俺は三人の最高幹部の顔を思い浮かべ、軽いため息を吐き出した。

「ヘタレな割にはここ最近のポイント貯め、頑張ったじゃないか。変質者として手配され、スノウに釘刺された以上、もうこの手でポイント稼ぎはできないが……。それでもこの短期間で、しかもあのみみっちい悪事だけで、よくこれだけポイント稼いだな」

「ねえ、お前褒めてんの？　貶してんの？　どっちなの？」
　アリスが、転送してもらう装備をメモに書いていきながら。
「よし。では、我々の今後の動きを確認するぞ。勇者不在の今、魔王軍がここに攻め寄せてくれば、魔王側に軍配が上がる。これは我々にとって最悪だ。このアジトを放棄しなきゃならなくなるし、この近辺で一番大きいらしいこの国が崩れたら、魔王軍の勢いは止まらなくなるだろう。そのままの勢いで他国にまで攻めてこられたら、どこに引っ越したとしても、のんびり装置の組み立てをして安定させる暇もなくなるだろうな」
　勇者とやらは一体どこをほっつき歩いてやがるんだ。
「装置組み立てと安定には、一月かかるんだっけ？」
「ああ、本気で急げば三週間ってとこだが、極力安定させたいからな。不安

定な状態での転送なんて二度とゴメンだからな。念のため一月で見てもらえるとありがたい」

　あれっ？

「なあ、二度とゴメンだって、まさかとは思うけど一回目の転送は俺とここに来た事を言ってるんじゃないよな？　ていうか、俺がここに無事転送される確率って、本当はどれぐらいだったんだ？」

「てなわけで、王国軍には今回の侵攻をなんとしてでも追い返してもらい、その後も我々が安全に組み立てできる環境を維持して貰わないといけない。しかし現状では、我々もなんらかの形で介入してやらんと負けるだろう。頼みの綱は勇者とやらだが、そいつが駆け付けるまで時間を稼ぐ必要がある。……よって我々は、地雷や罠を設置して、足止めのためのゲリラ作戦を仕掛ける

戦を仕掛ける」
「おい、答えろよ。実は結構危なかったんじゃないのか？　どうなんだよ。
……しかし、ゲリラかー。久しぶりだなぁ。俺が参戦したゲリラでは、ちまちま罠とか仕掛けてたな。森林戦で大活躍だった、怪人トラ男さんとカメレオン男さんは元気かなー……」
　あの二人がいてくれれば、今回の戦闘はきっと楽勝だっただろうに……。
「キサラギに現状を説明して、手の空いてる連中を何人かでも送ってもらえればいいんだがなぁ。幹部連中は部下を捨て駒みたいに使うのは好かんから、向こうへの帰還が確実に可能な状態にならないと、援軍の許可は下りないだろう」
「俺、安全がしっかり確認されてたわけでもないのに、ここに送り出されたたんだけど」
　アリスは俺の言葉など聞こえないかのように地図を広げた。

「よし、敵の侵攻ルートを割り出すぞ。まあ、この辺りの地形と敵の規模を考えれば、考えるまでもないんだが……」

「……おいアリス、俺ひょっとして幹部連中に嫌われてるって事はないよな？　な？　大事にされてるよな？　幹部候補だもんな？」

アリスは俺の言葉をガン無視しながら立ち上がる。

「ふむ、人間の猟師が迷い込まなそうな、ここに地雷を埋めに行こうか。我々にできる事なんてたかがしれてるが、勇者様が帰還するまで、せめて魔王軍の先行部隊を少しでも削っておくぞ！」

「おいアリス、何とか言ってくれよ！　なあ！　なあ‼　なあー‼」

その翌日。
「――よし、これでいい。偽装は完璧。おい六号、こっちは終わったぞ。とっとと次の穴を掘れ」
鼻歌交じりに地雷を埋めるアリスの言葉に。
「……ハァ……ハァ……ハァ…………」
作業で疲れ果てた俺は、言い返す事もできないでいた。
とうとうシャベルを放り投げ、そのまま地面にへたり込む。
「お、おま……、俺はお前と違ってずっと動けるわけじゃねーんだぞ。ちょ……休ませろ……」
時刻は現在昼に近い。
作業を始めたのが夜明け前。

その間俺は、休憩もなしにひたすら無心で穴を掘り続けていた。
「そんな事言っても、ここはすでに魔王軍の活動範囲だ。今は昼間だ、いつ連中に見つかってもおかしくないぞ。あと少しで全部終わるからもうちょい頑張れ」
　アリスの言葉に俺は重い体を無理やり起こすと、シャベルを手に取り再び作業へ。
「大体、疲れないお前が……穴掘ってくれれば……いいんじゃねーのか……そして俺が地雷埋めてった方が……効率いいだろ……」
　息を弾ませ愚痴をこぼしながら掘る俺を、アリスはその場に膝を抱えて眺めながら。
「念のためだよ、魔王軍には鼻の利く魔物もいそうだしな。人間のお前の手で地雷に触ると、人の匂いで発見されてしまうかもしれん。穴掘るだけなら、この匂いも時間が経っていて、これなら地雷の位置までは探れないだろ

ら、この辺一帯に匂いが残っていたとしても地雷の位置までは探れないだろ。そして、王国へ続く道はここを避けて通れない。迂回もできない以上、ここを突っ切る他はないからな。……大体お前、地雷埋めた位置はちゃんと覚えていられるのか？　戦争が終わったら地雷の撤去は基本だぞ」

「……なんか強制労働させられてる気分だ……」

ふと思いつき、俺はアリスに声をかけた。

「おいアリス、地雷一個だけ残しといてくれ。ちょっと考えがあるんだ」

不思議そうにこちらを見るアリスに、俺はポケットから取り出した物を見せつける。

それは、いつか炎のハイネから取り上げた魔導石。

「地雷の信管の上に、これに重り付けて載っけておこーぜ。売るか壊すかしようかと思ってたんだがいい機会だ」

「いくらなんでも、そんな見え見えの罠に引っかかるほどアホだとは思えん

のだが。部下に取らせるとか考えるだろうに。ハイネが最初に発見する可能性の方が遥かに低いし、魔導石が万一敵の手に渡る事を考えたら、破壊してしまう方がいいんじゃないか？」

そう言ってしげしげと石を眺めるアリスだが。

「いいんだよ。他の魔物が取ろうとしたら最低でも一体は巻き込めるんだし、石はその時に壊れるだろ。それに万一ハイネが見つけて、嬉々として取ろうとした魔導石が目の前で爆発した時の顔を想像したら、もうたまらんものがあるだろ」

「……お前は相変わらずいい性格をしているなぁ」

――俺達が作業を終えて帰ると、昨日とは街の空気が違っていた。

行き交う人々が皆一様に青ざめており、表情は暗く、俯きがちな人々で溢れている。
「何かあったな。謎の変質者が世を騒がせた時でも、ここまで街の空気は悪くなかったぞ」
「なあ。あれ、もう忘れたいからやめてくんない？」
アリスにツッコみながらも、確かにこの雰囲気は気になるところだ。
俺はその辺を歩いているお姉さんに。
「あの、すんません。ちょっといいですか？」
「はい、なにか……ヒッ！　チャ、チャック……」
……………。
俺を見てビクリとして後ずさったお姉さんが、何かを言いかけ黙り込む。
「お姉ちゃん、連れの変態がごめんなさい。街の様子がおかしいけど、一体ど

うしたの？」
　俺から視線を離さずビクビクしているお姉さんが、無垢な少女に擬態したアリスの言葉に少しだけ警戒を解くと。
「え、ええ……。何でも、勇者様がね……。魔王軍の四天王、風のファウストレスとの戦いで、行方不明になったそうなのよ……。それで勢い付いた魔王の軍勢が、この街を目指しているって……」

「自分が仕入れてきた情報によると、勇者は敵四天王の一人と交戦の際、あと一歩のところまで追い込んだそうだ。ところが、敵四天王の風のファウストレスとやらが、勇者を巻き込んで、移動先を指定しないランダムテレポートという魔法を使ったらしい」

家に帰った俺達は、早速緊急の会議を開いていた。

「このテレポートってやつは、空間さえ繋がっていればどこにだって行けるそうだ。現在の移動先は不明。我々が最初に飛ばされた時のように、この星のどこかの上空かもしれないし、海の上かもしれないし、魔の大森林のど真ん中かもしれない。まぁ確率からいって生存は絶望的だろうな」

「勇者の顔も知らないが、気の毒なこった。俺も転送がうまく作動しなかったら似たような目に遭っていたかもしれないわけだしな。まあ俺の場合は、なんだかんだいって高い成功率が約束されていたんだろうが……」

他人事ながら、自分も同じ目に遭っていたかもしれないわけで、思わず勇者に同情してしまう。

「……………………そうだね」

「なあ、今の間は何？」
　本当に他人事じゃないんだが。
「それより、伝承だか伝説だかでは勇者が魔王を倒すんじゃなかったのか？　自分はそんな非科学的な事はあてにしてはいなかったが、今までは伝承通りに物事は動いていたと聞いた。それがどうしてこうなったんだ？」
「おい話ごまかすな、ちゃんと答えろ。……でも、確かに勇者が途中で退場するとかありえないよな。魔王が現れたり、勇者に紋章だのが現れるってところまでは、その胡散臭い伝承通りだったんだからさ」
　アリスは考え込むと。
「……おい六号、お前は勇者が出てくるゲームだの小説だのが好きなんだろ？　自分は娯楽系のデータは入力を除外していたから分からないんだが、そういった話は本来、どんな風に進んでいくものなんだ？　突然現れた

勇者が超人ぶりを発揮して、何の苦もなく無双していくのか？」
「うーん？　大概は一度ぐらい負けイベントがあるもんだ。強敵にやられた後、弱い自分を見つめ直して修行して、強くなってリベンジとか。まあ、起承転結の転ってゆーか、一度くらいはピンチになるな。その、一度くらい訪れるピンチが、今回のランダムテレポートだってのか？　勇者は、テレポートで飛ばされた先の何処かで修行していて、この国のピンチの際に強くなって帰って来るって？」
　飛ばされた所で謎の爺さんとかに出会い、必殺技を伝授されて帰ってくる。
　飛ばされる云々はともかく、漫画でも何でも敗北を知り強くなるってのは物語の基本だ。
　だが、アリスは小さく首を振ると。

「……いいや、多分違うな。勇者はすでに一度敗北を味わっている。あの、ダスターの塔の二人組のボス相手にな。本来なら、連中に負けた勇者はリベンジするために修行して、そのまま風のなんとかいうボスも、修行で覚えた必殺技などを使って圧勝できたんだろう。実際、あの時塔を攻略に行った王国の戦力では、我々がいなければ塔を攻略できたとは思えない。王国軍ですら敗北した強敵に、勇者一行が打ち勝ち、人々に希望を与え、勝利していく。ところが……」

「……もしかして、本来なら勇者がリベンジして塔を攻略するとこを、俺が現れて横から攻略しちゃったから、勇者の伝承とやらがおかしくなってるって事か？　やめろよ、俺のせいみたいに聞こえてくるじゃん。そ、そんなもんで伝承とやらが歪むとかないよな？　……おい、お前は高性能なんだろ？　何か手はないのかよ！」

なんだか大変な事をやらかしてしまった気がしてきた俺は、アリスをゆさ

ゆさと揺らしながら訴えた。

「……あるといえば沢山あるが。手段を問わないって前提ならな」

「聞こうじゃないか」

アリスがピッと指を立て。

「お前は、短時間で大量ポイントをゲットできる凶悪な悪事をやらかしてこい。自分は、通常なら支給が禁止されている、細菌兵器や化学兵器を転送してもらえるよう頼んでやる」

…………。

「ほ、他には？」

俺の目の前にアリスが二本目の指をピッと立て。

「自分が単騎で魔王の城に乗り込んで、適当なヤツを挑発して攻撃を食らい、内蔵されてるちょっとヤバイ動力源を暴走させる。そして魔王城ごと敵

をすべて消滅させるとか」
「却下だボケェ！　もっと穏便な方法はないのかよ！」
　だがアリスは、三本目の指を立てる事なく。
「ないな。そろそろ準備を終えて攻めてくるだろう魔王軍を、万が一防げたとする。だが、こちらはそもそも戦力で劣っているんだ。切り札だった勇者がいない今、何度か侵攻を防げたとしても、焼け石に水ってやつだ」
「……となると、俺達に残された手段は……」
　俺とアリスは頷き合うと。
「「バックレるか」」
　いさぎよく諦める事にした。

「おい、俺のお気に入りの枕、なんで置いてくんだよ！　お前の大量の荷物はなんなんだ、俺の枕を積んで代わりにそれを置いてけ！」
「バカか、自分の荷物はどれも大変価値がある。それこそお前の小汚い枕が山ほど買える代物ばかりなんだぞ」
　俺とアリスは持っていく荷物をまとめながら、この街から脱出する準備を進めていた。
　この国はもうダメだ。
　色々と思うところもあるが、やはり人間、一番大事なのは自分の命だ。
　なに、俺の関係者は皆強いから、きっと生き残る事だろう。
「おいアリス、組み立てた転送機はどうするんだ？　あれってまだ使えないんだろ？」

「一応地球に繋がってはいるんだが、まだ移送空間が安定しない。ほんの僅かな誤差でも、この星と地球との距離を考えると大惨事になりかねないからな。自分達は上空に転移できて幸運だった。転送してみたら海底でしたじゃシャレにならん」

　なんか、聞けば聞くほど俺がこの星に来れたのは奇跡だったんじゃないかと思えてくる。

「……大丈夫、この星への転送座標はキサラギの天才達が長い時間をかけて念入りに導き出したからな。だから、ちゃんとパラシュートを装備していっただろ？　こういうのは最初の転送が難しいだけで、後は自分がいればどうにでもなる。転送機は置いていこう。他にアジトを手に入れて、そこに新しい部品を送ってもらう」

「俺の考えを読むなよ、そんな言葉じゃごまかされないからな！　だったらもっと低いところに送れたはずだろ！」

と、俺達が逃げる用意をしていた、その時だった。

玄関のドアをノックする音と共に、誰かの呼び声が聞こえてくる。

だが、この家に訪ねてくる知り合いなんて、俺達にいるわけがない。

となればもちろん……！

「野郎、この忙しい時にまた来やがったのかクソガキが！　全裸に剝いて女子トイレに放り込んでやる！」

俺がドタドタと階下に降り、勢いよくドアを開けると――！

「お久しぶりです六号様。お話があって参りました」

そこには、多数の兵隊を引き連れたティリスが、ニッコリと笑みを浮かべていた。

――城の最上階にあるティリスの部屋。

「お断りします」
　半ば無理やりに近い状態で連れて来られた俺達は、ティリスの頼みを即断(そくだん)していた。
「……まだ何も言っていないのですが……」
　困ったような表情を浮かべ、ティリスが上目遣い(うわめづか)いで言ってくる。
　そんな甘えた眼(め)をしても無駄(むだ)だ。
　俺はスノウから聞いたのだ、アリスが予想した通り、この国の政治を牛耳(ぎゅうじ)っているのはティリスだと。
「どうせ魔王軍と戦えとか魔王軍を食い止めろとか愛人になれとかそんなんだろ？　残念だが、今の俺にそんな余裕(よゆう)はないんだよ、悪いとは思うが他を当たってくれないか」
「あ、あの……。最後の一つだけはよく分からないのですが……」

ここに連れて来られた時点で俺達を囲んでいた兵は解散した。
今この部屋にいるのは、ティリスと俺とアリスのみ。
じゃあ一体なんの話なんだと警戒(けいかい)していると、
「六号様。これが何か、見覚えはありますか？」
そう言ってティリスが取り出したのはリュックサック。

いや――

「パラシュートじゃん」
「おいバカ」
「なるほど、これはパラシュートというのですか」
思わず口を突(つ)いて出た言葉に、ティリスが耳聡(みみざと)く反応した。
アリスがしかめ面(つら)をしているが、コイツは一体どうしたんだ。

アーンたしため面をしているた、コイツは一体どうしたんだ
コレは確か、俺達がこの星に降り立った際に無用の長物となったため、荷物として持っていくのも邪魔(じゃま)なのでその場に放置したはずだが。
「コレは、謎(なぞ)の飛行物体が目撃された日に、現場近くに落ちていた物です。……私はコレが何に使う物かも分かりませんでしたが、六号様は名前まで知っているのですね」
にこやかな笑みを浮かべるティリスの言葉に、なんだか寒気を覚えてしまう。
なんだ、一体何を言いたいんだ。
「率直(そっちょく)に申し上げます。六号様は他国から来たスパイ、工作員ですね？」
ド直球をぶち込んできた。
「ちょっと何言ってるのか分かんないです」

「そうですか。では拷問に掛けるしかないですね」
「嘘ですすいません、スパイだって認めますから許してください」
「早いなオイ！　お前いくらなんでも、もうちょい根性見せたらどうだ！」
アッサリ陥落した俺に、アリスが思わずツッコミを入れる。
が、ティリスは俺達を咎めはせず、どこか楽し気に笑っていた。
「……えっと、俺達を捕まえないのか？」
そんなティリスに不審を覚え尋ねてみると。
「捕まえませんよ？　ただ、一つだけ。あなたにお願いがあるんです」
ティリスはそう言って、ジッと俺達を見つめてくる。
「二人は魔の大森林の外から来たと言いましたね？」
正確には、この星の外から来たのだが、間違ってはいないのでコクリと頷

く。
「謎の飛行体が目撃された後、二人はこの地に現れました。それはつまり、二人は空を飛ぶなんらかの方法があるという事。魔の大森林を抜けて来たというのも、それなら納得できます」
　ティリスはドヤ顔を浮かべているが、その推測は大体間違ってますよと言うのも気が引ける。
　そんな俺の考えもよそに、ティリスは真剣な眼差しで。
「この国は……。恐らく明日、滅びるでしょう。そうなれば、魔王軍は近隣諸国にまでも侵略の手を伸ばします。……そこで二人にお願いです」
「……聞こうじゃないか」
　俺の目を真っ直ぐ見つめ、
「この国の騎士達、兵士達の生き様を、最期まで見届けてあげてくれません

か？　そして、この国が存在した事をあなたの国に伝えてください。魔王軍と戦った彼らのために、この地には勇敢に戦った人達がいたと、伝えてください。そして、どうか魔王軍に対抗できるように、他の国々に一致団結するよう呼び掛けてください。……不甲斐ない私にできる事は、彼らの活躍を後世に残してあげる事ぐらいです」

　ティリスはそう言って、いずまいを正すと。

「どうか、お願いできませんか？」

　王族であるにも拘わらず、どこの馬の骨とも分からない俺に、深々と頭を下げてきた。

8

窓の外はすっかり暗く、辺りには虫の鳴く音が静かに響く。

今の時刻は既に二十時を回っている。
「まいったなー……。あんな真剣な顔で頼まれちゃ嫌だなんて言えねぇよ……。いっそこのまま逃げちまうか？　いや、逃げるのなら魔王軍が攻めてきて混乱してる時だよなあ……」
宿舎の風呂から上がった俺は、そんな独り言を呟きながらティリスの部屋に向かっていた。
「まあ……。いざって時は、ティリスがなんとしてでも逃がしてくれるって言ってたし……」
ティリスからは、街の外壁が破られ、中に魔物が侵入を始めた際には空から逃げてくれと頼まれている。

ぶっちゃけ俺のポイントだと航空機の類だなんて送ってもらうのには無理もいいとこなのだが。

……と、その時だった。

「あっ、隊長だ！」

風呂上がりの俺を目ざとく見つけ、声をかけてきたのはロゼだった。

こちらにぺこりと会釈(えしゃく)するロゼに車いすを押させながら、グリムが目を輝(かがや)かせ、

「隊長ってば、スノウからのセクハラに耐(た)えられなくなって辞(や)めたって聞いたけど、こんな所で何してるの？」

「グリム！　その噂(うわさ)は鵜呑(うの)みにするな、アレはこいつのデマだ！」

さらには、さっそく短気ぶりを見せるスノウまでがそこにいた。

「ティリスに頼(たの)まれて、明日までこの城に残る事になった。いざって時は脱出

していいと言われてるけどな」
「そうなんですか！　隊長がティリス様の護衛なら安心ですね！」
どうやらこいつらは、俺が護衛として雇(やと)われたと思っているようだ。
無邪気に笑うロゼに、あんな重い事を頼まれたとは言い出せず、そのまま否定もせずにいると、
「……ティリス様が自ら頼んだというのなら私は何も言えないが、違う意味で不安になってきたな……。いいか六号、私がいないところでティリス様にバカな事を吹(ふ)き込んだり、セクハラしたりするんじゃないぞ？　分かったか？」
「そんなに釘刺(くぎさ)されると、むしろやれって言われてる気になってくるんだが」
「止(や)めろ！　おい、冗談(じょうだん)で言っているんじゃないからな？　分かってるんだろうな!?」

俺はそんな三人に、気になっていた事を尋ねてみる。

「お前ら、明日はどこを守る事になるんだ？」

今までの小隊の時の待遇だと、最前線の真正面だとか言いそうだが。

「フン、心配するな。グリムもロゼも近衛騎士団の隊員だ。近衛騎士とは字の如く、王や姫など尊い身分の方を守る者。明日は都市の正門前に陣取って、最後の守りを任される事になるだろう」

知った顔が危ない所にはいないと知り、ひとまずは安心する。

「お前ら、明日は死ぬなよ。危なくなったら国なんてどうでもいいからとっとと逃げろよ？」

俺のその言葉に、

「バカな！　我々は誇り高き近衛騎士団！　逃げるぐらいなら玉砕を選ぶ！　そうだろう⁉」

「「えっ」」

ニャッ」」

………………。

「明日は、あたし達も頑張ります！　隊長も危ない時はティリス様を連れて脱出してくださいね！」

「私も、明日は頑張って起きてるから任せて！　まだ男も知らないのに絶対に死ねないわ！　絶対に生き残って素敵なお婿さんを迎えるの！」

「おいお前達！　えっ、て何だ！　の、残るよな？　私と最後まで、残ってくれるのだろう？」

この調子なら、こいつらは大丈夫そうだ。

「……なんだ、ニヤニヤと気持ちが悪いな。言っとくが、ティリス様に何かを頼まれたようだから見逃しているんだ。あの事が許されたとは思うなよ」

ほほえましく見守っていただけなのに、スノウが俺の笑顔を気持ち悪いと抜かしてくる。

「なんだあ？　いつまでもケツの穴のちっちぇーヤツだ。そんなんだからいつまで経(た)っても、炎(ほのお)のハイネにまともに相手をされないんだよ」
「こ、コイツ……！　貴様を城から追い出す事になった時、この二人がどれだけ心配したと思っている！」
　相変わらずの短気ぶりを見せるスノウに向けて、俺は小指で耳をほじほじしながら。
「はいはい、反省してまーす」
「…………」
　無言で剣(けん)を抜くスノウに向けて、俺は威嚇(いかく)の構えを取りながらジリジリと後ずさる。
「あはははっ！　隊長は相変わらずですね。明日どうなるかも分からないこんな時ですらスノウさんと喧嘩(けんか)ばかりして……。あたし、ようやく理

解しました。喧嘩するほど仲が良いって言いますし、もう二人は止めない事にしますね！」

笑い声を上げながら、ロゼが楽し気に手を叩く。

「この二人のイチャイチャが鬱陶しいわね。……ああ鬱陶しい、呪詛でもかけてやろうかしら。スノウときたら隊長が出て行った後、あれだけ落ち込んでいたくせに。今日はやけに元気になったわね」

「言われてみればそうですね。スノウさんが何だか生き生きしてます」

「よし分かった。お前達三人、まとめて相手をしてやろう。明日の戦いの前哨戦だ、お前達のような厄介者はこの私が躾けてやる！」

気短な女はそう言って、まずは手始めとばかりに俺に向かって斬りかかる。

そんなスノウを止めもせず、一体何が楽しいのか、ロゼはニコニコしながら

言ってきた。
「あたし、やっぱり隊長が隊長やってる隊が一番好きかもしれません。何だかちょっと落ち着くんです」
「まあ、私も嫌いじゃないけどね、隊長はセクハラが酷いけど、その代わりによく奢ってくれるし！」
そんな呑気な声を聞きながら。
「どうでもいいからコイツを止めろ！　敵が攻めてくるのに同士討ちしてどうすんだ！」
平穏な夜は更けていった――

最終章

戦闘員、派遣します！

1

城の眼前に広がるグレイスの城下町。

それを守るように正門に陣を構えた騎士団に、将軍が大声で呼び掛けていた——

「諸君！　勇者殿が行方不明になった事はすでに聞き及んでいるだろう。失意の底に落ちた者、あるいは絶望の淵に落ちた者が多くいるだろう。だが、勇者殿はここにはいない。我々が国を守り、民を守り、[illegible]

が、勇者殿は死んだのではない！　我々が国を守り、民を守り、じっと耐えて待ち続ければ、我らの最後の希望、勇者殿は帰還するだろう！　この門を守り、国を、家族を守れ！　誇りを守れ！　さあ、今こそお前達の出番だ！　魔王軍に、恐れるべきは勇者殿だけではないと知らしめるのだ!!」

　将軍の演説に、僅かなりとも士気を奮い立たせ歓声を上げる騎士や兵士。

　その様子を、自室のバルコニーから憂いを帯びた表情で見守るティリスが呟いた。

「……六号様。果たして、敵はどう動くでしょうか……？」

　ティリスに問われた俺はといえば……。

「本当なんだって！　俺見たもん、ユニコーンが額の角で、女の子のスカートめくるのを！　世話をしてた騎士の子が被害に遭ってたんだよ！　ユニコ

ーンなんてロクなもんじゃねえよ、絶対中におっさんが入ってるぞ！」

「分かった分かった、その事についてはまた後で聞いてやる。自分は今、この状況（じょうきょう）を向こうに伝えて少しでも便宜（べんぎ）を図（はか）ってもらえないかと手紙を書いてんだ、邪魔（じゃま）すんな」

　先ほど厩舎（きゅうしゃ）で見かけた衝撃（しょうげき）的なシーンを説明するのに忙（いそが）しかった。

「あ、あの、六号様……」

「どうせあの冷血な幹部連中は特例なんて認めないって。それよりちゃんと聞けよ、これって結構大事な事だぞ!?　ユニコーンいるならこの国には馬もいるだろ、なら馬でいいじゃん！　ドスケベで面倒臭（めんどうくさ）い性質のユニコーン使わなくてもいいじゃん！」

「そんな事を自分に訴（うった）えられても知るか。生態系を色々調べてるが、ここに

は進化の過程が見えなかったりと不可解な例がたくさんある。神話や伝承に出てくる生物がなぜ多数存在するのか、疑問を挙げればキリがない。そもそも、魔法やら呪(のろ)いやら不条理極(きわ)まる現象についてもだな……」

俺からすればお前の存在も中々に不条理だと言いたいとこだが。

「…………魔法に興味があるご様子ですが、簡単なものなら私も使えますよ？」

「マジで？　見せて見せて！」

「おっ、それは自分も見てみたいな」

相手にされないのが寂(さび)しくなったのか、こちらの興味を惹(ひ)こうとするティリスと俺達をよそに。

王国の騎士達は、じっと魔王軍の来るのを待ち続けていた。

「――さあお前ら、気合い入れて行くんだよ！　今こそあの国を支配下に置く時だ！　勇者はいない！　もう、あたし達の邪魔するヤツは……」

魔物達に檄(げき)を飛ばしていた炎のハイネが、ほんの一瞬(いっしゅん)言葉を止めた。

　ある男の顔が頭をよぎったからだ。

　だが、頭(かぶり)を振(ふ)って、頭にこびりついたその顔を振り払(はら)い。

「あたし達の邪魔をするヤツはもういない！　行くぞお前ら！　人間共に、魔王軍の恐ろしさを見せてやれっ!!」

　その言葉に、今や王国軍の倍近い戦力にまで膨(ふく)れ上がっていた魔王軍は、足を踏(ふ)み鳴らし、地響(じひび)きを立てて気勢を上げた。

「おいハイネ。これだけの魔物がいるなら、俺の虎(とら)の子のゴーレム達は必要な

かったんじゃねえのか？　もう勇者もいねえんだ、お前だけで充分だろ、あんなちっぽけな人間どもの王国ぐらいよ。……たとえお前が元の力を使えない、魔力の低い触媒しか持っていない状態だとしてもだ」

ハイネに対し、バカにしたように話しかけるのは、魔王軍の四天王、地のガダルカンド。

勇者という人類の希望が失われた今、人間は恐れるに足らずというのが今の魔王軍の考えだった。

士気が下がり、死人のようになった王国軍など、弱体化したハイネと勇猛果敢な大量の魔物達だけで充分だと思われているのだ。

「油断するなよガダルカンド。言っただろう、あたしを出し抜いたヤツがいるって。正直言って、あたしは勇者よりそいつの方が苦手だね。ただ強いだけの勇者と違って、何をやらかすのか分からないところがある。念には念を、だよ。あいつも、たった一体のゴーレムを倒すのにかなり手こずってたからね。

それが十体もいれば、流石（さすが）にどうしようもないさ」
「……俺のゴーレムをぶっ壊（こわ）したヤツか。おいハイネ、そいつは俺に殺（や）らせろよ。俺のゴーレムにやったように、その人間を粉々にしてやる」
ガダルカンドの言葉に、ハイネは小さくため息をついた。
こんな脳筋を頼（たよ）りにしないといけないとは。

……と、異変が起きたのは、その時だった。

先頭を歩いていたはずのゴーレムの一体が、突如轟音（とつじょごうおん）と共に砕（くだ）け散る。
「「なっ!?」」
ハイネとガダルカンドは、突然の出来事に驚愕（きょうがく）し。
「なっ、な……、何が起こった！　おいハイネ、あれか！　例の、ゴーレムを殺

ったって野郎が出やがったのか⁉　ここはまだ魔王軍の領域だぞ！」
　常に余裕たっぷりで、何事にも動じないガダルカンドが珍しく慌ててい
る。
　それを見たハイネは、逆に落ち着きを取り戻し、
「全員止まるな、的にされるぞ！　ゴーレムを粉砕するほどの高等魔法だ、
あんなものは遠距離から放てはしない！　魔法は、距離と威力が反比例
する。威力を高めたければ距離、距離を延ばしたければ威力を削らなきゃ
ダメだからな！　あの威力だ、敵は必ず近くにいる。探し出せ！」
　混乱しかけた魔王軍も、ハイネの素早い指示により、すぐさま落ち着きを
取り戻した。
　やがて魔物達が辺りに散らばり、敵の影を探し始めるが……。
　そこかしこで起こり始めた爆発の連続に、今度はハイネとガダルカンドが

戸惑った。
「おいおい、何だこりゃ！　高等魔法は、いつからこんな簡単に扱えるようになったんだ？　そこかしこで魔物が吹き飛んでやがるぞ！　敵はどれだけいるんだよ!!」
「ケルベロス！　ケルベロスを何匹か連れて来い！　臭いで敵を探り出せ！」
　ガダルカンドが叫ぶ中、ハイネが更に指示を出す。
「……ハイネ様！　ケルベロスに索敵をさせても辺りを軽く嗅ぐだけで、動こうとしません！」
「ガダルカンド様ー！　ゴーレムが！　ゴーレムがもう一体やられました!!」

「一体どういうこった！　ちきしょうテメエラ、警戒態勢だ！　常に周囲を見回して、少しずつ進軍しろ！　敵はどこからか俺達を狙ってやがる。注意を怠るな！　ゴーレムは後ろに下げろ！　これじゃ大事なゴーレムがただの的だ！」

焦りを滲ませたガダルカンドの叱咤に、ハイネは見えない敵を探そうと、敵の魔力を感知するために精神を集中させた。

……近くに、強い魔力が感じ取れる。

それは、強力だがどこか懐かしい……、

「……これは、あたしの魔導石の波長！」

という事は、自分から石を奪ったアイツがいる。

それで全てに合点がいったハイネは、魔物達も放り出し、魔導石の下へ駆け出した。

け出した

　そこに、石と共にあの男がいるはずだ。
「……何だと？」
　だが、向かった先に人の姿はなく、魔導石がぽつんと置かれているのみ。
　周囲を警戒し、人の気配を探ってみるが何も感じられない。
　恐る恐る石に近づきながらも、更に辺りを見回した。
「……そこにいるんだろう、六号？　これは何のつもりだ？」
　轟（とどろ）く爆音、魔物の悲鳴。
　それらが遠く聞こえるだけで、人の声はしなかった。
　目の前には魔導石。
　やはりどうやっても、人の気配は感じられない。
　これは、もしかして六号から自分への詫（わ）びの証（あかし）だろうか？
　勇者が行方不明になったため、今度こそ本当に魔王軍に寝返（ねがえ）りたいと

か？

なんにしても、真相は本人に会ってからだ。

「……あ……あたしの……あたしの、大事な魔導石……！」

ハイネは、長く魔力を込めてきた大切なソレを、嬉々（きき）として手に取っ……！

3

「さあ、いきますよ！　私の力では一度しか使えないので、よく見ていてくださいね！　水の女神（めがみ）の名の下に、顕現（けんげん）せよアクアンズ！」

《悪行ポイントが加算されます》

≪悪行ポイントが加算されます≫

「……おっ？」

「なんだ六号。どうかしたか？」

突然聞こえたアナウンスに首を傾げると、アリスがそれに反応した。

「いや、なんか今、急に悪行ポイントが増えたからさ。俺をチャックマン呼ばわりしたガキの家に、親に見つかるように投げ込んどいたエロ本がバレたかな？」

「……お前、子供相手に……」

とその時、バシャンという水の音が聞こえてきた。

「見ましたか？　今のが水の精霊を呼び出す魔法で……！」

そちらを見れば、ソファで荒い息を吐くティリスが、水たまりの前で満足げに微笑んでいる。

「ごめん、見てなかった」

「自分も見てなかった。すまんがもっかいやってくれ」

「ええ……」

なぜかティリスがどんよりと表情を曇らせながら、その場に立ち尽くす。

バルコニーから街の外を見てみるが、敵の姿は現れない。

すでに予想されていた魔王軍の到着予定時刻はとっくに回り、そろそろ十五時にさしかかろうとしていた。

「遅いな。もう今日は来ないんじゃねえ？」

「イヤ、きっと地雷原で足止め喰らってるんだろう」

そういやそんな物も仕掛けてあったな。

[illegible]

……しかし、このまま長引くのは好都合だ。

俺の拘束時間は夜の二十時までだから、それを過ぎたなら、俺が逃走しようが誰に何を言われる筋合いもない。

……そのまま更に待ち続け、いい加減街の前に展開し続けている騎士団もだらけ始めてきた頃。

遠く、街道の彼方から。

沈み始める夕日を背に、血走った目を滾らせた魔物の群れが姿を見せた

——

「——六号様、見てください！　第六騎士団の隊長が、果敢にも一人で敵陣に！」

戦場では先程から一進一退が続いていた。

大量の魔物達が押し寄せるが、数に劣る騎士達は上手く連係を組み、バラバラに攻撃してくる魔物を各個撃破していっている。

　あれだけピンチだなんだと言われていた割には、魔王軍と互角以上に渡り合っていた。

「何だよ、この分だと逃げなくても良さそうじゃないか。でもティリス、今回を無事に乗り切ったとしても、手の平返してスパイは処刑よとか言うんじゃないぞ」

「言いませんよ、そのような姑息な事は！　経費削減のためお二人で一部屋にしたりはしましたが、そのような信に反する事だけは致しません！」

「…………。」

「おい待てよ、俺とアリスが同じ部屋だったのは節約のためだったのかよ！」

「六号様はどのみち、明日にはこの城にいないのですから、済んだ事はよろしいではありませんか」
「よろしくねーよ！　コイツ可愛い顔してとんだ食わせもんじゃねーか！」
　俺とティリスが言い合う中、戦場を見ていたアリスが呟いた。
「……最前線の兵が崩れたな」
「ああっ！　な、なんて事……！」
　バルコニーにもたれかかっていた俺を押し退け、ティリスが食い付くように戦況を見守った。
　真剣な眼差しで果敢に戦う兵達。
　それらに祈りを捧げるティリスをよそに、暇を持て余した俺達は……。

「おいアリス、マルバツでもしよーぜ」
「なんだ、マルバツってのは」
　絨毯の上に紙を広げた俺達に、ティリスが何か言いたそうな表情で口元をむにむにとさせている。
「お前、何でも知ってるんじゃなかったのかよ。マス目を書いた紙にマルとバツを交互に書いて、先に五つ並べられた方の勝ちって遊びだ。やるか？　賭け金は金貨一枚でどーよ」
「お前、本気で言ってんのか？　人の脳みそで万が一にも自分に勝てると？」
　呆れた口調のアリスだが。
「お前は高性能なんだから、ハンデとして、俺は順番回ってきた時に置けるマルの他に、5ターン毎にもう一個マルを置けるルールな」
「おい、ふざけんな」

――それからどれだけの時間が経ったのだろう。
「ああ……！　とうとう、第四騎士団までもが……！」
「よし、自分の勝ちだな」
目の前に広げた紙に、アリスがキュッとペケを書く。
「おいおい、先に五本先取した方が勝ちってのはマルバツの基本ルールだぞ？　まだ一回しか勝ってないだろうが」
「おいこら、ふざけんな」
――徐々に辺りは暗くなり、戦闘中ではあるものの、あちこちにかがり火が焚かれ出した。
夜は魔物達に有利な時刻。
せめて視界だけでも確保しているのだろう。

だつしゅつ

「――六号様。そろそろ脱出の用意をしてください。いよいよ正門前に敵が迫ってきました」

覚悟を込めたティリスの声に、俺はふと顔を上げた。

「いよいよか。……分かった、俺達も準備をしよう」

「おい六号、お前の番だぞ。こんな不利なハンデ呑んでやったんだ、とっとと書け」

ティリスは腰を上げた俺を見て、困ったような、それでいて泣き笑いのような表情を浮かべていた。

「まったく、あなたは……。彼らの戦いをちっとも見ようとしないじゃないですか」

そんな顔で呆れたように言ってくる、ティリスに向けて。

信じてるからな。まだスノウやロゼ、グリム達が控えてる。あいつらは弱くない。なんせ……」

俺はニヤリと笑みを浮かべ。

「あいつらは、俺の部下だからな」

自信を持って、キッパリ告げた。

「オイ六号、もうどこに置いても詰みだから。諦めて、金貨よこせ」

4

「ロゼ、グリム！　敵はまだ離れているが、あくまで注意は怠るな！　強敵が来たらお前達が頼りだからな！」

そこかしこで悲鳴が上がり、戦いの音が響く中。
「大丈夫です、任せてください！」
「眠い……が、がんばれ私……！　これが終わったら、きっとスノウが大量のお酒を奢ってくれる……だからがんばれ……がんばれ私……も、もうすぐ完全に日が沈むから、がんばれ私……」
　頼りがいのある言葉を返すロゼと、あまり頼りになりそうにない様子のグリム。
　これが終わったら、飯でも酒でも幾らでも奢ってやろう。
　街の正門、騎士団の最後尾を守る私の下に、一人の兵士が駆け込んでくる。
「スノウ殿！　スノウ殿は!!」
　慌てた様子の兵士が私を見付け、青ざめた顔で声を上げた。

「ゴーレムが！　長時間の戦いで疲弊したところに、ストーンゴーレムが七体、騎士団の中央を強引に突っ切り、真っ直ぐこちらに向かっております!!」

ゴーレムが七体!?

「おいグリム！　呪いで何とかなる相手か!?」

カラカラと車いすの音を立てながら私の隣に出て来たグリムが、徐々にこちらに迫りくるゴーレム達をジッと見つめ。

「そろそろゼナリス様が活発になる時間帯よ。破壊は無理でも、足止めぐらいならなんとかなるわ！　それに街の防衛にかこつけて、ゼナリス様への贄のため、カップル達のペアリングを片っ端から徴収してもらったもの！」

日頃はちっとも役に立たないグリムが、今日に限っては誰よりも頼もしかった。

後半の徴収の件については、私は聞かなかった事にしよう。
「よし、全員グリムを守る陣形を取れ！　ハンマーやメイスを持っている者は、足止めされたゴーレムに殴りかかれ!!」
　と、部下に指示を下したその時だった。
「そうはさせないよ！　お前達は引っ込んでな!!」
　門の前まで迫り来る、七体のストーンゴーレム。
　その内の一体の肩に、魔王軍四天王の一人、炎のハイネが立っていた。
「よう、また会ったな。でも今はお前達に用はない。六号を出せ！　あの男に用がある」
　ハイネは身体のあちこちに傷を負い、酷く痛々しい姿をしていたが、その表情は苦しげでもなく、ただひたすらに怒り狂っている。

六号はここにはいない！　そして貴様の相手はこの私だ!!」
　叫ぶ私に、ハイネはその赤い瞳を、激しい怒りにぎらつかせ。
「お前じゃ力不足なんだよ！　あの男！　ここまであたしをコケにしたあの男は、絶対に生かしちゃおけない！　大切な魔導石をエサに、よくもやってくれたねえ!!」
　何の事だと訝しむが、あのバカがまた何かやらかしてくれたのだろう。
　ほんのちょっとだけ溜飲が下がる。
「力不足もクソもない、お前を六号の下へ行かせるわけにはいかんのだ。あいつはあいつで、なにやらティリス様から大事な仕事を頼まれたそうだからな。グリム！　やれ！」

「偉大なるゼナリス様、この石人形に災いを！　足裏を地に縫い付けられるがいい！」
私が言い終わるより早く、グリムが呪詛を放っていた。
グリムが握り締めていたペアリングが、邪神への贄となり光に包まれ消え去った。
呪詛を受けたゴーレムがその場から足を動かせなくなり、つんのめって倒れ込む。
それを見た周囲の兵が、思い思いの武器で袋叩きにして破壊した。
「偉大なるゼナリス様、この石人形に……」
「それ以上はやらせるか！　一等の魔導石は破壊されたが、今日は予備だって持っている！　お前程度ならこれで充分だ！」
ハイネが腕から炎を吹き出させ、グリム目がけて投げつけた。
だが、その前に立ち塞がる一つの大きな影。

と　その前に立ち塞がるのは小さな影
「偉大なるゼナリス様、この女に災いを！　炎の魔術を永続的に封じられるがいい！」
　ロゼに炎から庇われながら、大きな包みを膝に置いたグリムがハイネに指を突き付けた。
　邪神への贄である、膝に置かれた大量のペアリングが光と共に消失し。
　その文言を聞いたハイネはギョッと驚愕の表情を浮かべると、思わず目を閉じ、身を守るように顔の前で腕を交差させた。
「……………ふ、不発……か？　クソッ、脅かしやがって！」
　指先から炎を出し、ホッとした顔でハイネが吠える。
「あんたみたいな、存在そのものが男の目を集める淫売が、私は一番嫌いな

のよ！　もう少しだけ私に勇気があれば、反動を覚悟で乳がもげる呪いを掛けてやるのに！」
「な、何言ってんだか分かんないよ！　人を淫売呼ばわりすんな！」
しかし今の呪詛はかなりの圧力になったのか、ゴーレムの肩から降りたハイネはグリムを警戒して後ずさった。
グリムが呪いの反動で炎の魔法を封じられてもデメリットはない。
手元に大量の贄がある今、それが尽きるまでにはハイネの炎を封じる事が出来るだろう。
それに気付いたハイネが青い顔で警戒する、そんな中。
「何だぁ？　何遊んでんだよハイネ！　とっととその女を殺しちまえよ！」
横合いから現れたガダルカンドが。

「……あん？　お前、以前、殺した女に似てねえか？　……まあいいか。もう一度殺せばいい話だしな」
　つまらなそうにそう言って、手にした金棒を振り上げた。
　いつぞやの、頭を飛ばされたグリムの姿が脳裏をよぎる。
「お、おりゃー！」
　あまり締まらない掛け声と共に、ロゼがガダルカンドの頭にとび蹴りを放った。
「……おい、てめえ今、この俺に何しやがった？」
　攻撃を受けたはずのガダルカンドは、蹴られた箇所をポリポリ掻くと、その巨体に似合わぬ速さでロゼに飛びかかり、素手でロゼのこめかみを強打する。
　そのまま跳ね飛ばされるロゼに目もくれず、ガダルカンドはグリムの前に立つ私を見ると。

「……どけ」
一言、何の感慨（かんがい）もなく言い捨てた。
この魔物は。
この、魔王軍の四天王は、私の事を敵とすら見ていないのだ。
と、何かが燃え盛る音と共に、ガダルカンドの身体が炎に包まれた。
「ぐあっ！　このガキ、そういやてめえにはこれがあったなっ!!　おい雑（ざ）魚（こ）！　てめえじゃ俺に勝てねえのは魔物の本能で感じ取れるだろ。混じり者のお前は、どうせここじゃ冷遇（れいぐう）されてんだろ？　事が済んだら仲間に入れてやってもいい。分かったら、俺の邪魔すんじゃねえ！」
翼（つばさ）をはためかせて炎を散らし、ガダルカンドが振り返る。
そこには拳（こぶし）を握り締め、袖（そで）で口元のすすを拭（ぬぐ）う、こめかみから血を流したロゼがいた。

「え、えへへ……。か、勝てないのは分かってるし、混ざり者なのも事実だけど……。あたし、見習い戦闘員らしいんで、怖いけど戦わないわけにはいかないんですよ。あと……」

若干の怯えを見せながら、

「お爺ちゃんの遺言で、もしお前に仲間ができたら、絶対に見捨てるなって言われたもので……！」

そう言って、ロゼはガダルカンドに身構えた。

「そうか。じゃあいい。とっとと死ねっ！」

告げると同時に打ち下ろされた金棒が、ロゼがいた地面にめり込んだ。

距離を取るのではなく、あえて懐深くに飛び込んだロゼは渾身の力を

込めた拳を放つ。
硬質な物を叩く音が辺りに響き、ガダルカンドが顔を顰めた。
炎のブレスは溜めに時間が掛かるためこんな状況では使えないのだろう。
一撃必殺のガダルカンドの攻撃を紙一重で躱しながら、ロゼは何度も拳を振るった。
人の身を超えた戦いに、兵士や騎士も、援護すらできずに遠巻きに見ているだけだった。
——それは自分にしても同じ事。
自分より年下で、身体も小さく、ずっと不遇な扱いを受けてきた少女。
それが今、懸命にグリムを守るために戦っている。

ナタルナンドに対して私が参戦しても、かえってロゼの足手まといになる。

私の剣では傷も付かない事だろう。

となれば……。

最年少で騎士になったエリートなどと呼ばれておきながら、今は何もできない自分の無力さが情けなく思えてくる。

もう一人の四天王、ハイネはといえば、グリムの呪いを警戒しながらも、六号を探しているのかしきりに辺りを見回していた。

兵士達によって次々に放たれる矢も、周囲に吹き上がらせた灼熱の炎に遮られる。

「偉大なるゼナリス様、あの女に災いを！」

グリムがそう言って指さすと、ハイネは慌ててゴーレムの背に隠れ、

「こっちを指すな邪神崇拝者め！　ゴーレム、あたしの盾になれ！」

「ゼ、ゼナリス様を邪神呼ばわりするな！　オークに好かれる呪いを掛けるぞ！」

……覚悟を決めろ。

熱で身体が焼かれても、ひと太刀くらいは浴びせられる。

出世と金の事しか頭になかった私が、こんな土壇場になって騎士らしく死ぬ事になるとは皮肉なものだ。

柄を握る手が震えるが、これは武者震いだと自分に向けて言い聞かせる。

と、その時だった。

「何を考えてるのか知らないけど、それは止めときなさい。不死を司る大司教からの忠告よ。死ぬのは本当に辛いから」

覚悟を決めた自分に、ハイネを牽制していたグリムが珍しく真面目なコ

覚悟を決めた自分に、ノイズを遮断していた[illegible]ムが珍しく真面目な口調で呼びかけた。

それに続いて、私に背を向けたままのロゼが、ガダルカンドと対峙しながら。

「このままじゃ押し切られます！　スノウさんはティリス様の所に行って、避難するよう言ってください!!」

切羽詰まったその声に、自分が何を為すべきかを思い出す。

近衛騎士は王族を守るのが本来の務め。

ならば、近衛騎士である自分がティリス様を逃がしに行くのは一応は筋が通る話だ。

しかしそれは、わざわざ隊長である自分が言いに行く必要はない。

つまり……。

「私達なら大丈夫だからさっさと行きなさいな！　ティリス様を連れて他国に亡命するにしても、隊長だけだと不安でしょう？　スノウが目付役として付いていきなさい！」
つまりこの二人は、私に逃げろと言っているのだ。
なんてザマだ。
なんて無力だ。
昔は、他の者と一緒にこの二人を厄介者と見下していた私が、今はこうして逆に守られ、逃がされようとしている。

……打開策が一つある。

こんな時にどうにかできそうなヤツがいる。
しかし、アイツを追い出した私が、今さらどの面を下げて頼めばいい？

あの男が言った言葉が頭をよぎる。

『超強い俺の助けが欲しくなったら、今まで調子こいてごめんちゃいって、媚びを売りながらお願いしろよ！』

この二人を助けられるのなら、謝るぐらいは当然できる。

望まれるのなら媚を売るのもいいだろう。

だがこんな危機的状況で、あの男が助けてくれるのか？

そして他国の無関係な人間を、私達の戦いに巻き込めるのか？

葛藤する私の前で、四つんばいの体勢になったロゼが、尻尾をピンと立ててガダルカンドを威嚇する。

自分を守ろうとする小さな少女の背中を見て、何をすべきかを決意し、踵を返した。

「我が業火の海に沈むがいい……！」

そんな声を背中越しに聞きながら。

「永遠に眠れ！　クリムゾン・ブレスー！」

私は城へと駆け出した。

5

「――い、嫌です、私はここから動きませんから！　死ぬ時はみんな一緒です！」

城の最上階にあるティリスの部屋。

「いいから来い！　つーか、俺がなんで今の今まで残っていたか、その本当の理由を教えてやる！　お前はこの国が存在した事を伝え、他の国々に団結させてくれって言ってたな。そんなのは自分でやれ！　この国が滅んでも、王族の血を残す事ができればお前の勝ちだ！　血を残すための行為なら俺がいくらでも協力してやる！」

「今、最後にとんでもない事を言いませんでしたか!?　私はあなたの雇用主ですよ、バカな事を言ってないで下ろしなさい！　だ、誰か！　誰かー！」

荷物のように肩に担がれたティリスが叫ぶが、階下の連中はやってこない。

それもそのはず、実はこの城の王様に、ティリスを逃がしてくれと頼まれていたのだ。

ティリスの叫びは聞こえているだろうに、誰も駆け付けないのはそういう事だ。
しかしなんてこった、まさかあいつらがあれだけ苦戦するとは思わなかった。
あいつらは俺の部下だからな、なんてドヤ顔で言っちゃったよ。
これは勝てないわ、どうしようもない。
「よし、行くぜアリス!」
「がってんだ!!」
「待ってください! ちょっ、本当に下ろしてください六号様! というか、それでいいのですか!? 落城するという事は、昨日まで顔を合わせて話をしていたみんなが死ぬかもしれないんですよ!」
俺の肩に担がれたティリスが暴れながら訴(うった)えかける。
「バカ、こんな時はこう言うんだよ! 大丈夫……あいつらは、ずっとずっと

生きているさ……。そう、俺達の心の中に……」

「ではこれにて一件落着！　よし、もういいな！　本当にヤバイ、六号、急ぐぞ！」

「あなた達は本当に、どうなっているんですか――！」

俺は泣き喚くティリスを片手で抱えたまま、脱出のため廊下に出る。

そして下へと続く階段を降りようとした、その時だった。

「戦闘員、六号っ!!」

駆け上がってきたのは、髪を乱し、息も絶え絶えにしたスノウ。

スノウは俺の名前を呼んだ後、そのまま階段の前に立ち尽くしている。

スノウは俺の名前を呼んだ後、このまま階段の前に立ち尽くしている

「なんだよ、急いでるんだよ！　用件があるなら早く言え！」

「スノウ、この人を止めて！　私を下ろすよう言ってください！」

　俺とティリスの声を聞き、スノウは息を荒げ、俯いたまま言ってきた。

「ろ、六号、門の外には現在、六体のゴーレムと、炎のハイネ、地のガダルカンドがいる」

「知ってるよ、バルコニーからずっと見てたわ！　そこどけよ、ホントにヤバイって！　逃げるなら街の連中と一緒の方が、魔物に狙われる標的が散って助かる確率上がるんだよ！」

「ここまで言い切られると、お前、もういっそ清々しいなあ」

　慌てる俺とは裏腹に、スノウはポツリポツリと呟くように。

「あいつらは、私達の手に負えない。ロゼやグリムが時間を稼いでいるが、それも長くは持たないだろう」
　知っている名前を出され、思わずその場に足を止める。
「あいつらは、私なんかじゃ何もできない。私の事なんて眼中にもなかったんだ」
　俯いたまま、僅かに声を震わせながら。
「……私はずっと剣を振るい続けてきた。生まれや育ち、男女の差。色んな障害にも、そして誰にも負けないように、ずっと頑張ってここまできたのに」
　スノウのその独白を、どうする事もできずに聞いていると、
「今までの事ならいくらでも謝罪する。気の済むようにしてくれればいい。だから……」

スノウがバッと顔を上げ、縋るような目で頭を下げた。
「頼む！　お前の力を貸してくれ！　私にできる事なら何でもする！　金だって払う！　自分で言うのもなんだが、金に汚い私の全財産だ！　愛剣コレクションも含めれば相当の額になる！」
「おい六号、耳を貸すな！　もう行くぞ！　残りのポイントは、脱出の際の大量のスタングレネードやバイクに使うんだ。力を貸してやれる余裕はない！」
ちょっとだけ聞き入っていた俺はアリスの言葉で我に返る。
「この状況で金なんざいらねーよ、何でもするとか意味分かって言ってんのか！　知らねーよ、俺はもうただの一般人なんだからな！　それもお前のせいでそうなったんだぞ！　大体、泣き付いてくるのがおせーんだよ！　どこまで意固地なんだよ頑固女が！」
「スノウがここまで言っているのに！　あなたという人は、本当に見損ないま

した！」

俺の言葉に、担ぎ上げられたままのティリスが喚きだす。

ティリスの非難を無視し、そのままスノウの横を通り過ぎ、階段を降りようとしたその時。

俺の腕を、スノウが摑んだ。

「悔しい……。あいつらに、やられっ放しじゃ悔しいんだ……」

悔しい思いぐらい、俺だってたくさん味わった。

強力な力を持つヒーロー達に、何度蹴散らされたか分からない。

怪人みたいな破格の力も持たなければ、施された改造手術だって旧式の半端なヤツだ。

自分だけ甘ったれんなと言ってやろうと、俺が、こちらを見上げるスノウの顔に目をやると。

の顔[illegible]

——今まで、ほとんど弱気な顔など見せなかったこの女は。

その両の目に、涙(なみだ)を溜(た)めて。

「……お願いします。……隊長」

俺の事を、初めて隊長と呼んだ。

そして、まるで親に怒(おこ)られるのを怖(こわ)がる子供みたいに、小さな声を震わせながら。

「……隊長。……ロゼとグリムを、助けてください……っ！」

6

てっ

「お前ってヤツは本当に、最後の最後で悪に徹し切れない半端者だな。組織への所属年数は最高幹部に続くのに、だから未だに平社員なんだよ」
「う、うるせー！　そんな事分かってるよ、俺が甘っちょろいのもヘタレなのも、自分が一番知ってるよ！　いいからとっとと対物ライフル送ってもらえー！」
　ティリスの部屋のバルコニー。
　そこに戻った俺は、辺りがいよいよ暗くなる中、バルコニーの手すりを蹴り飛ばしていた。
「た、隊長！　門には行かないのか？　ここで、一体何を？」
　カルガモの雛のように後ろをついてくるスノウに向けて、ヤケクソ気味に声を荒げる。
「今更門まで走ってる余裕なんてねーよ、もうここから攻撃する！　……いつまで腕摑んでんだ、逃げねーからそろそろ放せー！」

「あ……っ！」

　その言葉にスノウは慌ててパッと手を放し、俺の破壊行為を眺めていた。

「六号様！　何をする気かは知りませんが、好きなようにしてください！　今のあなたはカッコいいですよ！」

　俺の破壊行為を眺めながら、なぜかティリスが嬉し気な声を上げている。

　狙撃しやすいよう遮蔽物を壊す俺に、アリスが叫んだ。

「……おい、どういうこった、ポイント足らんぞ！　二百以上はちゃんと残してあったのに、これじゃライフル呼ぶのに僅かに足りない。お前、ポイントを何に使った!?」

　あっ……。

「ええと、その、どうしよう……。いやほら、ここって娯楽が少ないだろ？　そ

れで昨日、夜中に……そ、その……な？」
「お前、呼んだんか！　大事なポイント使って、まさかエロ本呼んだんだんか！
この戦争前夜の非常時に、そんな物呼んだんか！」
　耳が痛い！
「しょ、しょうがねえだろ、夜中につい……！　だって、こっちにはコンビニとかないから！」
「ど、どうした!?　何か問題があったのか？」
　スノウの問いに、アリスが人間臭くため息を吐き。
「コイツは最後の最後まで三枚目だって事だ。……しょうがない、緊急事態だ。おい六号」
「おう」
　アリスはピッと階下を指さすと。

「下の階に行って、役立たずのクセにふんぞり返ってる王様を、ちょっと一発殴ってこい」
「行って来る」
「行くな！」
「やめて！　お父様が一体何をしたの⁉　スノウ、二人を止めて！」
俺を止めようと縋りついてくる二人に向けて、
「おいこら放せ、これは必要な事なんだよ！　冗談でやってるわけじゃねーんだって！」
「……それは、誰かを殴ればいいのか？」
その言葉を聞いたスノウが手を離し、
そう言って、俺の顔をジッと見た。
「あ？　まあ、殴るっていうか、相手が嫌がる事でもするっていうか……」
「……分かった」

スノウが、そう言って目をつぶる。
「私を殴れ」
「…………………はあ!?」
コイツいきなり何言い出すんだ。
「わ、私を殴れ！　……よく分からないが、それはお前にとって必要な事なんだろう!?　私を殴れ！　それかその……嫌がる事というのなら、わ、私の胸を揉むでも何でも好きにするがいい！」
真っ赤な顔で言い放つスノウの言葉に、その場の皆が静まり返った。
「い、いやその……、お、お前急にそんな……」
戸惑う俺に、アリスが囁く。
「やれ六号、時間がない！　殴るのに抵抗あるなら、もう、胸でも唇でも何

でもいっとけ！」

「い、いやだって、お、おま……」

アリスに背中をグイグイ押されスノウの前に立たされる。

顔を赤く火照（ほて）らせたままのスノウは、きつく目をつぶったまま一歩も動かない。

俺が両肩（りょうかた）に手を置くと、スノウが目をつぶったままビクッと震（ふる）えた。

その様子を、顔を赤くしたティリスが息を呑（の）んでマジマジと。

「……す、するのですか!?　ひょっとして、キスとかしてしまうのですか!?」

これ以上は見られないとばかりに両手で顔を覆（おお）ったティリスだが、そう言いながらも指の隙間（すきま）からしっかり見ている。

なんだコレ、この命が懸（か）かった緊急時に、どうしてこんな超（ちょう）展開に。

「やれ、六号！　ガッと！　もう、とっととチュッとしてそのままヌルッとやっ

てやれ！　早くしろヘタレ！　早く！」
　俺の後ろのアリスがうるさい、ついでに自分の心臓の音もうるさい、ああどうしようどうすれば、ってか何でティリスはガン見してんだお前お姫様だろエロガキが、スノウもちょっとぐらい動け、ってかほんとどうしてこうなったいや早くしないと中学生じゃねーんだキスぐらいでいや待てコレってポイント加算されんのかこの状況ってお互い合意になっちゃうんじゃねーのあああもう何が何やら分からなくいや絶対これキスしてもポイント加算されないし胸とか揉んで小さい声で、『んっ……』とか言われてもああああああああもうどうしたらああああああああああああああああああああああああああああああ
「ああああああああああああああああああああああああああああああああーっ!!」

自分の中で何かが切れた俺は、その瞬間（しゅんかん）ソレを一気に引きずり下ろした。

スノウの、パンツを。

スノウのスカートの中に手を突（つ）っ込み、パンツを足首まで下ろしていた。

その場にいた人々が。

いや、人間だけではなく、表情など変える必要のないアリスですらが、ぽかんと口を開けたまま止まっていた。

俺はその時のみんなの顔を、多分一生忘れないだろう。

《悪行ポイントが加算されます》

7

「いい加減、離れろコラ！　クソッ、うっとうしいんだよ！　おいハイネ、こいつを何とか引き剝がしてくれ！　肩に食いついて離れねえ!!」

　両手両足でしっかりと腕に摑まり、噛みついて離れないロゼを振り回し地に叩きつけながら、ガダルカンドが声を荒げる。

「もうちょっとガマンしな！　もうすぐこっちが何とかなる。おい、邪神崇拝者！　あんたの呪いは代償がいるんだろ？　さっきから呪いを発動させる度、その指輪が減ってるからな！　もう残り少ないじゃないか。お前らじゃ相手にならない、それよりとっとと六号を……」

　ハイネが何かを言いかけて、私に手のひらを向けると同時。

ゴーレムが突然上半身を粉砕され、その肩に乗っていたハイネが地面に転がり落ちた。

その場の皆が一体何が起こったのか分からずにいると、一拍置いて、遠くから音が響いてくる。

「なっ……なななな……」

尻餅をついたハイネが呆然としていると、また一体のゴーレムが上半身を撃ち砕かれた。

「何だこりゃあ！　ハイネ、どうなってやがる！　……おい、てめえはいい加減離れろっ！」

ロゼを腕から引き剝がしながら、ガダルカンドがハイネに尋ねた。

「分からない、分からないよ、こんな……こんな……」

またゴーレムが砕け散り、しばらく後に音が響く。

それはきっと遠くから。
音が遅れて聞こえてくるほどに、よほど遠く離れた場所から攻撃しているのだろう。
「とにかくここはマズイ！　てめえら、一旦空に上がれ！　そしてできるだけ速く飛び回れ！」
ガダルカンドが指示を出しながら舞い上がり、ハイネも空を旋回していたグリフォンを呼ぶと、慌ててその背に飛び乗った。
それと同時にゴーレムがまた一体砕け、一拍置いて音が鳴る。
「ガダルカンド、城だ！　城の天辺から攻撃されてる！」
「……はあ!?　あんな遠くから、一体何ができるってんだ!?」
ガダルカンドが叫ぶと同時、五体目のゴーレムが砕け散った。
それを見たガダルカンドが絶句する。

「……ガダルカンド、お前の部下は飛べる上に腕も立つ。何匹か強いのを集めろ！　城には強敵がいる、このまま空から乗り込むよ!!」

「……おいてめえらついて来い！　城に直接乗り込むんだそうだ、暴れるぞ!!」

ハイネとガダルカンドが空を舞い、そのまま城に向かっていく。

その瞬間六体目のゴーレムが砕け散り、残るはあと一体のみ。

「……行っちゃったね」

「……行っちゃったわね。でもまあ、隊長ならなんとかしてくれるでしょう」

ぽつりと呟くロゼに、微笑むと。

「……本当に？　本当に、隊長逃げないで何とかしてくれるかな？」

「…………た、多分」

やがて最後のゴーレムが撃ち砕かれると、辺りの兵士から歓声が上がった。
「凄(すご)いなあ……これ、隊長がやってるんだよね？　キメラのあたしが言うのもなんだけど、何なんだろう隊長って」
「本当に、不思議な人。……まあ、それより今は」
私は、自分の周囲を取り囲む数多くの魔物(まもの)を見回した。
ゴーレムや四天王がいなくなったとはいえ、数は圧倒(あっとう)的に向こうが多い。
私を守ろうとする兵士達と、魔物の距離(きょり)がジリジリ縮まる。
それを見て、ロゼが一声威嚇(いかく)した。
「キシャーッ！」
魔物達は僅(わず)かに怯(ひる)むも、そのまま距離を詰(つ)めていき……。
「うふふふふふふっ」

「[illegible]……」
　私は暗い笑みを浮かべると、キイキイと車いすを漕ぎながら、魔物達の前に出た。
「あはははははっ！　この世の全ての生命は、いつかは無に還るもの。……ですが、私は死と滅びの超越者。偉大なるゼナリス様の信徒にして大司教！　我が名はグリム＝グリモワール。さあ、死を恐れぬ者のみ来るがいい。我が呪詛の真髄を、その目に焼き付けてあげましょう！」
　私の突然の口上に、隣のロゼがギョッとする。
「いきなりどうしたの!?　ていうか、なにその口上！」
「いつも夜とか一人で暇だから、こういった時のために考えておいたの」
「何それズルイ！　あ、あたしも……。こういう時こそ、お爺ちゃんの痛々しい遺言じゃなく、もっとカッコいい口上を……！　ええと、我が名は口

ゼ！　……ええと……ええと……」

　もたもたと口上のようなものを並べるロゼの隣で、私は残り少ない神への贄を魔物達へ見せつけながら。

「さあ、不死と災いの神の力。とくとその身で味わうがいい！」

「うわーん！」

8

「フハハハハハハ！　俺無双！　俺無双！　楽勝じゃないか、魔王軍の連中は！」

　銃声が轟くと同時、遠く離れた地でゴーレムが粉砕される。

　というか、ちゃんと破壊されたのかは暗くて俺には見えないが。

「おいこら、笑ってないで力抜け。照準が合わせられん」
　その言葉に力を抜くと、アリスが銃身の先をちょいちょいと調整してくれる。
「よし、撃て」
　轟く銃声。
　それと同時にまた一体、ゴーレムが粉砕された。
　こんな闇の中、しかもこれほど離れた距離でゴーレムに当てる狙撃技術なんて俺にはない。
　そこで、暗視機能まで付いているらしい高性能なアリスに照準は任せ、俺はライフルを撃つ係になっていた。
「……す、凄い……。というか、何故今までこれを使わなかったのですか？　これがあれば、もっとこれまでの戦いも楽に勝てていたでしょうに」
　そんなエイリスの言葉に、

そんなライーンの言葉に

「俺はゲームとかで、良いアイテムと交換できるメダルとか集めても、なかなか景品と交換しないで大事に残しておくタイプなんだよ」

「だからお前はチャンスを物にできない上に、ちっとも出世しないんだよ。よし、撃て」

轟く銃声。

アンチマテリアルライフルの重い衝撃が体に響く。

「……一発撃つ度に、殴られたとこが痛むんだけど」

ぽそりと俺が呟くと。

「うるさい、死ね」

そっぽを向いて、膝を抱えて座っているスノウが吐き捨てた。

「……お前が何でも好きにしろって言ったんじゃないか」

「うるさい、死ね」

「うるさい、死ね」
「……よし、撃て」
　銃声が響き、最後のゴーレムが破壊される。
「よし、これでちょっとは楽になるか？」
「うるさい、死ね」
「まだ四天王の連中が残ってるんだが、姿が……。いや待て、ひょっとして空に浮かんでいるあれか？　自分が直接撃つならともかく、空中に浮いた不安定なものをお前に撃たせながらじゃ当てられないぞ」
「かといって貧弱なお前が対物ライフルなんて撃てば、どっかの部品がぽろっといきそうだもんな」
「うるさい、死ね」
　バルコニーから四天王を見ていたアリスが声を上げる。
「……おい。……おい！　連中がこっちに来るぞ、真っ直ぐここを目指して

る！　全員、急いで部屋に入れ！」
　グリフォンに乗ったハイネ、そしてガダルカンドとその他の魔物が、こちらに向かって風を切るように滑空していた。
　俺はライフルを肩に担ぐと、未だ膝を抱えて動かないスノウの手を取り、部屋に飛び込む。
「お前、もういいだろうが、中身見たわけじゃねーんだから！　ちょろっとパンツ下ろしただけじゃねーか！」
「うるさい、死ね」
　ガラスを砕く派手な音と共に、グリフォンと魔物達が突っ込んできた！
「――いやがったな六号！　お前は殺す！　ここまであたしをおちょくってか

らかってバカにし続けたヤツは、お前が初めてだよ！　この街に来るまでに多くの魔物を吹っ飛ばしてくれたのもお前だろ!?　それに、あたしの魔導石を目の前で破壊してくれたのも！」

　突入してきた十匹あまりの魔物達が気持ち悪い奇声を上げる中、怒り狂ったハイネが喚く。

「どっかで見た顔かと思ったら、女の死体を大事に抱えて泣き喚いてた野郎じゃねーか！　あの死体はちゃんと埋葬してやったのか？　それとも未練タラタラで屍姦でもしたか？　で、お前が俺のゴーレムを壊してくれたのか？　今からお前は、自分で喉にナイフ突き立てて死んだ方が、よほどマシだって目に遭うんだぜ。優しい俺は自殺するんなら止めやしねえよ。死ぬんなら、二秒待ってやるから死んでもいいぜ！　ほらいくぞ！　――！に……」

　ガダレクウンドが一方的に宣言し数を数え出したその瞬間、肩に担いでい

スタノスンーが一方的に宣言し数を数え出したその瞬間、肩に担いでいたライフルを構えぶっ放した。
危険を感じ取ったのか、銃口を向けられただけで飛び退いたガダルカンドの、その後ろにいた魔物が砕け散る。
魔物を撃ち砕いた銃弾は、そのまま部屋の壁に大穴を開けた。
それを見て奇声を上げていた魔物達がシンと静まり返る。
俺の右後ろの位置にはショットガンを構えたアリスが、左後ろにはスノウが抜き身の剣を下げて佇んだ。
そんな俺達の背後にはティリスが、毅然とした態度で逃げようともせずに見守っていた。
「どうされましたか！」
階下で魔物が雪崩れ込む音を聞きつけたのだろう、ドアの外からの兵士

陛下——魔物が雪崩れ込む音を聞きつけたのか？　城の外からの兵士

の問いに、魔物からは視線を離さないままスノウが叫ぶ。

「魔物が来た！　お前達は陛下を守れ!!」

そのやり取りを聞きながら、ガダルカンドはからかうような口笛を吹きならす。

「……おいおい、随分物騒な武器持ってるな？　ソレを向けられた時、なぜだかヒヤッとしたぜ。そいつは一体何なんだ？」

俺はガダルカンドから視線を逸らさず、単発式のライフルに装弾すると、

「……これは対物ライフルって言ってな、お前みたいな固そうなヤツを、遠くからでもぶっ殺せる素敵な武器だよ。……ちなみに頭の弱そうなお前がさっき言ってたあの女な、まだちゃんと生きてるぞ。さっき会っただろ、鳥頭かよ！　殺したと思い込んで何自信たっぷりに挑発してんの？　こいつ三下の臭いがプンプンするよ！」

俺の挑発に、ヘラヘラと笑みを浮かべていたガダルカンドから表情が消える。

「……お前、そんなに死にたいのか？　いいぜ、お」

「お望み通り殺してやるよ！　とか言うんだろ、聞き飽きてんだよ、そんなありふれたセリフはよぉ！　お前があの時グリムにやったように、こいつで頭を飛ばされたくなかったら、外にウジャウジャいる魔物引き連れてとっとと帰れ！」

そう言って銃口をゆらゆらと揺らめかせると、ガダルカンドは身を低くして身構えた。

「……おいてめえら、あの武器は連続で使えねえはずだ。きっと攻撃した後に隙ができる。そうでなきゃとっくに俺達全員をミンチにしてる。いいか、距

離を詰めて一斉に飛びかかれ。誰が殺られても気にせずいけ。そしてあいつの息の根を止めろ」
　この野郎、顔と図体（ずうたい）の割に知恵（ちえ）が回る！
「六号、雑魚（ざこ）は私が相手をする。お前は四天王を何とかしてくれ」
「お前、もう隊長呼びはやめたのかよ、パンツをいつまで根に持ってんだ。っていうか下がってろ、今から隊長の凄いとこを見せてやる。おいアリス！　Ｒバッソーを転送してくれ！」
「……はあ？　お前何言ってんだ、分かってんのか？　お前はもう……」
　アリスが何かを言いかける中、魔物達が動き始めた。
「六号、私だって他の魔物ぐらいは何とかなる！　多少はお前の助けになれるはずだ！」
　頑固（がんこ）に言い張り、俺の隣に並ぶスノウ。

ちょっとは素直になったかと思ったのに、こんな時まで意固地な女だ。
俺とスノウを囲む魔物が包囲を縮め、ハイネが手に炎を灯らせた。
グリフォンだけは身体が大き過ぎるためか、部屋に入れずバルコニーに待機している。
「アリス、早く！　早く頼む！」
俺の必死の呼びかけに、アリスはショットガンを置くとメモに何かを殴り書きした。
「お前、後でどうなっても知らんからな!!」
アリスの声をきっかけに魔物達が一斉に飛びかかる。
ガダルカンドに銃を向けるも、他の魔物のようにこちらに向かう事なく横に跳んだ。
代わりに俺は、手近な魔物に発砲し、それを仕留めた。

その隙を突いてか、俺を目がけ炎の塊が飛来する。
魔物の爪が戦闘服の表面を擦り、火花を散らせた。
飛びかかろうとする魔物の一匹を蹴りつけて、その反動で更に撃ち込まれてきた炎を避けると、一匹の魔物に銃身を掴まれた。
さらには横から二匹の魔物が殺到する。
「六号、首を縮めろっ！」
反射的に声に従うと、頭の上を何かが掠めた。
顔を上げると、二匹の魔物が顔面を切りつけられ、悲鳴を上げて怯んでいる。
「お、お前、俺が反応できなかったらどうなってたと思ってんだよ！」
泣きそうになりながらスノウに突っかかる俺にアリスが叫んだ。
「くるぞ！　六号、受け取れ！」

目の前の空間に青白い静電気が迸る。
それが収まった時、目の前には見慣れた武器が現れた。
銃身を摑まれたままのライフルから手を放し、空中に現れた武器を両手で受け取める。
早速ソレを起動させると、未だライフルを摑んでいた魔物に斬りかかった。
そいつは手にしたライフルで、俺の攻撃を受け止めようとするが。
高速で振動する刃物が、硬い金属を切り裂く音。
それと共に、受け止めようとした魔物をライフルごと、真っ二つに切り裂いた。

「……おい、お前、な、なんだよ、それは……。今、それをどっから出しやがった……」

そう呟いて唖然とするガダルカンドをよそに、俺を囲もうとしていた魔物達が崩れ落ちた仲間を見て後ずさる。

「これはな、対装甲車両切断用振動バッドソード、タイプRっていう、長ったらしい名前の切断機だ。お前みたいな雑魚を三枚下ろしにする時に使う武器だな」

ガダルカンドに答えながら、俺は何でも切れるチェーンソーと呼ばれる、通称Rバッソーを両手で構える。

原理はよく分からないが、エンジンで刃を高速振動させて、戦車だろうが何だろうがどんな硬いものでもサクサク切れる、キサラギが誇る武器の中でも特に俺のお気に入りの優れ物。

そのRバッソーの[illegible]、俺は戦闘服の端末に[illegible]を刺した。

そのRバッソーの外部コネクトを、俺は戦闘服の端末に突き刺した。
こうする事により、戦闘服の動力を更にRバッソーに追加できる。
たった一分間しか持たないが、この技で数多のヒーロー達を葬り去ってきた取って置きだ。

——これで、負けない。

「制限解除！」
その声を受け、俺の頭に響くアナウンス。
《戦闘服の安全装置を解除します。よろしいですか？》
「おい六号、お前それは、以前ゴーレム相手に使ったヤツだろう！　魔物がこれだけいて、しかも敵の幹部が二人だぞ！　それは……」
スノウが驚き、叫ぶ中。

「了承だ」

俺の言葉に対し、更に続けられるアナウンス。

《安全装置の解除を行うと、一分間の制限解除行動後、約三分間のクールダウンが必要となります。本当によろしいですか？》

「アリス！　お前も六号を止めろ！　こういうのはいつもお前の役目じゃないのか」

なおもスノウが叫ぶ中。

「解除を頼む」

俺の声に反応し、アナウンスがカウントダウンを開始した。

《安全装置を解除します。キャンセルする場合はカウントダウン中にキャンセルを唱えてください。10……9……》

全員がその場から、身動き取れずにいる部屋の中。

全員がその場から、身動き取れずにいる部屋の中

「戦闘員六号————!!」

俺に炎を投げようとしていたハイネにショットガンを突き付けた、アリスの声が響き渡った。

《6……5……》

カウントダウンが進む中、俺がそちらをチラリと見ると。

「やっちまえ!!」

親指を立てた相棒が、アンドロイドのクセに、いい笑みを浮かべて言ってきた。

た。
《──戦闘服の安全装置を解除しました》
「秘密結社キサラギ社員、戦闘員六号だ！　悪の組織は二つもいらねえ、てめえはここで消えやがれ！」
「かかって来いよ人間がァ！　砕いてオーガの餌にしてやるよ!!」
　待っているのに焦れたのか、こちらに一足飛びに突っ込みながら金棒を振るうガダルカンドに、俺は限界まで速度を上げて襲い掛かった！
「スノウ、お前は下がってろ！　こいつは必殺技でぶっ殺す!!」
　振るわれた金棒とRバッソーが交差する。
「!?」

ガダルカンドの握る金棒が真ん中ほどで易々と切断され、俺が振り下ろしたバッソーはそのまま威力を落とさずに、

「ちょ、おい、待っ！」

そのまま円を描くように、もう一度ガダルカンドに斬りかかる。

慌てて何かを言いかけ突き出した、ガダルカンドの右腕が宙を舞い、

「おっ、おいっ、六号!?　必殺技って何だ！　お前、ちゃんと周りを見て……」

焦ったように叫ぶスノウの声を聞きながら。

「えっ、ガダルカンド!?　おいお前達！　全員その男から、早く！　逃げ——!!」

俺は自分を軸にして回転しながら、目に付くもの全てを薙ぎ払った！

「うっうううううっ！　ううううううう！　つううううううううう

「ーっ……っああああ——っ！　ああああああ！　わああああああああああっ！」
　自分の仲間がRバッソーに巻き込まれミンチにされる光景に、ハイネが悲鳴を上げている。
　高速でぶん回しているためそれが誰なのかはよく見えないが、
「ちょ、六号、……、やめ……！　私まで死…………！」
　動き回るもの、黒いもの。
「ひいっ！」
　それが誰の悲鳴なのかも分からぬままに、その場にある目につく物全てをズタズタに切り裂いた。
　——戦闘服のクールダウンが始まり、俺が動けなくなった頃。

そこには、元はガダルカンドとその部下だった物が転がっていた。

「ああ……あわわわわ…………はわわわわわわ……」

部屋の隅には、腰を抜かしたようにその場にへたり込んでいるハイネの姿。

「……ぐすっ……」

俺の後方ではティリスがペタンと座り込み。

「お疲れー」

いち早く壁に避難していたアリスが機嫌良さそうに労う中、

「…………」

俺の傍では、額を絨毯につけて両手で頭を押さえたスノウが、亀の子のように丸くなっていた。

静かになった室内の様子を覗おうと、恐る恐る顔を上げる、涙目のスノウと目が合うと。
「……お……おお……おま、お前、お前！　六号、お前はなにを……！　死ぬかと……！　もう本当に、殺されるかと思ったぞ！　見ろ、この惨状(さんじょう)を！　一歩間違(まちが)っていたら、私もああなっていたんだ！」
「だから、必殺技使うから離(はな)れてろって言ったじゃん」
「……次からは、使う十秒前くらいに言って欲しい……」
涙目で鼻をぐすぐす鳴らして立ち上がりながら、スノウは未(いま)だへたり込むハイネに視線をやった。
「……で、こいつはどうするんだ？　さっきの技でミンチにするのか？」
「ひっ！」
何気なくスノウの発した一言に、ハイネが真っ青な顔で涙を浮かべる。
さっきの技も何も、俺、今は動けないんだが。

だが今のハイネはそんな事にまで頭を回す余裕はなかったらしい。

「まあ、別に生かして帰してやる理由もないしなぁ……」

アリスがショットガンを意味もなくリロードさせ、脅すようにジャコッと大きな音を立てさせた。

「あ……ああ……」

涙目で部屋の隅で震えるハイネを見ながら、俺はある事を思いつく。

「おい、ハイネ」

「ひゃいっ！」

突然の俺の呼びかけに、ハイネが裏返った声を上げる。

「見逃してやるよ」

シンと静まり返る部屋の中。

「……うっ……ううっ……ぐすっ…………」

ハイネが、なぜか急に泣き出した。
「お、おい、お前何で泣くんだよ！」
「……ろ、六号様……。相手は魔物とはいえ、その……どうか、あまり無体な事は……」
「……ま、まあ気の毒だが、仕方ない。炎のハイネ、相手が悪かったと思って、その、諦めて……」
「お前ら、ちょっと俺とお話ししようよ。まだ見逃してやるって言っただけじゃん」
日頃の行いって大切だよな。
「それじゃあ六号、コイツはタダで帰しちまうのか？」
「そんなわけないだろう」

アリスに即答する俺に、ハイネが絶望の表情を浮かべた。

「大した事じゃないからそんな顔すんな！　おい止めろ！　まだ何もしてないのに俺がすげー悪者みたいじゃねーか！　そんな顔は、ちゃんと俺が何かやってからにしろ！」

「……じゃ、じゃあ……。あたしは、何をしたらいいんだ……？」

おどおどと尋ねてくるハイネに向けて。

「停戦しようぜ、一月くらい。それがお前を見逃す条件だ。それが呑めるなら、今日のところは部下を連れて帰っていいぞ」

俺はそう言って笑いかけた。

「……停戦なんかが条件で良かったのか？」
グリフォンに乗って大量の魔物を引き連れ、街から引き揚げていくハイネを見送り、スノウがぽつりと呟いた。
「いいんだよ、一月持てば。俺にちゃんと考えがあるからな。……しかし、何とかなっちまったな。おいお前ら、今日から俺を呼ぶ時は、六号さんって呼ぶんだぞ。毎日感謝しろよ、いやマジで。今回はそんくらいの大活躍だろ。特にスノウ、お前何でもするって約束だからな。この後分かってるんだろうな。今から風呂に入って、ちゃんとキレイキレイしてくるんだぞ」
「……そうです、下に降りて、頑張ってくれた兵士の皆さんを労わないと！」
「おい六号、お前動けるようになったら、ちょっと相談したい事があるから下に来いよ」
俺の言葉を聞いたティリスとアリスは、そう言い残すと出ていった。
「……別に、寂しくないから。こんなの慣れてるから。スノウ一人でも別にい

いから」

部屋に残され、呟く俺に。

「……その……。六号、いや、た、隊長……。虫のいい話だとは思うんだが、頼みがあるんだ……」

スノウが、珍しくしおらしい口調で、その場に屈み込み、落ちていた何かを拾いながら。

「……その。私はやはり騎士として、ユニコーンからはまだ降りたくない……。それは、とても身勝手でわがままな事を言っているのは理解している……」

そのまま拾った物を両手で抱え、動けない俺に近づいてきた。

それは…………。

ガダルカンドの頭だった。

「……すまない、隊長。もちろん無理にとは言わない。これは、ただのお願いだ……」

「おいやめろ、お前なんでそんな物持ってんの、それを持ってなんで俺に近づいてくんの」

スノウは申し訳なさそうに眉根(まゆね)を寄せて、

「どうか、その……同衾(どうきん)だけは、今はまだ見逃して貰(もら)えないだろうか……」

「やめてぇ！　何する気だよ、敵とはいえ死体で遊ぶのは良くない！　止めろ、近い！　怖(こわ)い、怖いって！　ガダルカンドの顔超(ちょう)怖い！　分かった、分かったから！　もうどうでもいいし！　貸しなんて、約束なんてどうでもいい

から！　おい近いって、ガダルカンドとキスしちゃう！」
それを聞いてガダルカンドの首を捨てたスノウに、俺は憤りをぶちまけた。

「こんのアマー！　こんなこったろーとは思ってたよ！　アスタロト様といいお前といい、女ってのはいつもそうだ、都合いい時だけ上手い事利用して、いざ報酬って時は泣いてごまかすとかな！　バーカバーカ！　お前なんか、最初会った時から気に入らなかったんだよ！　早く俺を置いて、みんなの」

早口で罵声をぶちまける俺の口が、そっと柔らかい物で塞がれた。
スノウが自分の唇を触れさせたのだ。
身動きが取れないまま絶句している俺に、スノウは顔を赤くして。

「すまない、今はこれで……許してくれ……」

突然の事に何も言えないでいる俺に。

「お、お前が、私の事を好いてくれるのは、別に嫌じゃない。抱きたいと

「お前が私の事を好いてくれるのは[illegible]……[illegible]
言ってくれるのも、嬉しくないと言えば、嘘になる。……だが、私は好きだと
か、嫌いだとかがまだよく分からない。でも……」
スノウはその白い肌を火照らせて。
「最初に出会った時より、お前の事は嫌いじゃない。今はまだ良く分からない
けれど……これからゆっくり、お前の事を考えていこうと思う……」
そっと、優しく微笑んだ。

…………？

「お前さっきから何言ってんの？　何で俺がお前の事好きって話になってん
だよ、なにそれ怖い」
……。

「……えっ？」
「えっじゃなくて、何で俺がお前を好きって話になってんのって言ってんの。お前の事が好きだなんて、一言も言った覚えはないぞ」
　その言葉に、スノウは何を言われているのか分からないといった表情で、
「……い、いや、私と同衾したいという話なのでは……」
「顔と身体は結構好みだから、後腐れなく一発やらせろって意味だよ、言わせんな恥ずかしい。ってゆーか、嫌だよ俺、お前みたいな短気なヤツと付き合うとか。すぐ切れて剣振り回してくるし、出世欲に塗れてる上に金に汚いし、一体お前のどこを好きになれってんだよ。つーか、何キスぐらいでごまかして……」
　そこまで言った俺は、ハタと異変に気がついた。

「はぁ……ぁぁぁぁ……ぁぁぁぁ……」
　真っ赤に顔を火照らしたスノウが、涙目で息をゆっくり吸い込んでいる。
　まるで深く何かを溜め込んでいるような。
　大泣きする直前の子供が、今から感情を爆発させようとする状態のような。
　スノウはかたかたと震える手で、腰の剣に手をやった。
「……落ち着け、話をしよう。ほら、今俺動けないからな？　お前がキレて斬りかかったら、俺、確実に死んじゃうからな？」
「はぁぁぁ……ぁぁぁぁ…………ぁぁぁぁ」
　俺の言葉を受けたスノウは、ここで感情を爆発させればどうなるかは分かっているのだろう、なんとか耐えようとしているのか、ブルブルと身を震わせている。

だが、ゆっくりと、ゆっくりと手は剣の柄の上に置かれ……。

「耐えてくれスノウ、俺も悪かった、言い過ぎた。でも、これだけ頑張らせといて俺が死んじゃったら、そりゃもうめっちゃ後味悪いぞ？　よし、お前は我慢ができる子だ、頑張れる子だ！　ゆっくり息を吐きながら、冷静に素数を数えていくんだ」

「い、1……3……ご、5……、ななな、7……」

《クールダウンが終了しました。戦闘服が使用できます》

　俺が全力で駆け出すと、スノウが泣きながら追ってきた。

「うわあああああああああああ！　あああああああああああああああああーっ!!」

　スノウの、泣き声みたいな叫びを聞きながら。

　迫りくるバーサーカーを振り切るため、

「制限解除！　制限解除――!!」

俺は声を嗄らして叫びを上げた――

「──おし、これでもう文句はないな」

今の時刻はそろそろ深夜零時になろうかという時間帯だ。

魔王軍が去った今、もう俺達がここにいる理由もない。

「六号様……。お疲れさまでした。まさかここまでやってくれるとは思ってもいませんでした。本当に、ありがとうございました」

「そう思うのならもうちょっと誠意を見せてくれてもいいんだぞ。この国の歴史の一ページにしっかり俺の名前を記して、後世に伝えてくれよな」

そんな俺の言葉にティリスがはにかみながら小さく頷く。
腹黒いお姫様かと思えば、急に見せてきた素直な一面にちょっとだけ驚いた。
……いや、国が滅ぶ危機を乗り越えた事で、ホッとして年相応の素が出たのだろうか？
ぼんくらな王様に代わり自分がしっかりしなければと、普段から肩ひじ張っているのかもしれない。
そんなお姫様は、しばらく何かを尋ねたそうにした後。
「……その、六号様。あなたがどういった任務を帯びてここに来たのかを、多少は理解した上で言います。……もう一度、この国の騎士になるおつもりは……」
おずおずと申し出てくるティリスの誘いに首を振り。

「うーん。いや、もう騎士はいい。変な部下達のお守りで正直疲れた」
　俺の答えにティリスは、ちょっとだけ寂しそうに、そして答えは分かっていたのか、仕方ないとばかりに苦笑する。
　それを聞いた二人の元部下が、
「変な部下って、ひょっとしてあたし達の事ですか!?　酷い！　いくら隊長でもかじりますよ！」
「隊長は、私とあんな特別な事までして置いてくの……？　こんな体にした責任取ってよ！」
「お、おい、止めろよグリム、人に誤解されるような発言するなよ、新しい車いすやって駆け回っただけだろ……。痛い！　おいロゼ止めろ、悪かったからかじるな！　かじるな!!」
　背中におぶさり齧みついてくるロゼを引き剥がし、帰る準備をしている

と。
「…………」
背後に、無言のスノウが立っていた。
「……？　何だよ、何か言えよ。無言で佇んでると怖いだろ」
憎まれ口を叩く俺に、スノウはなおもジッと黙っている。
まださっきの事を怒っているのかもしれない。
「……おい。もうここには来ないのか？」
ようやく口を開いたと思ったらこの女は……！
「何だお前、そんなわざわざ釘刺さなくても、呼ばれなきゃ来たりしねーよ！」
いつも通り突っかかる俺の言葉に、スノウがぐっと息を呑む。
「お、お前は、国に帰るのか？」

「……で、お前は国に帰るのか？」
「そりゃあ帰るさ。ここにいるとどこかの誰かがおっかないしな。それに、ここでの目的は大体果たしたし」
　スノウは、軽く俯くと。
「…………そうか」
「……さっきから何なんだ、いつもの短気ぶりはどうしたんだよ。言いたい事があるならとっとと言えよ、この後アリスに呼ばれてんだよ」
　その言葉に、スノウはギュッと拳を握り。
「……げ、現在、我が国は今夜の魔王軍との激戦で、甚大な被害を受けた。よって、部隊の指揮をできる人間や、戦える人材を探している」
「…………それで？」
　言うかどうかを迷うような、そんな素振りを見せた後。

「……もうお前が何者でも構わないし、素性も問わない。私のような、手のかかる部下が嫌で騎士になりたくないと言うのなら、その……。傭兵とか……」

言っている事が途端に尻すぼみになっていくスノウ。

コイツは、俺を追い出した事をまだ気に病んでいるらしい。

「つまり、戦力になる人材が欲しいんだろ？」

「そ、そうだ。しかし、強ければ誰でもいいと言っているわけではなくて……」

いつもの強気な発言と気の短さは本当にどこいった。

……まったく、どこまで面倒で厄介な女だ。

そりゃあ厄介者ばかりのあの集団に左遷させられるってものだ。

と、ふと気づく。

俺の目の前で、捨てないでくれと訴える子犬みたいな視線を向けるスノ

ウだけじゃない。

俺が周りを見てみれば、元部下の連中やティリスまでもがどこか期待した目でこちらを見ていた。

本当に、なんて面倒で厄介な連中なんだ。

俺の仕事は戦う事。

そして、この星にはまだまだ戦いの場がたくさんあるのだ。

目の前のこいつらは戦えるやつを欲している。

なら、ここは足元を見るべきで、言うべきことは一つだろう。

俺は目の前の女に向けて、キッパリと言ってやった――

「――戦闘員、いかがですか？」

そろそろ深夜になろうかという時間帯。
　俺はある男の部屋のドアを叩いていた。
「……誰だ？」
「オレオレ。俺だよ俺」
　その言葉に、男は無防備にドアを開け……。
「なんだ、ギアか？　ザクロか？　今日は呼んでいないだろう、今私は忙(いそが)し……」
「いよう！　俺だよ、六号だよおっさん！」
　何か言いかけた参謀(さんぼう)のおっさんが慌(あわ)ててドアを閉めるが、そこにブーツの

つま先をねじ込んだ。

「ぐああああああ！　痛い痛い、足があああああ」

俺の悲鳴を聞いた参謀が慌ててドアを開けた瞬間、そこに平気な顔で入り込むと、後からアリスもついてきた。

「なっ……、ななっ、なんだお前達は！　勝手に入ってくるんじゃない！」

怒りをあらわにする参謀を無視し、俺とアリスは部屋を見回す。

「……おうおう、流石は参謀様。随分とお高い物をお持ちのようで……」

「おい六号、ざっと見ただけで総額が億を超えそうな調度品の数々だぞ」

マジかよ。

「……調度品全部くれたら、俺、見逃しちゃいそうだ……」

「おい、そこはちゃんと耐えてくれ」

俺とアリスのやり取りに、ついていけてない参謀が。
「お前達！　この私に、こんな時間に何の用だ！」
「おいおい、バカ丁寧ないつもの口調と違うじゃないか。こっちが本性か？」
「小物の見本だな。表と裏で口調を変える。コイツはキャラ立ってない悪党の典型だよ、六号」
参謀は、何かに耐えるように顔を伏せ。
「…………………なんの用だ!?」
「……いやな？　なんかさ、スノウから色々聞いちゃってな。おっさんが俺達の事嫌ってて、スノウが素性を探らされるハメになった、とか」
「うんうん。出世させてくれるって話に釣られて六号の部屋に来たんだが、そこで偶然話を聞く事になった、とか。その件について色々謝られてな」
その言葉に、参謀の顔色がこれ以上ないぐらいに青ざめる。

「……い、いや、その……」
「そんな訳ないよなー？　おっさん俺の事、会議の時とか英雄だって言ってくれたし」
　俺の助け舟に、参謀はパアッと喜色を浮かべ、
「え、ええ！　そうですとも、六号殿は我が国の英雄です！　そんな方をなぜ嫌うのですか！」
「だよな。きっとスノウの聞き間違いかなんかだよな」
　そんなアリスのフォローにも、コクコクと何度も頷いた。
「ええ！　ええ！　そうですとも！　……いや待てよ？　スノウ殿はこう言っていました。六号殿を斬り捨てたい、と。あの女は、元は卑しいスラムの出です。こんな戦時中でなければずっと一兵士が関の山だった娘です。それがマグレで出世した事で、身の程知らずにも欲が出たのでしょう。きっと私

の地位を狙（ねら）い、六号殿をそそのかし、謀略を仕掛（しか）けてきたのですよ……！」

「マジかよ！　ひっでえ事すんなアイツ！　そういやさ、ロゼっているじゃん？　アイツってさ、爺（じい）さんの遺言（ゆいごん）とやらを守ってなんか変な石を探すために、ここでタダ働きに近い状態でこき使われてんだろ？　これは誰が考えたんだ？　こんなに素晴（すば）らしい案はそうそう思い付かないぞ」

「それを言うなら、あの厄介者集団をまとめ、効率的に捨て駒（ごま）にする計画もだな。いや、実に良く考えられてるよ。大したもんだ」

　そんな俺達の言葉に、参謀はこれ以上にないぐらいに満面の笑（え）みで。

「実は、それは私が考えたのです！　ティリス様は政務には長（た）けているのですが、やはり温室育ちのためなのか、不要な者を切り捨てるという事ができません。そこで、この私がそのご負担を軽減してさし上げたわけですよ。

伊達に参謀という肩書きを持つわけではございません。いや、自分で言うのもなんですが、この計画はなかなか出来が良く……」
…………。
「なあアリス、もういいか？　もう充分だろ。最初から言ったじゃん、コイツ、スカウトする価値なんてないって」
突如豹変した俺に、参謀がギョッと目を剝いた。
「そうだな。自分はこのおっさんとは会ったことも話した事もなかったから、もしかしたらと思ったんだが。こいつは悪じゃない。タダの姑息な卑怯者だ。……どうした六号、胸を押さえて」
「い、いや、何か分からないんだけど、なぜかその言葉が胸に刺さって……」
と、俺が胸を押さえていると。
「……な、なんだいきなり!?　急に態度を変えて……。何が気に入らなかっ

たのかは分からないが、悪かった、それよりもこれからの事だがな……」
　言いわけを募らせる参謀は、アリスが机に何かを叩きつけると首をすくめて黙り込む。
　机に叩き付けられた物は……。
「な、なんだこれは？」
　レンコンだった。
「蓮科の食べ物で、様々な薬効もある優れ物だ」
「……そ、それが？」
　アリスが参謀に、無表情な顔をズイと寄せた。
「おいお前。ケツにレンコン植えられてーのか」
「ひいっ！　な、何を言い出すんだ、この娘は！　た、食べ物は大切にと教わらなかったのか！」

らなかったのか」
　子供にしか見えないアリスだが、悪の組織の構成員が醸し出す迫力に押されたのか、参謀が顔を引き攣らせて後ずさる。
「終わった後、ちゃんと調理して食べればいいんだろ？　自分は物が食えないから、これを処理するのはお前だけどな」
「なっ……なな、何を言って……」
　参謀がジリジリと下がる中、俺は手にした物の一部を、ビッと音を立てて引っ張った。
「……な、なんだそれは……」
　参謀は俺の手にした物が気になったのか、それが何なのか聞いてきた。
「これはな、対薄毛男性用懲罰兵器だ。ごく一部の地域では、ガムテープとも呼ばれている」

「ひいっ！　や、やめてくれ、何をする気だ、止めてくれ！」
　参謀は、実は結構気にしているのか、自分の薄い頭を押さえて懇願する。
「そんなに心配しなくても、これを頭に貼り付けて、バリッとやるだけのお手軽兵器だよ」
「や、やめてくれ！　やめてくれぇ！　金か！　金なら払う！　だから、だから許してくれ！」
　レンコンを手に持ち直したアリスは、そんな参謀の懇願を無視すると無表情で顔を寄せ、
「おいおっさん。お前いっぱしの悪のつもりならな」
　俺はアリスの言葉を引き継ぐように、ビッとガムテープを張りながら、
「誰かをハメようとする時は、逆襲される覚悟はしとけ。……可愛い部下の

お礼参りだ。さあ、レンコンかガムテープ。どっちがいい？」
　俺の言葉を聞いた参謀は、泣き笑いみたいな引き攣った表情を浮かべていた。

《悪行ポイントが加算されます》

　――参謀の部屋を後にした俺達は、荷物を取りにアジトへ向かって歩いていた。
「……しかし六号。今回は、アホなお前にしては実に上手（うま）い事考えたな」
　と、ふとアリスが口にしたその言葉に。
「ん？　何だ、上手い事って。あと、アホは余計だ」
　言っている意味が分からず聞き返す。
「お前、分かっててやったんじゃないのか？　色々とこ

……お前、分かってやってんだか、いないのか、何だ？」

「……？」

やっぱり言っている意味が分からない。

「スノウと約束したろ。雇われ戦闘員の」

「ああ、その事か。日本に帰れるまでの間だけな。まあ、魔王軍とは一月は休戦中だから、ヘタしたら一回も戦闘しないで帰るかも分からんが。それがなんで上手い事になるんだよ？」

アリスはアンドロイドのクセに呆れた表情を浮かべながら。

「……お前、今の悪行ポイント見てみろよ」

……百九十ポイント。

「……あれ？　なんかポイント増えてるな。なんだこれ？　スノウのパンツ下ろしと参謀イビリだけで、なんでこんなに貯まってるんだ？」

「よく見ろ。ポイントの隣になんか付いてるだろ」

「よく見ろ、ポイントの隣になんか付いてるだろ」

よく見てみる。

……………………マイナス百九十ポイント。

「なにこれ」

「なにこれじゃねぇよ。お前、ポイント全然足りない状態でRバッソー呼べとか言ったろ」

!?

「ポイントマイナスだから、このままノコノコ日本に帰ったら速攻で制裁部隊にとっ捕まって、マイナスポイント分折檻だな」

ウチの組織には制裁部隊というものがある。

本来なら悪行ポイントはマイナスなんてされる事はないものだ。

だが、よほどの善行を積んだり、悪の組織の名を貶める恥ずべき行為を行った際にはポイントを減らされる場合がある。

悪行ポイントの合計がマイナスへと達した時……。
「……制裁って、物凄く恐ろしい事されるって聞いてるんだけど」
「らしいな。帰ってくると人格が変わってるヤツとかいるらしい」
……どどどど、どどど、どうしよう！
「アリス！　俺、日本に帰りたくない！」
俺にゆさゆさと揺らされながら、アリスが珍しい物でも見るかのような味のある表情で、
「お前、ほんとに分かっててやったんじゃなかったんだなぁ……。いいか六号。お前このままここに残って、転送機の移送空間が安定して日本に帰れるようになっても、雇われ戦闘員を続けとけ。そしてポイント稼いで、プラスの状態にしてから帰るんだよ」
「それだ！　まあでも、転送機が安定する間の一月があれば、ポイントをプ

ラスにもっていくのぐらい余裕だろ」
　そう、俺はこないだ短期間で、それ以上のポイントを稼いだのだ。
「お前、今手配されてる事忘れてるだろチャックマン。執行猶予中みたいなもんなんだぞ」
　あっ！
「いいか？　今回の報告書は自分が書いてやる。お前がまだ帰れない理由なんかも、自分がうまくでっちあげてやるよ。お前がポイント貯めるまで、自分もここに残ってやる」
「アリス様ー！」
　縋りつかれたアリスは、まるで子供をあやすようにポンポンと俺の頭を叩きながら。
「もう分かったから、お前は一刻も早くポイント貯めることを考えろ」

「任せろ相棒！　手始めに、俺の隊の連中のところに行って、早速全員剝いてくる！」

　そう言って背を向けた俺に、

「お、おい、本気か。つーか相棒ってなんだ。自分はサポート型アンドロイドの……」

　アリスが何かを言い掛けたが、俺はポイントを貯めるべく駆け出すと……！

「……相棒かあ」

　そんなに嫌そうでもなさそうな、小さな呟きが聞こえた気がした。

エピローグ

「……これは？」

　報告書に目を通したアスタロトが訝しげにリリスに尋ねた。

「アリスの提案だね。実に合理的で素晴らしいと思うよ」

　何やら楽し気なリリスの言葉に、アスタロトが額を押さえる。

「こんな……。これじゃ悪の組織じゃなく、正義の味方じゃないの……」

「いやいや、これで地球の征服後も当面は戦闘員達の仕事に困らない。悪くない提案だと思うよ。なに、報告書によく名前の出てくる同業者を追い出したら、その時に改めてこの星を侵略すればいい。それまでは、戦闘員を送り出しながらのんびり地球の統治を進めようじゃないか」

そんなリリスの提案に、
「……しょうがないわね。地球の征服も、予想外に粘られるから思っていたより時間がかかりそうだし。ところで……」
アスタロトが、会議室の隅に視線を向ける。
その先には……。
「戦闘員Fの十八号！　戦闘員Fの十九号！　呼ばれた理由は分かってるな！」
「お待ちくださいベリアル様！　今回は勇者が仕掛けてきたのです！　我輩がせっせと悪事に励んでいると、この男が邪魔をしてきまして！」
「ふざけるな風のファウストレス！　貴様が行っていたのは悪事ではなく、ただの姑息な小犯罪だ！　ベリアル様、俺はコイツの暴走を止めようと！」
ベリアルに対し言いわけを始めた二人の男。

その二人は、片方は怪人にしか見えず、もう片方は逆にヒーロー特有の空気を漂わせていた。
「うるさいぞ、喧嘩した事には変わりはないし、組織内での抗争は禁止だ！　それに、何度も言わせるな！　勇者じゃなく、戦闘員Ｆの十八号！　風のなんとかじゃなく、戦闘員Ｆの十九号だ！　勇者だなんだと六号みたいな事を言ってると、あいつみたいに取り返しのつかないアレになるぞ！　それに、風の～みたいな通り名を付けていいのは幹部になってからだ！　分かったか!!」
「「は、はいっ！」」
　声を揃えて敬礼する、二人の見習い戦闘員。
「……ねえ、あの二人はなんなの？　片方はヒーローの臭いがするし、片方は怪人っぽいし」

「あれかい？　ベリアルの話だと、突然（とつぜん）自分の家の庭先に現れて、そのまま喧嘩してたんだと。それで、二人とも何発かしばいて、戦闘員見習いとして連れてきたって言ってたね。あのFの十九号ってのが言うには、勇者を連れて炎（ほのお）の何とかの下（もと）に転移するはずだったのに、なぜか業火（ごうか）のベリアル様の下に……とかなんとか、わけの分からない事を言ってたよ」

……。

「あの子は、犬猫（いぬねこ）だけじゃなくてとうとう野良（のら）ヒーローや野良怪人まで拾ってきたの？　……まったく、六号は向こうに残るとか言い出すし、みんな何を考えているのやら……」

「……なにせ、あっちは戦争のせいで女性の比率が高いらしいからねえ。しかも、ほとんどが美少女ばかりらしいし。なんにせよ、僕も向こうに行きたいね。なにせあの星には興味を引くものが多すぎる。ロマンに溢（あふ）れた世界だ

……

よ！」
　そう言って、鼻息荒く部屋を出て行くリリスを、
「……か、帰ってくるわよね？　まさか向こうに現地妻とか作って、永住するとか言わないわよね？　……べ、ベリアル、報告書ここに置いておくわよ！　ねえリリス、六号はちゃんと帰ってくるわよね⁉」
　アスタロトは慌てたように、手にした紙を机に置いて、リリスに続き出ていった。

【最終報告】

現地でのアジト入手は無事成功。
怪人や戦闘員の受け入れはいつでも可能。
なお本人の強い希望により、戦闘員六号はしばらく現地での調査任務を続行する。
問題視されていた地球侵略後の戦闘員の仕事不足は、六号からのヒントにより解決策を発見。
以下、仕事不足の解決策は別紙、戦闘員派遣計画において説明。
なお、現在において侵略は得策ではない模様。
せめて、現地の同業者を撃退した後の侵略を推奨する。
現在、この惑星の実に八割もが未開拓地であり、添付した別紙の通り、

【戦闘員派遣計画、概要】

未開拓地の開発、及び生態系調査。
同業者『魔王軍』の殲滅、または組織解体、吸収。
惑星内における未確認オーパーツや遺跡の調査。
原住民の要請による、原生動物の駆除依頼など。
これらを秘密結社キサラギが請け負い、戦闘員を派遣する業務を行う。
なお、現地支部長は原住民からの信頼の厚い、戦闘員六号を推薦いたします。

あとがき

初めましての方は初めまして。

作家らしきニートっぽい何かこと、暁なつめと申します。

このたびは、『戦闘員、派遣します！』を手に取っていただきありがとうございます。

この作品は、以前小説投稿サイト、「小説家になろう」に掲載していた物を手直しした物になっております。

別シリーズ、『この素晴らしい世界に祝福を！』の前に書いた作品で、色々な諸事情を経て出版の運びとなりました。

物語を大雑把に説明すると、悪の組織の下っ端戦闘員が僻地に派遣される話です。

これは戦隊ものなのか、ＳＦものなのか、はたまたファンタジーになるのでしょうか。

まあ基本ジャンルはコメディなのですが。

さて、この作品ですが、これは魔王を倒して世界平和を得る事がゴールではありません。

未知の惑星に送られた六号とその相棒アリスですが、今後はこの星の未開拓地を現代兵器や超技術で開拓しながら、魔王と戦ったり現地の生物から逃げ回ったり、はたまたこの星の謎を調査してみたりと多岐に渡る事でしょう。

これから一体どうなるのか、どうか末永くお付き合いいただければと思います。

――今回この本を出すにあたり、とある作家さんに原稿を読んでいただいたりコメントをもらったりなど、たくさんのご協力をいただきました。

名前は出しませんが長月達平先生、どうもありがとうございます。

そして、素敵なイラストを担当していただきましたカカオ・ランタン先生をはじめ、担当編集さん、営業さん、デザインさんや校正さんなど、その他多くの製本に携わってくれた皆様、本当にありがとうございます。

恐らくですが、『この素晴らしい世界に祝福を！』シリーズだけでなく、こちらでも多大な迷惑をかけると思いますので、今の内に謝っておきます。

まずは迷惑かけない努力をしろとの苦情など受け付けます、ごめんなさい！

なんだか毎回原稿を上げるたびに、色んな人に謝っている気がします。

というわけで、それでは最後になりましたが。

この本を手に取ってくれた全て(すべ)の読者の皆様に。深く、感謝を！

暁　なつめ

カバー・口絵・本文イラスト／カカオ・ランタン
カバー・口絵・本文デザイン／岩井美沙（バナナグローブスタジオ）

戦闘員、派遣します！

暁 なつめ

2017年11月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『戦闘員、派遣します！』
2017年11月1日　初版発行

発行者　三坂泰二
発行　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

KADOKAWA　カスタマーサポート
［WEB］http://www.kadokawa.co.jp/
（「お問い合わせ」へお進みください）